

其方軍目附寬助兵衛御免代長坂血鐘九郎に被仰付候間可被得其意候
右一通

細川越中守
細川越中守

右之通軍目付割替被仰付候事
右一通

井伊掃部頭
朝倉藤十郎
同 脇坂淡路守
黒田五左衛門

十一月十五日大老酒井忠績退職す

〔探 索 書〕

（十一月廿二日附風説書ノ一節）

一當月十五日酒井大老同十七日同飛騨守様御退職ニ相成候事

〔江都探索書〕

御城出之御城使御坊主小谷最悦より手ニ入候御觸達寫等ノ内酒井雅樂頭事御役御免如前々溜詰被仰付旨十一月十五日
於江戸中渡候間爲心得向々ニ可被相達候事

酒井飛騨守事御役御免前々之通屬之間詰被仰付旨十一月十七日於江戸表申渡候間爲心得向々ニ可被達候事
十一月十九日於江戸表稻葉幾餘翁若年寄被仰付兵部少輔と改名同廿日松平周防守加判之列被仰付候事

座順

伯耆守次

周 防 守

玄蕃頭次

兵 部 少 輔

十一月廿六日頃井上河内守様御加判之列被仰付云々（下略）

青 地 源 右 衛 門

御城出之御城使御坊主より手ニ入候御觸面寫

十二月五日壹岐守殿御渡

大 目 付
御 目 付

於江戸表去月廿六日井上河内守事加判之列被仰付座順之儀ハ伊賀守次と相心得且又外國御用取扱並御進發御供被仰付
候間早々上坂可致旨被仰出候此段御供之面々ニ可被達候事

十一月十五日講武所調役岡田斧五郎本藩森井惣四郎を來訪し水野癡雲小栗上野介栗本瀬兵衛池
田播磨守山口駿河守等黜陟の事に應援盡力を乞ふ

〔京都大探索書〕

聞取

一當月十五日講武所調役岡田斧五郎殿參らま内話有之候趣ニハ肥後之正義を以

下二付札
江戸下廻ニ參候探索書等御向、濟不申候間明日之御便ニ御向參候筈ニ御座候尤各別之儀ニても無御座候右之内此

慶 應 元 年

一冊ハ味御座候様相見申候間寫取上申候御向へも御出可被下候是等之事も森井方微細ニ閣老へ言上いたしたる哉
奉存候夫方田澤侯御東下ニ爲相成歟と物ニ愚考仕候事御座候

京師關東に盡力有之候趣兼而承居申候處今日突然に罷出斯々之秘事を明し候ハ必發狂とも可被思乍然切迫之形勢不得止罷出候儀ニ而其邊ハ能々景察可被致拙者今日罷出候儀ハ此度京師ニ而阿部松前貶黜被致候處其後必黜陟速ニ可有之希望いたし居候處其運ヒ一向相見不申全躰阿松之兩人之謀主ハ關東旗下ニ而西洋僻之群姦より出候事ニ而御座候右群姦之存意ハ日本列藩を仆して郡縣トふし上ハ天子をなまし西洋之國体同様ニ致之企有之此度長州御進發茂矢張長州を仆し次第ニ列藩を滅之趣意將又其勢を以京師を侵壓倒もる之腹出たる事ニ而群姦中ニ而尤其魁なる水野癡雲小栗上野介栗本湖兵衛池田播磨守山口駿河守等より然處會津ニ而阿松之兩人を黜候而根本謀主之巨魁を在職せしめ候之何共殘念至極又々如何成事件相企候難計以後逆も矢張同様ニ可有之實ニ恐るべき之至ニ御座候間何卒會津方屹度群姦ニ嚴罰を加候様肥後盡力有之度此度各國軍艦攝海へ廻り候事畢竟群姦之所爲ニ出候儀ニ而御座候將又兵庫表ニ而勅意を矯候定約書取戻として山口栗本東下致候處栗本ハ反而姦計を企而佛夷ニ説得致候ニハ京師ニ而ハ未兵庫開港好不申其證據ニ京師方被仰出候御別紙夷人に見せしめ右之次第ニ付再攝海に廻り京師を脅し若聞入不申節之發炮致し候茂不苦何様兵庫開港出來候様有之度と夷人を奮發せしめて再攝海に廻の企有之候へ共佛夷聞入不申故空しく相成申候右之次第ニ而是非共群姦を除き正義之士を拔擢いたし挽回之基本相立申度若此度之好機會を失ひ候而之日本再盛之見込逆も無之何卒會津至極ニ黜陟ニ奮發いたし候様有之度右之周旋吳々茂相頼可申と切迫之内話頻ニ御座候間關東之黜陟外諸侯方免哉角議論致候儀ハ誠ニ恐多決して有之間敷儀ニ御座候まかし態々是迄御出ニ相成候御内話之儀ハ至極之思召と奉存候重役に内話いたし其上差圖次第ニ會津に御論説之趣可申述何分一存之御返答ハ出來不申段返答仕置申候
一同廿日岡田殿に返禮旁罷出候處猶同人方之内話ニ之此度外夷御所置筋被仰出候一條定約御許容と申儀ハ極々輕く心得候而至當之所置云々之處屹度重く相心得不申候而之難相成至當之所置ハ逆茂快く聞入候儀ニ而無之候間右所置いたし

候てハ戰爭之腹斷然と居へ候而取懸不申候而ハ相違不申然處關東ニ而戰爭之腹居まり候儀甚六ヶ敷板倉閣老も昨年迄在職ニ而有之候へ共至當之所置一向相立不申候之矢張關東ニ而戰爭之腹無之故ニ而御座候此後正義之士在職いたし候而茂右之腹すまり不申候ハ、又々昨年と同様ニ可相成候間何卒右等之處も盡力いたし吳候様との儀ニ御座候
一同廿三日岡田殿再ひ參らる内話之趣ニ之當時之群姦中ニ之西洋教學所を相建陸軍所海軍所等ハ右學校方もべ候様いたし追々と之夷人右學校に雇入可申との企有之既ニ當夏之比之昌平學校破却之論も有之候處其儀ハ當時先相止居申候惣躰昌平學校廢棄之論三四年前より起り居候儀ニ而右巨魁之矢張水野癡雲小栗上野介等ニ而御座候右之次第ニ而一日半時茂黜陟ハ急キ不申候而難相叶儀ニ御座候との内話ニ御座候以上

十一月廿五日

森 井 惣 四 郎

十一月十五日閣老板倉勝靜同小笠原長行我藩留守居上田久兵衛を華城に引見して攝河泉問題につき上京周旋すべき旨を内諭す時に久兵衛兵庫横濱に關する曖昧談判の非を論し且つ一橋慶喜を水戸に移すの得策にあらざる所以を説きて其同意を得たり

〔肥後藩土登編〕
上田久兵衛先生略傳並年譜

十一月十五日

○晝、新美河内守様より御達、伊賀守様御用ニ付登城仕候様との事にて出方、板笠兩閣老小野藩一同御達、橋公攝河泉之儀、病大ニ深ク御困窮ニ付、余ニ登京周旋いたし殿下を篤斗奉説、急々罷下吳候て、行違笠侯御登京可有之との事、尤今日伯州御下坂之由ニ付模様も可有之、明日尙登城仕候上ニ而愈之儀ハ取究可申との御相談、其外縷々御密話余兵庫横濱等之曖昧御談判之非を論し、明日屹度根據を得候後、登京可仕段申上、若其儀ニ行當り殿下ニ而敗軍いたし候は、御内察の御用も行レ不申との見込申上候處、板倉候尤御同意、若も久兵衛土産共持下り候てハ大變との御

笑話、絶倒、橋公水府へ移ス之策、今日ハ不可然との儀を等候へ争、侯曰、瓜熟して蕪落之時ニあらずや、余云不然々々、遂ニ御同意(原註)(日録)

十一月十六日日本藩老臣小笠原美濃熊本に歸着す

元治元年ヨリ慶應二年迄
〔御國江戸往來狀控〕

以別紙申達候美濃方去ル十六日無異儀爰許着ニ而候此段爲御存申達候以上

十一月廿二日

御 中 老
御 家 老

郡 夷 則 殿
三宅藤 右衛門 殿

十一月十六日井伊掃部頭使者を大坂の我藩邸に遣して來廿一日より藝州に出張すべき旨を通報す

文久三年四月以來
〔大坂返達御用狀扣〕

十一月十六日 十二月五日着

青地 上田よま
佐野 河口よま

(前略)

一井伊掃部頭様藝州廿日市迄御出張之儀御達ニ相成候付而御案内旁今日御使者奈越江忠藏を以被仰進候御口上扣一通差上申候承候處來ル廿一日よま御出張ニ相成候管と申事ニ御座候

越 中 守 様 には

掃 部 頭 様 には

今般掃部頭儀藝州廿日市迄出張之儀御達相成候就而之於先々ニ萬端無御覆藏御打合御座候様被致度右御案内旁以使

者被申達候

十一月十六日日本藩留守居上田久兵衛閣老松平宗秀同小笠原長行に謁し對外談判等機密の政務に關する詰問に答ふ

鈴木 登編
〔肥後藩士 上田久兵衛先生略傳並年譜〕

十一月十六日

○晝前より森行、段々申談、波多野小太も來居ル、ハッ比登城、宮津、唐津兩閣老御逢、機密之大事件々御書取御見せ御相談、宮津侯蒸氣船にて突然横濱に至る之策尤宜、橋公攝河泉之病尤深ク不可治、已ニ朝廷ニ而は三國宛行之御書面も出來居候との事故、最早久兵衛を遣ス事ハ止メ、叔良策を講求可致との事ニ而五萬石急ニ出し其上ニ而總督御斷之書達ハ可然歎之儀、頓斗御同案ニ出、赤壁火攻掌中之寫ニ比して初ニ笑、兵庫一失横濱再誤之邊、伯州侯之面前ニ而斷然討論、伯州黙々壹州も逡巡之意アリ、幕後退出(原註)(日録)

十一月十六日濃州八幡藩主青山峯之助米人宿寺麻布善福寺警衛を免せらる

慶應元年廿年
〔風 聞 書〕

十一月十六日

持歸

和 泉 守

宅に青山峰之助來呼可渡書付

慶 應 元 年

三五五

見出し

青山峰之助

亞墨利加人宿寺麻布善福寺警衛被成御免候

右書付持廻り同夕留守居評渡之

十一月十七日日本藩留守居上田久兵衛閣老小笠原長行に見え横濱に於ける對外談判は獨之を松平宗秀にのみ委任すべきにあらず長行も亦親く出張するの必要ありと進言す

〔從京都來候探索書等〕

聞取書

十一月十七日上田久兵衛儀小笠原壹岐守様に罷出今度於横濱夷人に御談判之一條者誠ニ天下之大事件ニ御座候處右御用松平伯耆守様に被 仰付候伯耆守様に者既頃日兵庫ニ而之御談判重疊御不手際ニ被爲在又候鼠色之御談判ニとも相成候而ハ此節之儀相濟可申様茂無之候付今御登人英邁之御方様御人撰ニ相成候様有御座度天下舉而之希望此事ニ御座候間乍恐壹岐守様得御熱考被爲在候様仕度御直ニ申上候處至當之中分御同意思召候得共何分御體任其人を不被爲得久兵衛見込茂有之候哉被仰聞候付左様之御儀ニ御座候ハ、無力次第ニ御座候得共乍恐壹岐守様に茂御一同御出役相成候而者何程ニ可有御座哉既頃日天保山之御談判壹岐守様被成御勤其剛夷人談判筋者御見込茂被爲在候哉之御噂茂御座候趣ニ竊ニ奉承知候次第ニ而引續兵庫表之御談判茂伯州様御一同御勤之儀 朝廷より御沙汰茂被爲在候處被惡ニ御當病ニ付伯州様御登人之御應接ニ相成候處其御應接振御充分ニ不被爲至候ニ付而之壹州様御出張ニ相成候ハ、ケ様ニ迄ハ有御座間敷一統實ニ切齒仕候次第ニ而此度壹州様御出張ニ相成候ハ、 朝廷者申ニ不及一統茂必定本懐之儀ニ可奉存段申上候處御自身様御出發之儀者何之御差支茂無之候得共伯州様御登人之御談判無覺東候間御自分様ニ

茂被成御出張度とハ御自分様ニ者難被仰出右件々之趣被合伊賀守様に參上久兵衛腹一杯之所無伏藏申上候様被仰聞候ニ付翌十八日伊賀守様に罷出右之次第具ニ申上候處一々尤之儀ニ御間通被成御感心候間得可被仰談段被仰聞候付久兵衛引取罷歸申候由(下略)

十一月廿日

松本彦作

〔肥後藩士登編 上田久兵衛先生略傳並年譜〕

十一月十七日

○早朝後、唐津邸ニ至り調ヲ乞フ、蓋伯州面前盡サ、ル處アリ余謹テ曰、此節横濱港之談判、一伯州侯ノミにては天下安心仕間敷、已ニ兵庫ノ御失休有之候而ハ、朝廷ニ而も伯州侯ハ御安心有之間敷、侯ニも御安心ニ相成候哉と奉伺候處、成程尤ナレトモ、無人誰を見込有之哉との御尋、別ニ見込ト申は侯之外無之、朝議之日、諸藩も侯之御出と奉頼居候を御不例にて御出無之、夫故大ニ失望、今度も又伯州侯計ニ而ハ侯を奉議候者多分可有之、又今度も誤ル時ハ最早取返し難く相成、蒸氣船ニ而暫時之御往復丈、是非共御出有之度段懇願申上候處、至極御飲込、然は随分參り可申、乍併自分より薦ル事ハ難成、伊賀殿ニ委細申上見候様、若伯州ヲ捨テ余一人と申而ハ如何可有之、兩人之方可宜との御事、素より其通可然奉存候段申上、序ニ關東昌平費ヲ壞之議アルヲ伺、且洋服一刀之説共申上、夫ハ萬々無之事との御返答、大老並飛騨様御免、防州復職、井上河内様御學用、扱其後ニ水野泉州ヲ斃ス等との機密伺取、明朝御登城前ニ板閣老へ參調之儀奉約引取(日録)

十一月十八日

○朝早飯、板倉侯行、云々、拜調、昨日之儀呈論、至極御同意(日録)

十一月十八日幕府は征長出師手當として米壹萬俵を本藩に下附すべき旨を達す

慶應元年

三五七

〔文久三年四月以來〕
〔大坂返達御用狀扣〕

十一月廿一日 十二月二日御着
青地上田河口より

〔前略〕

一去十八日板倉伊賀守様より御呼出ニ付久兵衛參上之處（中略）爲御手當米壹萬依被下候段之御書付一通御用人を以被成御
渡候付則差上申候（下略）

ツマニ
細川越中守に
細川越中守

長防御所置之儀ニ付而ハ再々人數差出候付爲御手當米壹萬依被下候尤最寄御代官より追々可相渡候間請取方之儀者御
勘定奉行可被談候

〔全書〕

長防御所置之儀ニ付而者越中守儀再々人數差出候付爲御手當米壹萬依被下候段去十八日御達之趣越中守於國許承知仕
候上御禮動向之儀如何程ニ相心得可申哉此段奉伺候以上

細川越中守家來
青地源右衛門

十一月廿一日
付札
使者差出候様可仕候

〔全書〕

十二月廿六日 正月七日着

河口より様書

長防御所置付而再々御人數被差出候付御米御拜領之御名前別紙一通差進申候（中略）
板倉伊賀守公用人に及問合手ニ入候御手當米御拜領之御名前書寫

壹万依	松平安藝守
七百依	松平近江守
五千依	井伊掃部頭
五百依	井伊兵部少輔
三千依	榑原式部大輔
二千二百依	阿部主計頭
六千五百依	小笠原左京大夫
五百依	小笠原近江守
五百依	小笠原幸松丸

十一月十八日關老松平宗秀橫濱對外談判の趣旨方針を定む

〔慶應元年八月以後〕
〔江都探索書〕

御城出之御城使手ニ入候書付三通左之通
一御坊主木村養哲より手ニ入候寫ノ内一通
伯州侯より今度橫濱談判之趣意
一外國和親實正ニする事

慶應元年

- 一 右實正ニする事根本之公武御一和之事
- 一 商法を嚴格ニ立る事
- 一 萬事誠實を本として互ニ公明正大ニ可處置之事
- 一 兵庫を鎖し外ニ代港不開事
- 一 京師に居留地之願被差止候事
- 一 長州に相廻り候儀之以外不宜此外之儀も御一和ニ障候儀致間敷候事
- 十一月十八日
- 右十二月十一日青地源右衛門報告

十一月十八日柴田日向守の一行英國倫敦を發し佛國巴里に赴く

〔尊攘録新聞紙並夷情探索書〕

日本新聞第二百十二號

千八百六十六年三月十七日寅二月 横濱開板

本月四日十一月十八日柴田日向守并附屬の者「カヒタン」「ブライン」と共ニ龍動を出立して巴理ニ赴たり此一行の夫ハ當月十九日マルセイユより乗船して日本ニ歸るるし歸國の時ハ種々の細工物製造品書籍等甚多く携へ歸るへし柴田ハ旅行中英國ニて懇親ある待遇を受け満足成様子ナリ

第十二月二十九日柴田日向守ランカムホテル旅館ニ於て海陸軍の士官其外の者を饗應したり饗應の前柴田ハ「マシヨル」「ブライン」と共ニ待遇の間ニ出て諸賓ニ挨拶を爲したり日本士官より出席したる者ハ水品鹽田三郎福池小花より柴田并ブラインハ中座ニ就き其餘四十人計り主客各左右ニ列座し盛ニ蠟燭を点し夕第八時大饗應を設けたり

碓泊の軍艦五艘商船十二艘入津船二艘出帆船五艘

豊歩銀の相場百トルラルニ付買直段二百六十三個賣直段二百六十一個

首 藤 敬 助

十一月十九日關老板倉勝靜上田久兵衛を引見し關老板松平宗秀に従ひて横濱に赴き力を對外折衝に盡さんことを示諭す久兵衛固辭して其不可なる所以を陳述す

慶應元年八月

〔京都大探 索書〕

慶應元年十二月七日

一 左之書付御書方に差出吳候様上田久兵衛より申遣候由ニ而道家角左衛門より被相渡候御書方の上ヶ濟

一 昨十九日伊賀守様御用有之候間即刻御城に出入仕候様御達ニ付出入仕候處明廿日伯耆守様蒸氣船ニ而横濱に御出外夷御應接兵庫決し而不開三港之外代地一切難開段御談判有之筈ニ付伯耆守様は被差添候談判盡力いたし候様尤會津藩野村左兵衛ニ茂被仰付管之段被仰聞候私儀申上候之此節幕政一新之折柄ニ御座候處此談判之何方藩何某に被仰付如此又此御達ハ何方藩之議論ニ而々様杯相響候而之天下感戴不仕重疊御爲筋ニ相成不申已ニ此節永井様方御西下之節茂會津様桑名様ニ而茂遠慮仕登人茂參不申横濱へ左兵衛を被召連候を上策と之不奉存况外藩之私杯被差越候儀重疊御失體と奉存候段吳々至極之高論公平之説と被聞召候一統左様ニこそ有之度儀ニ而深尤ニ被思召候ニ付横濱に被差越儀ハ可被差止との事ニ而御斷相濟引取申候

一 昨廿日朝飯後壹岐守様より御使山田勘右衛門を以被仰越候之昨夜伯耆守様御出ニ而但一昨日ハ壹岐守様御不賀守様ニ申上候趣逐一御承知ニ相成幕府御一手ニ而御應接との儀一應尤ニ御聞取ニ相成候へとも此節之談判ハ實ニ大切之事ニ付内外之無差別誰ニ而茂屹度盡力之時ニ有之候故是非共御請申上候様若此上存念之筋有之候ハ、登城仕候而

慶應元年

三六一

其段可申上乍併最早御決定之事ニ付御斷之相濟不申其覺悟仕候様被仰越候右之通再應被仰付候而ハ御斷之申上様も無之儀ニ御座候へ共先日來日々御城に被召候を天下之耳目ニ關係仕御爲に相成申間敷と奉存候處公然と大事之御用被仰付候而ハ決して而不可然此儀之幾重ニ茂御斷申上候何様追付御直ニ可申上段御返答仕候へハ勘右衛門ハ直様御城に罷出私儀無程登城仕居候處勘右衛門途中迄馳來り御返答之趣夫々申上候處右之通申居候而ハ埒明不申已ニ久兵衛乗組候蒸氣船之儀兵庫に被仰遣迎只今御使番乗切參候程之事最早久兵衛登城ニおよび不申京都詰之重役は筋々御達有之筈ニ而別ニ留守居御呼出之御達有之候故久兵衛に行逢次第右之段申引返候様被仰付候再三之儀甚奉恐入候得共兎ニ角御直ニ可申上段御返答仕猶押而御城に罷出堂岐守様は拜謁仕候處此節之談判重大事件ニ付是非此方ニ罷出候との儀久兵衛懸念之次第尤ニ存但伯耆守様ニ而ハ不安心ニ奉存候段去ル十七日堂岐守様へ申上御同意ニ而尙伊賀守様は申一旦之此方罷越上吳候様被仰付翌十八日伊賀守様へ建議仕候處一々御同意其夕御城ニ而御評議有之候事

候筈ニ七八分評決之處大小監御勘定奉行御勘定役町御奉行等一同ニ申立ニ之伊賀殿壹人ニ而之何分ニ茂御手薄久兵衛ハ暫時之間ニ付急ニ肥後殿を呼下シ置可然との見込伊賀殿も同意之處自然伊賀殿不快等之節肥後殿斗ニ而ハ年寄衆と之違ひ御手馴ニ茂相成不申事故御進發前手もつゝいたし可申此節之談判ニ之出雲(立作出)を遣し此方ハ殘候との議論伊賀殿ニ茂是又尤ニ被存終ニ此方殘候様相成候右之通ニ之候へとも何分ニ茂安心相成兼候故此方名代之心ニ而久兵衛を指遣候ニ付伯耆殿出雲列坐いたし談判ニ心を添見切次第ニ之久兵衛一人引受應接是非共御趣意徹底仕候様可相心得追々之御斷尤ニ茂被存此上強而被仰付候儀迷惑ニ茂可奉存候へとも此方名代之委任いたし其邊之儀之伯耆殿出雲に茂委細ニ談置候事故何之心配茂無之屹度成功可有之吳々茂爲皇國盡力いたし候様御國內ニ御座候ハ、久兵衛見込之通幕府之御一手ニ而御處置可有之儀候へとも此節之外夷ニ對し候大事件ニ付たとへハ町人百姓たりとも屹度見込之者之應接被仰付候而茂不苦夫迎異論之者杯大勢被差遣候而之外夷ハ差置手許ニ議論紛擾を生し候憂有之候故右之通左兵衛久兵衛兩人被差遣候筈ニ相決候譯ニ有之此上決而御斷等申立間敷との御事ニ而何分御開濟無之候故無致方申上候之事功上ニ而己着眼仕候ハ、罷越屹度談判茂仕度儀ニ御座候へとも苟茂聖賢之書を讀候者之出處進退を詳し能々節操を

守申度儀覺悟仕居申候其邊ニ取重覺不安意之筋は御座候間御名代ふと、被仰聞候而ハ彌以御請難申上段無評奉爭候處只々成功ニ而已心を用右之處之勘考茂不致候處成程已レを枉々人を正ス事ハ成兼候趣一身之進退操守之尤之事ニ而強而茂難被仰付尙伊賀殿に委細可申談尤斯迄頼談之儀を固辭いたし万一今度之應接を誤候節之久兵衛罷越候ハ、ケ様ニ之相成間敷處扱々残念之次第屹度恨可申歟茂難計段被仰聞追而伊賀守様被仰談候處如何ニ茂尤之申分ニ付存念之通横濱應接御用之儀之被成御免別ニ留守居御呼出重役に御達之儀等茂夫々御取消ニ相成候間安心仕引取候様被仰付候

一右存念之通御開濟被下候御禮段々御配慮ニ罷成候を不願俾奉爭候御挨拶取束今朝堂岐守様は參上仕候事
十一月廿一日 上 田 久 兵 衛

十一月廿日松平康直老中に再任せられ外國懸となる

〔探 索 書〕

〔十一月廿二日附都下探素風説書の一節〕
一同十九日井上河内守様松平周防守様秋月公子御用召之處御一統御病氣ニ而御登 城無之翌廿日防州候ニハ御登 城ニ相成御復職外國懸被 仰蒙候事

十一月廿日閣老松平宗秀等大坂を發し海路横濱に向ふ

〔新美記録〕

〔馬所藏〕
一同(月)二十日松平伯州様田沼玄蕃頭様蒸氣船ニ而横濱に御出
十一月廿日幕吏永井尚志等廣島國泰寺に於て長藩の重臣を糺問す

〔壬生御陣屋引移以後諸扣〕

御坊主山本道知の手ニ入候藝州表紀州御城に文通之拔書寫
今朝永井主水正殿始安藝守家老野村帶刀於國泰寺長藩御應接御手始御座候御應接之御模様相分候ハ、跡より可申上候
諸藩廣島に出廣之無御座候
右十一月廿日之日付ニ而到來

〔防長回天史〕

應接既に畢りて穴戸備後助の休息所に入るや植田乙次郎は永井の意を承けて本日應接の顛末を録上せんことを求む
穴戸は明日植田寺尾を介し先づ永井等より問條を書して下附せられんことを求め其下付を待ちて逐條答案を作り後二十
四日に至り寺尾(生十)を廣澤(藤右)の旅寓に招き托して之れを監察に致す

慶應元年八月
〔京都大探 坂長崎 索 書〕

一中島加左衛門手ニ入候書付寫

藝州表御札問之次第

- 一當春内輪致争鬪候ニ付大膳父子乍慎中爲鎮靜致出張候段一應御届致し有之候委細之事實不分明之事
- 一當春之争鬪已ニ及鎮靜候上者大膳父子如以前萩に引取恒可罷在處一昨日申立候趣ニ之唯今以山口に罷在所々巡行致居候段如何之事
- 一萬冬破却之山口春以來再築之評議致し其後加修理武器間配之事
- 一謹慎中家來之者馬關來迫之英人ト懇親接待いたし候事

一當春中所持之蒸氣船亞人に賣拂方ニ付家來村田藏六花押有之證書差遣し長門も其節夷人と直應對致し候事

一大小砲夷人より買入候事

一筑前に引渡相成候元公卿に使者并贈物差遣石爲答禮諸大夫森寺大和守長州に罷越候事

一淡路監物大坂に被召呼候處難罷越段申立候趣も有之候ニ付曲被任其意外末家并家老とも之内申台九月廿七日迄可罷

出旨再應御達之處及延引候事

右之廉々父子自判謝罪狀之申立と言行致齟齬候ニ付昨日御尋之處其節答候趣猶以書面事情委細可申立候事

十一月廿一日

永井主水正

戸川鉾三郎

松野孫八郎

以上

青地源右衛門

十二月十六日

十一月廿一日井伊掃部頭板倉伊賀守大坂を發し西下廣島に向ふ

〔新美記録〕

一同(十一月)廿一日彦根侯與板倉侯大坂御發途廣島に御出張被成候

十一月廿一日在坂本藩士佐野亥一郎兵庫奉行廢止の由を報す

〔大坂返達御用狀控〕

十一月廿一日 十二月二日着

慶應元年

佐野より

兵庫御奉行之儀以來被廢候旨御出入之者より爲知ニ付此段申達候以上

十一月廿二日日本藩留守居上田久兵衛閣老小笠原長行に謁し藩主出馬の件につき黙契する所あり

〔壬生御陣屋引移以後諸扣〕

十二月朔日大坂方來ル同日御國へ申向濟

去ル廿二日壹岐守様に參謁之節段々御懇話之末太守様御出馬之儀者何程ニ有之候哉無屹度御尋御坐候付何共申越候儀無之候得共久兵衛勘考仕候ニハ藩祖以來別段之譯筋ニ而肥後國頂戴仕居候ニ者屹度子細可有之今日輕く出馬仕候を御爲といたし可申哉又者踏縮形勢を見候方御爲ニ可有之哉兎角御爲ニ相成候様いたし候儀と相考申候其邊者深御勘考も可被爲在奉存候段申上候處至極尤之考其意味合者重疊御了得ニ相成候併夫等者五之意中之事ニ而公然と御出馬無之と申立候而者差障候向茂有之候故出るノとして押移御名代と者ふく積り兩公子之中御出張ニ而も有之候様いたし度大席御進之節ニ至御家老位ニ而ハ都合も惡敷夫とも其節之模様次第臨機應變ニ猶相談茂可仕先其趣相合居候様極密ニ御咄台御坐候事

十一月廿九日

上 田 久 兵 衛

十一月廿二日外國奉行栗本瀨兵衛外人に説くに再び攝海に廻航して京師を脅かさんことを以てせしも肯んせさりし由を傳ふる者あり

〔元治元年より慶應元年迄探案書〕

〔十一月廿二日附都下探案風説書の一節〕

一外國奉行栗本瀨兵衛殿條約之議御許容ニ相成候云々之御別紙を夷人共へ御見せニ相成り京師がケ様之御難題被 仰出於政府も何分難遣致候間今一度攝海へ迫り此度ハ少々炮發いたし候而も不苦候間齊し吳候様御頼ニ相成候處夷人とも答ニ譬如何様被仰出候とも夫ハ御内證之事我々共之政府より表立被仰聞候議を本國にも通達ニ及いつをも其筋を相守り候間今更攝海へ迫り候譯ハ無之迎承知仕らす候由

右之講武所調役岡田斧五郎殿より御直話之由右五斧郎殿ハ旗下之内ニ而も別而慷慨之御方ニ而至當所置可致と被仰出候上ハ至當之二字ニ深く心を用改而御條約御取究ニ相成候ニ者彼が承服不致節ハ戰爭之覺悟ニ無之而ハ所詮御主意徹底不致儀ニ候へとも夫程之膽を定メ候者旗下之中甚乏敷十本之指折兼少しく力之有之者ハ多分洋習ニ染り致方無之候間何卒正義之御藩が幕府人之腰之居り候様周旋致吳候様達而肥後杯へ御頼之由

十一月廿三日日本藩江戸留守居澤村脩藏は白耳義使節の渡來、開港談判の經過、各國聯合艦隊本邦へ派遣の件、薩藩の外資輸入、横須賀製鐵所設立及び海陸軍教師招聘の事等につき幕吏宮田文吉の談話を報告す

〔慶應元年八月以後江都探案書〕

外國御應接之御模様爲探案御用御頼外國組頭宮田文吉様に御城使里内官右衛門去ル十日差出候處九日より横濱に御出張御留守ニ而不相分候付尙昨廿二日差出相伺候趣左之通

一文吉様横濱に御出張御用向之今度ベルジイと申國が使節船渡來ハムし居候由右之條約御取かまし之儀兼而御内約も相濟居候國柄ニ而此節條約取替之たえ出府之管ニ而廿四日御應接之積ニ候得共當節柄ニ付右條約御取かまし御差延之御談判可有之管ニ候處態々使節渡來之上と迎渡談判之行届申間敷御見込之由御噂御座候由

慶應元年

三六七

一先月下旬水野和泉守様酒井飛騨守様横濱に御出張御應接之御模様之下之關一條價金二度目分ハ御渡ニ相成候得共三度目分ハ兵庫開港之期限迄猶豫之儀尤兵庫開港差支候ハ、外一港御開可相成旨ニ而佛國ミンストルに御談判有之候處同國之承伏も可致様子之處去ル九日英國ミンストル横濱に歸船之上同國ニ而之不承知之趣申立候由其後尙酒井飛騨守様外國奉行栗本洞兵衛様横濱に御出張御應接有之候得共酒井様之御歸府後直ニ御役御免ニ相成栗本様ニも御引入ニ而右御應接之御模様相分不申候由尤英國ミンストル近日出府之管被仰聞候

一和蘭國に先年々爲傳授御差遣ニ相成居候御軍艦方榎本某方九月中彼地仕出之書狀到來之由ニ候處英國方佛亞蘭魯西亞フロイセンに密使差遣候旨其主意之日本條約御取可マシ以後廉々不都合之儀有之其上開港可致管之ケ所茂今ニ開港無之候付各國中合軍艦數百艘指向強談之上多分之價金可請取旨相談々ムし候由然處佛國フロイセンニ而ハ不致同意ロシヤニ而者右之主意ニ而軍艦差向候程之儀ニ茂無之旨ニ而堅ク相斷候由亞國之同意々ムし候哉之様子ニ相聞蘭國ニ而之評議中ニ而未相決候得共多分ハ致同意間敷様子ニ有之候旨申來候由英國ニ而之種々之御難題申出利益專ニ々ムし其上琉球國可致押領前右之由魯西亞ニ而之強而利益ニ之不抱候得共萬端氣永々々ムし對州を可致橫領其其上蝦夷地之方追々張出城廓同様新規ニ追々取建候由ニ而一刻も早ク境界御取極ニ相成度段箱館奉行方追々言上右之候由御内話御座候一薩人於横濱外國商民方ドル銀借入候風説有之候付相伺候處三萬ドル程借用々ムし候ニ相違無之實事之由ニ御座候尤右金子ハ既ニ先頃於横濱貸出申度由ニ而引札拆茂出候由利分一割方茂少し輕く相當候由ニ而既ニ公邊ニ御差支之儀有之候ハ、御借入可被成旨英國ミンストル申出候由御噂ニ相成申候

一柴田日向守様外國ニ而御心配有之候哉之風聞茂御座候付是亦相伺候處右之御心配之御用向ニ無之鐵製所海陸軍傳授之儀ニ付而英佛に御渡海被仰付置佛國方ハ鐵製所並海陸軍爲傳授佛人近々日本に差越候管ニ御談相濟英國ニ而之右人柄日本に差遣兼候付人柄御見立彼地に被差越候様申立候付爲傳授被差越候管之由御噂ニ相成申候

右之通御内話御座候段申出候廿四日以後之御模様ハ追而可申上候以上

十一月廿三日

澤村 脩 藏

十一月廿四日幕府は諸侯の國產献上に關する心得を達す

〔文久四年より慶應二年迄御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

十一月廿四日水野和泉守殿御渡

大目付に

萬石以上之面々國產之内一兩品宛 朝廷に貢獻之儀兼而被 仰出品物之儀之銘々見込次第手輕之品相極め月番之老中には可相伺旨相達置候間右品數之儀之拾萬石以上二品拾萬石以下之一品宛献上候積相心得品柄相伺候様可被致候
右之趣萬石以上之面々に可被達候

十一月

十一月廿四日閣老松平康直白耳義使節及び英國公使と應接談判す

〔慶應二年正月の探索書扣〕

慶應元十二月二日江戸發之官脚方來ル御國にハ同十五日申向

去月廿二日御用御頼外國組頭宮田文吉様へ追々御應接之御模様相伺候後御應接之御模様爲探索今朝御城使里内官右衛門罷出相伺候處去ル廿四日ベルジイ國使節松平周防守様御役宅ニ而御應接ハ條約御取替し之儀大君に伺置候付伺濟之上ふらてハ御返答不相成趣を以夫迄相待可申旨ニ而直ニ横濱に引取候由英國ミンストル去月廿二日出府廿三日外國御奉行へ面會いたし度旨申越候付宿寺に御出張之處廿四日閣老衆に而談之儀申談候由之處同日はベルジイ使節御應接も

慶應元年

三六九

有之差支之趣御斷ニ相成候得共是非同日面會致度旨時刻違ニ周防守様御宅に罷越應接之趣ハ泉岳寺門前セツグウ所様等之儀申談其餘兵庫一條等之應接ニハ無之由伯州様御出府以前橫濱に御出御應接ハ是迄兵庫開港と償金と混合候處彌兵庫開港之不相成趣償金一條ハ引放し御談判有之候由ニ候得共行届不申猶近日伯州様橫濱に御出張再應御應接有之御談判行届不申候ハ、猶御上坂之上御伺ニ相成可申御模様之由御内話御座候段申出候以上

慶應元年也

十二月朔日

澤村修藏

十一月廿四日下ノ關口討入の諸藩會議を開く

〔肥後藩士 鈴木登編 上田久兵衛先生略傳並年譜〕

十一月廿四日

○午前松浦來、長防之事情聞取之密話、原註、幕前より金國堂ニ下ノ關口討入之諸藩會議、余も不得止招ニ應ス、不夜

城中敬本ノヤ語、尤無操守之人、魂飛宜哉、余例之狂態、歸、(日録)

十一月廿五日幕府軍監長坂血鎚九郎大坂を發し海路小倉に向ふ我藩士新美傳之助明石左直之に從ふ

〔長防再御追討一件〕

十一月廿五日 十二月十五日着

青地上田河口ヨリ

軍御目付長坂血鎚九郎様より去廿二日御城中之口に御呼出ニ付源右衛門罷出候處當月廿五日御乘船之事并上下御人數等覺書一通被成御渡候付差上申候右ニ付先便申達候通昨年軍御目付様方に被進候趣を以押懸五掛代金貳千疋御看一折代金五百疋被進之儀申談同廿四日御使者源右衛門相動候處御登城中ニ而御用人預置候旨挨拶仕候其後彼方より被仰越候ニ之御一統被仰談御音物等一切御斷之由依之御事濟之上と免茂角も此節之儀之難被成御受納由去迎折角之被進を御返却ハ甚以御失禮ニ付御事濟迄御預ク被置候との事ニ而御音物御返御用人被下茂返上仕候尤御徒目付御小人目付に之被下之難有頂戴仕候

一血鎚九郎様御乘組等之儀茂伺置候處公邊より廣島船八百石積之賣船御雇渡ニ相成御徒目付等も御相船ニ而御乘馬茂同船ニ御乘せ組ニ相成申候依之從此方様御差添ニ相成候新見傳實カマ之助明石左直儀ハ飛船ニ乘組御附添仕候朝夕伺御滯船等之節御見舞差出物等之儀も兩人に申談御都合ニ應取計候儀相心得出船仕候事御座候

木津川口御滯船中源右衛門儀伺旁參上御菓子御肴酒等爲持罷出候處御逢ニ而右之品々御受用有之別而都合宜傳之助列も太慶仕候以上

覺

一來ル廿五日乘船之事

一惣人數左之通

長坂血鎚九郎

上下拾六人

内士分五人

一馬壹疋爲牽候事

右之通ニ候

十一月

御徒目付

脇屋

省輔

御小人目付

上下貳人

小島爲右衛門

十一月廿五日日本藩田上慎三郎廣島に至り長藩糺問の狀況等を探り之を上司に報告す

〔尊攘録探索書〕

慶應元丑十二月

私儀十一月廿五日廣島着同藩植田乙次郎黒田益之允へ面會仕永井様へ罷出同方公用人酒井謙左衛門に承合御徒目附栗田耕一石坂武兵衛に内分承候廉々大略左之通

酒井に面會之節

元筑藩	赤	根	武	人
奇兵隊長	元久留米	淵	上	都
長	人	峰	軍	之
			助	

右三人之者事相尋候處

右三人先頃京攝に潜罷在候間會津が親撰組に被召捕居候を御糺問之上差而子細も無之候ニ付私共分ニ而召連参り去ル廿一日御寛大之御趣意申開路費を茂遣舟を以長に送還申候間不怪三人共感激仕奇兵諸隊に茂御趣意相貫せ如何様ニも盡力可仕段申出打立申候併此方々之唯々御寛大を以放還仕候迄ニ而彼等盡力仕候儀之心次第ニいたし候事ニ而其節送遣候舟茂于今歸不申軍之助杯ハ長府之前へ鳥有之候ニ同志も有之候間此に舟を寄度段申出候間不苦旨申置候ニ付定而此等之事ニ而舟も隙取可申敷々存居候との事

一新撰組之者共之酒井手人少ニ而會津に懸合會津が頼之様なる都合ニ而連越候由着後ハ日々長人に往來彼是之情實を相通居候模様ニ嘶之内聞取申候

徒御目附兩人に面會之節

一穴戸一同ニ罷出候井原主計事主用ニ而廣島引取途中が病氣差起り早々罷罷出候間其代として木梨彦右衛門に申者廿五日廣島着仕候段藝藩より大小監に御届有之候を内見仕候事

一奇兵諸隊之内重立候者共御呼出ニ相成居候間廿八日九日比迄ニ廣島に到着いふし候筈ニ右之候由

一廿日於國泰寺穴戸に御詰問之ヶ條書者別紙認置候事

一十一月晦日於國泰寺木梨彦右門御詰問ニ相成候間罷出候様廿八日藝藩を以同人に御達ニ相成候尤諸隊之者共も間ニ合候様着仕候ハ、一同ニ罷出候様御達ニ相成候を内見仕候事

嘶茂段々入組候處ニ而

大小監初御手前方御下ニ相成未々御糺問中ニ候得者決局彌々様と申御見込之無之とも先ツ大略之御見渡無之而者御糺問之御心短も被爲出來間敷何様此先キハ不知即今之處何卒何度段問詰候處

全躰去冬尼老公伏罪御見届之後御處置必ふもの延引いふし候故今日之事體ニも相成候事ニ而先ツ當節之處ニ而者別紙ヶ條書之處を可糺之相糺可誤ハあやませ去冬尼老公伏罪御見届之場ニ立戻り速ニ御處置ニ相成候様ニともハ無之哉併此儀ハ私之見込ニ而手元が御洩シ申儀心痛仕候間其心得ニいたし吳候様との事

但御處置も大略御目的相立候様咄候得共終ニ洩し不申候事

永井様に罷出候節

此節御國許者來月十日迄鶴崎御出張ニ相成御指圖相待候様御達之處多之兵馬を操出候儀一將々々手心無之而者取扱出來兼候間此表御尋問之御模様且決局御討入に申場ニ至候哉否撃入候様相成候ニも其緩急之處如何御座候哉奉何度差越申候段申候處

備後之介に一應相尋候處にてハ辯解茂大槩相立差而子細茂無之様存候得とも今一二應木梨を初諸隊之者ども相糺候上ニ無之而者決局彌々様と申見込立兼候間可成至急ニ彼等相糺彼是申分相捕候上可糺之幾重ニも相糺於彼可誤之幾重ニもあやませ其上ニ而三監之内急ニ登坂巨細致言上候筈ニ付何レ茂今少ハ隙取可申との事

右之通ニ御坐候得者私を以此方之情實を可申上候全躰去年嚴寒中萬餘之人馬を小倉へ操出宿陣及數月終ニ無事引取衆心も大ニ折罷在候處猶當嚴。中久ク人馬を外ニ暴露仕將卒共泛々として所向を不知候ハ、其兵其卒者何を以一致ニ競可申哉其將其頭ハ何を以衆之情實を正齊可仕哉其上將卒久ク霜雪ニ困勞仕候而ハ萬一御討入レ申場ニ至却而御爲合如何ト奉存候若又右之通ニ而去冬同様終無事引取候様ニとも相成候ハ、第一國力を無用ニ費殊ニハ衆心之義氣茂類廢仕候而自然ト上を信奉不仕候様罷成終ニハ往々之處乍恐幽王之炮火を衆之不信様ニ成行可申歟ト奉存候依之此節之御趣意初カ以兵臨境問其罪ト申筋ニ御坐候ハ、兎茂角も左茂無ク右之通萬一之節連ニ御間ニ合候様ニとの御都合而已ニ御坐候ハ、願曰國元ハ人馬捕置必然御征討と相決候上一時之勢を以撃入申度尤路程も彌御間ニ合可申奉存候間何分右等之處御賢察被下御内分御見込奉候度候

御咄一々御尤ニ存申候御國元ハ御人數御捕萬一之節御間ニ合候儀ニ候得者至極可然ト存申候併私カ何分御指圖とてハ出來兼候得共トふる其御手都合可然存候との事

素り御指圖相伺候ニ而無之私を以内分實情を申上御見込奉候儀ニ而御坐候併此表御糺間相濟御三人之内御登坂其上御決定可有之之事ニ御坐候得者何様暫の御間合も有之且右之相伺候儀も御見込只今之通ニ御坐候へ之國元カ大坂表に奉伺候而者何程ニ御坐候哉

至極可然三監之内登坂仕候ハ、委細御情實之處可申上との事
藝藩兩人に面會仕候得共差而此節之事ニ關係いゝし候儀ハ一切洩不申事

一紀州御人數廿五日六日蒸氣船ニ而廣島着一泊ニ而同所カ四里計可部と申所に出張尤兩日ニ而大略千人計ト見受申候猶

追々參候との事

福山は廣島カ十七里北みよしと申所并伊豫之三里西加門ト申所ニ出張ニ相成候由尤福山以下ハ人數未出張無之由
一津山字和島福山松山カ參居候間一兩藩相尋候處御使者等ニ而何レも格別之儀無之候事
一薩カ兩人參居候得共產物方之由

十一月

大小監十一月十六日廣島着同廿日於國泰寺尋之事

田上慎三郎

- 廣島家老 野村 帶刀
- 同用人 遠藤佐兵衛
- 同小姓組 植田乙次郎
- 右同斷 寺尾生十郎 但帶劔

福山 松山
井戸 永朝

穴戶備後之介 此邊脱劔
無刀

- 御徒目附 栗田 耕一
- 同 石坂武兵衛
- 御小人 四人

尋之ケ條

(八ヶ條、十一月廿日の條に掲載せる京都大坂長崎探索書中藝州表御糺問之次第と同じ仍て略す)
右相糺候廉々猶以書面申立候様藝藩を以備後之助に相達右之通御徒目附許ニ而寫取申候尤宍戸之御請書ハ未タ差出
不申差出候ハ、直ニ國友に遺吳候様致約東置候事

十一月廿六日本藩備頭堀丹右衛門組鐵砲廿挺頭一人組共鶴崎に出張を命ぜらる

〔長州再征帳〕

今度軍御目付算助兵衛様近々鶴崎御着岸之筈ニ付先共方組御鐵砲貳拾挺頭一人組共至急ニ彼地に被差越候條此段可被
達候以上

十一月廿六日

奉 行 所

堀丹右衛門殿

猶々本文御物頭名付早々可被相達候以上

〔北岡文庫輯録〕

(警衛出兵人數從元治元年
至明治元年二月 阪本彦衛調の内)

十一月

一豊後鶴崎へ軍監着岸ニ付警衛トシテ先ツ物頭一人足輕二十人出張追テ物頭四人副頭一人足輕七十人トナル
但此人數モ追々交代

十一月廿六日本藩物頭上月十郎右衛門外様足輕廿人を率ゐ三條實美等警衛として宰府出張を命
ぜらる

〔長州再征帳〕

覺 監物殿

十二月廿日出立いた
し候段届有之候事

上月十郎右衛門

右者五卿警衛之儀人數相増取締向精々行届候様御達之趣有之候付用意濟次第筑前太宰府表に被差越候條此段可被在御
達候尤外様足輕貳拾人惣組輪番ニ而被差添候間此段及御申聞之事

十一月廿六日

外 様 足 輕

十二月廿日出立之筈之段達ニ成ル

貳拾人

右者五卿警衛之儀人數相増取締向精々行届候様御達之趣有之候ニ付用意濟次第筑前太宰府表に被差越候付惣組輪番ニ
而被差添候間此段御達之事

同日

機 密 間

選 舉 方

十一月廿六日我藩森井惣四郎會藩林三郎と共に横濱に於て英國通辯官古屋作左衛門木村道之助
に會し閣老松平宗秀外人と交渉の模様を探る

〔從京都來候探索書等〕

(十二月十四日附森井惣四郎聞取書の一節)

聞取

一當十一月廿六日會藩林三郎同道神奈川驛ニ而英國通辯官古屋作左衛門木村道之助出會松平伯耆守様此度横濱へ御出ニ

慶 應 元 年

三七七

相成候様承候處同人等之返答ニ之伯州より樽井生たる牛豚雁之類御進物ニ相成英佛よりも是迄なれ響應よて佛館より英館へ車ニ而伯州を送り英館よりハ美置を極たる婦人の乗る駕ニ而運上所迄相送り將又御歸府之節者川崎驛迄大車を以英人等共ニ乗て送り候由伯州ハ西洋之服ニ有之候處プロイセンミンスタール日本ニハ日本之服可有之殊更ニ西洋服ニ致候之如何なる心情歟と頻ニ笑候由未御應接之模様ハ兩人ともニ承居不申旨返答仕候(十一月廿七日の條についで)

十一月廿六日在府本藩奉行井上加左衛門は益田勇を京師に遣し幕閣皆開國を唱へ旗下の士閉鎖の二派に分離せる狀況を在京老臣に報ぜしむ

〔自筆御用狀扣〕

文久二年慶應元年迄
以別紙啓上仕候横濱表ニ而猶御談判有之若異聞茂御座候ハ、急脚ニ而茂差立可申段最前得貴慮置申候通ニ御座候處益田勇去ル十四日ハ被指越探索之趣之他筆御用狀之通ニ而兵庫ニ而御談判之末勅命御取消之一條之露味たる儀ニ而長州償金一條之御談判ト相見申候現閣老初御役人方ハ惣而開國を被唱右勅命御取消之儀譬何方言上仕候とも御取上申様之氣味更ニ無之其以下講武所當ニ而も二派も有之是非 勅命を被奉一刻茂早ク御談判無之而ハ後道不容易純ト相成萬一彼等聞入不申時之斷然戰爭ト覺悟を究可申外無之抔ト之説近日發起ハハ右付而内輪之次第何分ニ茂難盡筆頭森井惣四郎充分吞込居候間爲言上今日爰許差立申候條直ト御承知可然御盡力可被下ト奉存候此段爲可得貴慮如是御座候以上

十一月廿六日

井 上 加 左 衛 門

小 笠 原 美 濃 殿

郡 夷 則 殿

〔尙々書略ス〕

十一月廿七日我藩森井惣四郎會藩林三郎と共に横濱英國領事館に通辯官アレキサンドルを訪ひ閣老松平宗秀外人應接の模様を探り且つ兵庫港開否の利害を説く

〔從京都來候探索書等〕

〔十二月十四日附森井惣四郎聞取書の一節〕

一同(十一)廿七日林三郎同道横濱英館へ罷越通辯官アレキサントルに面會いハ三郎よりアレキに相尋候よは頃日より追々應接有之候趣承候處何事ニ而右之候哉アレキ答ニ之泉岳寺作事長州償金之兩條ニ而御坐候償金一條之餘り 公邊より我儘勝手之御申分ニ而御坐候根元兵庫港當十一月西洋正月元日也 までニ御開被成候ハ、長州償金三分之二減可申ト兵庫ニおるて御相談仕候處兵庫開港之議ハ期限迄之處出來不申いつを長州償金之約定之通相渡可申委細ハ横濱ニ而應接可仕との議ニ付歸港いハし追々御應接仕候處此度之償金も約定通何分相渡兼候付暫相斷可申段御返答ニ相成何事も御變約のミニ御坐候と返答仕候猶林より兵庫港一條其後談判之無之哉ロントン條約之通ト兵庫ニ而應接有之候ハ京師之趣意ニ相戻居候付栗本瀬兵衛松平伯耆守大坂より被差下候議ハ全其一條ニ而京師之事情貫徹之爲トて御坐候アレキ之返答ニ之此度ハ京師よりも御許容之上ト存居候處矢張京師之御趣意ニ相戻り候哉此度伯耆守殿よりケ様之書付も被贈候付彌以 公武御一和之上兵庫之議も一決仕候事と相心得居申候ト一紙を出候付一見仕候處第一ニハ各國和親正實ニ可致事第二ニ之右正實之根本ハ 公武御一和之事第三ニ之商法嚴格ト可致事第四ニハ萬事誠實公明正大ト可致所置事との書付ニ而御座候付右書ニ依而猶林より申候ニハ書面之上各國和親ト 公武御一和と申事甚相軌り實事之處行を難ト事ニ御坐候其譯ハ 公邊ニ而各國和親を專トして所置有之候得之京師へ不都合ニ相成京師之趣意通ニ取扱候へハ各國へ對し和親相立兼候姿ニ成行申候兵庫之儀ハごまごまト迄も京師ト而ハ開不申論ニ而御座候間右 公武之間各國より篤斗情實汲取候様相成候ハ、彌以 公武も一和いハし各國とも和親結ト可申無左之日本必内亂可生勢ニ而御座候右之處

何程ニ候哉日本内亂生し候而も兵庫を開候る至當ニ相聞候哉亦之無事平安ニして兵庫も不開永々交易いたし候が各國之辨利ニ候哉只今迄兵庫開港延々ニ相成候之各國よりも日本人心不居合と申事ニ而見合候儀ニして永々開不申茂矢張人心不居合之譯ニ候へハ日本の不爲を察し候ハ、永々開不申様各國ニ而承知出來不申譯ハ有之間敷右之處篤斗勘考い候し候而是非得失を分ち申度と穩ニ説得仕候處アレキ答ニハ今日之御議論ニ而始而 公武之御事情承知仕申候只今迄ハ只々人心不居合と申事のみて委敷御情實承不申候御内情實御尤之議ニ御坐候惣躰私父のシールト之論も日本之長崎箱館之兩港ニ而充分ニ御座候只今之通數港開候之日本之誤と申事も承候儀も御坐候るし只今ニ相成候而ハ御尤之存候へとも私壹人ニ而ハ何とも御返答出來不申ミンストルも壹人之返答ハ出來不申候へとも何様此者之見込相尋申度候間夕七半時比御出被下候ハ、御返答可仕と申候付一先之引取右刻限ニ猶罷越相尋候處アレキ答ニ之ミンストルも尤ニ之存候へとも只今ニ相成開不申儀ハ何分出來不申若英國ハ許し候とも各國より聞入申間敷強而御願ニ相成申候ハ、積り戰爭と相成候外無之との見込ニ而御坐候と返答仕候付其日ハ引取申候

一右應接中ノ伯州より兵庫談判有之候哉否相尋候處伯州前文之書付御渡ニ相成候迄ニ而談判ハ歸府之上評決い候し猶出張可致との事ニ御坐候と返答仕候(十二月八日の條についで)

十一月廿七日日本藩鐵砲頭長谷川勝次郎鶴崎へ同中山金右衛門寺本八郎助安富重九郎小倉へ各出張を命ぜらる

〔長州再征帳〕

覺

當番所にハ子ニ而知せ

長谷川勝次郎
組共

右者此節鶴崎表に罷越申候此段相達申候以上

十一月廿七日

御奉行衆中

堀丹右衛門

其方組

金右衛門儀十二月十四日八郎助儀同十五日出立いたし候段屆有之事

中山金右衛門
寺本八郎助

右者小倉表出張之御人數交代として用意濟次第彼地に被差越候條此段可被達候以上

十一月廿七日

猶々此節足輕交代之儀と惣組輪番ニ而五拾人外々小頭三人被差越候條此段茂可被知らせ置候以上

奉行所

尾藤金左衛門殿

覺 監物殿

安富重九郎

右者小倉表出張之御人數交代として用意濟次第彼地に被差越候條此段御達之事

十一月廿七日

(本朱書)
上ニ付札ニ左之通
此節足輕交代之儀者惣組輪番ニ而五拾人外々小頭三人被差越候間此段茂御知せ之事

外様足輕

慶應元年

三八一

右者小倉表出張之御人數交代として安富重九郎中山金右衛門寺本八郎助用意濟次第彼地に被差越候間惣組輪番ニ而被差越候條此段御達之事

小頭 五人
三 人

十一月廿七日

機密間

選舉方

十一月廿八日本藩物頭松野七藏長谷川勝次郎に代り鶴崎出張を命ぜらる

〔長州再征帳〕

覺

當番所にハ子ニ而知せ

御鉄炮貳拾挺頭

長谷川勝次郎備病氣之由ニ而近々之出立出來兼振替也

松野七藏

右者長谷川勝次郎と振替り此度鶴崎に罷越申候此段相連申候以上

本文松野七藏出鶴之處交代相濟慶應二ノ四月十三日歸府

十一月廿八日

堀丹右衛門

十一月廿八日在京本藩重臣三宅藤右衛門は幕議一橋慶喜に所領として攝河泉三國を宛行ふことの代として五万石を與ふべきに決せしも會桑及び我藩等の周旋により結局金品を以て其功勞を賞することとなりし旨を藩政府に報告す

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ

以別紙申達候去ル十四日江戸立之官脚着別紙御用狀等遂披見則進達仕候右之内水府之鎖家死刑除役等大造之事ニ而又々感亂之端とも相成可申敷右様奸徒權を振候茂畢竟關東幕吏之處置不宜處より釀成候儀と被考歎息之次第ニ御座候備一橋公に攝津泉所領可被宛行哉之一條茂橋府附之内官家に致周旋候事と相見於華城茂種々御評議之末右之代として五万石を可賜との御決議ニ茂相成たる由之處既ニ於會桑邊御定論之筋右之其後も相止候山尤此兩三年之功勞を被賞被置馬ニ三万金を添可賜との御内決ニ而近々橋公を華城へ可被召哉之趣ニ相伺先ハ至極之御都合ニ相連申候右等之儀ニ付而之於此許御留守居を初會桑等へ密ニ力を添周旋之次第茂御座候へとも未發之事ニも有之微細之事情ハ錄呈難仕右之趣御含迄ニ至密得貴意置申候將又藝州表御糺問之模様等未タ何たる評判も承不申且大坂之形勢指而異狀茂相聞不申候今程御國許之御多事深々遙想仕候計ニ御座候以上

十一月廿八日

三宅藤左衛門

惣連名殿

十一月廿九日幕府は外國條約勅許を得たるを以て意見ある者は建議すべき旨を達す

元治二年正月ヨリ慶應二年十二月迄

〔御國京返 遠御用狀控〕

〔十一月廿九日於京都小笠原閣老本藩留守居を召喚して渡之〕

今度外國船兵庫表に渡來申立之趣何分切迫之次第時勢不得止儀も有之外國條約御許容之儀御願被仰立候趣被 聞召候ニ付至當之所置可致旨被 仰出候就而者一應見込茂可承候間先年相觸候條約書之内異議有之面々者無腹藏以書面可被 申聞候事

慶應元年

十一月晦日幕吏永井尙志等再び長藩使節を廣島國泰寺に召して訊問す

〔御國京返 達 御用狀 扣〕
元治二年正月の慶應二年十二月迄
都大坂返

御坊主山本道知より手ニ入候

寫

去月晦日於國泰寺永井主水正殿初長州に御應接之儀段々内聞仕候處廢興攘夷等之儀申張候得共追々居合同日之御札問之節ハ大ニ恐入居候趣公邊よりケ條件々御書付ニ而御下ケニ相成候趣右ニ付長州藩中之内豈人國許に罷歸候趣ニ御座候此段内聞之趣御達申上候以上

十二月九日

廣島表
島 本 善 八

應接ニ罷出候長藩名前

木梨彦右衛門	大津四郎右衛門	小田村素太郎
赤川又太郎	廣澤藤右衛門	松原音藏
寄兵隊頭		
河瀬安次郎	井原小七郎	入江嘉傳次

右之通御座候事

十二月朔日本藩江戸留守居澤村脩藏は閣老松平宗秀横濱談判の狀況幕吏の黜陟及び水戸暴刑緩和の事情を報告す

〔江戸返 達 御用狀 扣〕
元治二年正月より慶應元年十二月迄

十二月朔日安田より様書 正月六日着

追懸申達候御用場取固メ候後別紙澤村脩藏書上達有之候付差上申候以上
巻込

一昨廿九日會津類役柏崎才一神尾鐵之丞京都より歸府仕昨日出會可致段申越候間出會仕候處板倉様御家中吉田謙藏茂昨夕歸府仕候由ニ而落合一席ニ而聞取候次第今度松平伯耆守様御歸府相成候儀ハ兵庫之御應接京都之御趣意違却致候段御自身之御失躰ニ付何分ニ度其儀御任せ被下候様左候ハ、如何様卒いたし取戻可申段會津様板倉様小笠原様に強而御相談御座候間御三方様いつとも御不吞込ニ被爲在候得共強御相談之事ニ付先以御任せ相成横濱迄御下ニ相成御談判之趣者直ニ被表より御引返ニ而被邸上候等之處如何之儀ニ而御歸府ニ者相成候哉ト噂仕候

一右柏崎共箱根ニ而森井惣四郎林三郎に相逢申候處惣四郎共横濱ニ而ハ探索ニ御座候得共今度も御取戻ト申程之御談判ニ者至兼申候由御談判之次第大略公武御合夥さへ出來候上ハ開港者如何様共出來候間夫迄之處者公武之御間を紛亂いたさせ候様之事ハ決而無之様尤攝海に廻候事杯々し候而者愈以公武之御間ニ差障候間右様之事者無之様との趣其外ハ商法并償金之事迄御談判ニ相成候由

一關東黜陟之儀京都ニ而者無御油斷御評議之由最早大概相定居候由併餘計之御役人ニ御座候間一時ニハ御手ニ不被爲及緩急順序を御立被成御運ニ相成候間左程迄懸念ニ者及中間敷と會津様柏崎に被仰聞候由

一兵庫御應接御取戻之一條一橋公會津様并板倉様小笠原様御見込之次第中々容易之事ニ而出來候儀ニ無御座伯耆守様ニ者迎も出來候次第も無御座極々重大之事件ニ付何様内輪長防之御所置杯御取懸相濟候上屹度御腰我居へらと御取懸相成可申御舍之由尤順序を論候得者關東諸藩士之論通黜陟を始として應接取戻之儀今日ニ而者事之大小時之緩急至當ニ茂可有之との事板倉様御噂有之候由然處長防之一條も段々御運付候事ニ付唯今又々御取止ニ相成候而者愈以混雜ニ及兩ふら失候譯ニ相成可申との事諸藩士ニ内々中間置候様との儀右吉田謙藏に御内話御座候由謙藏噂仕候

慶應元年

一水府之一條段々切迫ハ候旨水藩より會津始諸藩に茂内談有之候得共江戸ニ而者手之付所無御座候間會津杯申合京都に早飛脚差立候末京都之御評議ニ而尾州玄同様より中納言様に御直書被差越候由御座候得共右御直書も不分明之御書面ニ而連も右様之御書位ニ而斷頭止可申様無御座候間猶又柏崎才一今度罷登切迫之趣逐一申上候處板倉様小笠原様大ニ御驚之御様子ニ而段々御相談有之小笠原様より水野様に委細之御直書被差越候由右御書面者柏崎に御二拜見被仰付候處情意貫通いたし候御書面ニ而是ニ而ハ水野様ニ茂御見流ハ出來間敷相見候由右御直書ハ去月十六七日之頃此許に相違候趣有故ニ先全月廿五日拾七人斷頭有之候後先月始少々揚屋入有之候迄ニ而斷頭者相止居申候一勅許之御趣意違却致候儀大樹公之御意ニ無御座全く諸役人之意ニ出候間取戻し可申手段相運居候得共内長防之所置も有之至急ニ埒明候儀ニ相見不申候得共追々ニハ屹度取戻可申候間夫迄之處ハ御有儀被成下候様有御座度段 朝廷に御申立相成居候方可然歟と大坂ニ而御評議有之候由

十二月朔日

澤村脩藏

十二月朔日在府本藩奉行井上加左衛門幕府大老以下大官の任免を藩政府に報告す

〔御國江戸往來狀控〕

元治元年ヨリ慶應二年迄

以別紙啓上仕候	酒井雅樂頭様	同十九日若年寄勤之内五千表完被下置之	稻葉幾餘翁様
先月十五日御役御免	名代 本多伊勢守様	同廿日御加判之列外國御用取扱座順之儀之伯耆守様次	兵部少輔様と御改
前々之通滯詰	酒井飛騨守様	同廿六日御加判之列座順之儀ハ	松平周防守様
同十七日御役御免前々之通	名代 稻葉備後守様	伊賀守様次外國御用取扱	井上河内守様
馬之間詰	備後守様御隠居	十二月朔日若年寄座順之儀稻葉兵部少輔様次外國御用取扱陸軍之儀ハ是迄之通	松平越前守様

右之通被仰付候由御留守居と違有之候此段爲可得貴慮如斯御座候以上

十二月朔日

郡 夷 則 殿

井上加左衛門

三宅 藤右衛門殿

御家老 御中老宛

十二月二日在京三宅藤右衛門書を國老小笠原美濃に贈り攝河泉問題に關し我藩の會桑兩藩と共に周旋せし狀況を報す

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ

貴翰拜見仕候酷寒之節彌御安康被成御勤仕奉恭賀候於華港者種々御高話を茂拜承大ニ都合を得深辱々奉存候其後御速之御着船到而欣踊之至御座候情御下着後道家杯見込之趣も有之段々御勘考之次第等委曲被示下趣具ニ承知仕至極御尤之御儀奉存候第一ハ橋公之御事從幕府御疑を被入候様ニ而ハ天下之御爲宜かる間敷將軍様ニ茂彌御疑念を被捨萬事御誠意を以御相談橋公にも聊無御私心公平至當之御盡力を以御輔翼被爲在候様有御座度との趣ハ尤御同案之筋ニ而其邊之儀既ニ御奉行ハ御留守居杯に茂密々咄合置候由ニ御座候且攝河泉御所領ハ不宜候ハ、よしハ一ヶ國ニ而も被授候而御身之御落付茂出來御兵權を茂被付候ハ、愈御手を被伸幕府之御爲ニ可有之哉之趣も被仰下候處攝河泉ハ近畿樞要之地ニ而私領ニ賜り候儀者宜ル間敷且右之代ニ五万石ニ被封し申儀之却而橋府之權を被殺候道理ニ而御氣然ニ差障御受も被爲在間敷との儀者淺井ハ會桑邊にも密々咄合兩侯も御同意之事ニ而既ニ於大坂五万石之事御議定ニ相成瀧川大監御登京之節會桑ニ侯御定論之趣有之其儀ハ相止昨今年之御功勞を被賞御鞍置馬ニ三万金を可賜との御評決ニ相成候由ニ御座候何様橋公ニ者當時之通御連枝と申を以天下之御戴も宜敷 朝廷之御任用も重ク可有御座歟左候へ者彌以御

慶應元年

擬作を御手厚被成進 帝都ニ御腰を被爲据御至誠を以 朝暮ノ間御盡力將軍家を御輔翼被爲在從幕府之一點之御疑心無之愈御委任ニ而治安を被爲計候儀肝要之儀ニ奉存候夫等之筋者會藩なども同案之由ニ御座候將又於此許專橋會桑ニ力を添周旋之處薩肥筑越因備等ハ外ニなし候様ニ而者後道之變化ニ應し如何可有之哉御國之儀者一偏ニ不相成御正義天下ニ徹し度就而者橋府を初其他共御留守居之しと疎意無之様ニとの趣も夫々敬承仕近日御奉行以下とも申談候趣茂有之淺井列にも此節御番表之趣委相含置候事ニ御座候前文攝河泉等之儀を初淺井方別紙書取相達申候間則進達仕候委曲者右書取ニ而御熟知可被成略申候夷則殿出立跡ニ相成候間私方右拜報旁草々得貴意申候以上

十一月朔日

三

宅

小笠原美濃様

猶々御加章之趣承知仕木村以下にも申聞候事ニ御座候以上

慶應元年八月

〔京郡大坂長崎探索書〕

十二月二日 河口より 同十二日着

一橋公被賞等之一件淺井新九郎書取相達候付内密差進申候以上

頃日來一橋府内より攝河泉三州橋府領ニ相成候様内々堂上方に周旋致し候様相聞諸藩共ニ疑惑仕候處屹度根脚之無之候得共間ニ之甚敷唱將軍家御輔翼攝海惣督御斷之儀將軍様御添書を以御所に御達朝議之上筋々御留ニ相成候様内輪御内決之段尹宮様方より奉伺候處世上ニ而之右御留被仰出候節從 朝廷攝河泉直ニ橋府に拜領被仰出候杯と唱書付等流布いたし候内先日小笠原老御登京之時分茂右之流言御聞之由ニ候處橋府に茂些御不遇之由ニ而其儘御下坂ニ相成猶又松平伯州侯其後御下坂之時分ハ右之攝河泉之一條流言尤甚敷書付本と之儀も御承知ニ而御下坂ニ相成候付於華城閣老御驚愕ニ而攝河泉之一條從 朝廷被仰出候ハ、大切ニ付先橋公に土地五万石昨秋變動去冬江州御出張被賞功勞候而被下候様御決議ニ相成候由然處去ル廿日新九郎會藩ニ參小野權之丞に面會昨夜大坂より登京致し候由ニ付五万石之一

條萬斗相尋候處右五万石之一條相違無之由然處御所之方ニ攝河泉之一條之決而無之段宮様方奉伺候様申述候得共閣老方殊之外御疑惑有之候而右之通御評決ニ相成候併權之尤ハ閣老に一々御不同意いたし候趣意之一々尤之儀ニ有之種々咄合關白様ニ當日寒氣伺ニ參殿いたし候付直ニ御様可奉伺と申談關白様ニ拜謁攝河泉等之儀逐一奉伺候處橋府に三州被下候様之儀ハ決而無之併昨年來攝海惣督被仰付候處一向實備ニ至不申朝廷より追々御催促ニ相成候處橋公より御請ニ而土地兵權無之官家同様之事ニ付何分急ニ實備難調山御請ニ付 下ニ付札 橋府攝海惣督御斷之發端是迄御一人ニ御斷ニ被決候由左候得共會桑之議論ハ御惣督之儀ニ候間持口々々兼而御仰付置候付其御指揮有之 其砌一度朝廷ニ而關白様宮様方候而是ハ漸を以御實備相立候様有之候ハ、惣督之職上におゐても何も子細無之との議論ニ御坐候事 其砌一度朝廷ニ而關白様宮様方に攝河泉を橋府に宛行候而ハ何程ニ可有之哉と御咄有之候迄ニ而右之候處其邊より流言致し候儀ニ之無之哉と御氣之毒之體ニ被爲在其餘ニハ直ニ朝廷より被仰出候儀決而無之由御沙汰有之候猶橋公御異例御清解之上ハ一刻茂御下坂ニ而ハ何程ニ有之候哉奉伺候處勿論橋府大樹公先日下坂之後京地動靜を見聞いたし氣遣無之候ハ、橋府茂下坂之筈ニ付最早下坂ニ相成候而茂可然併近日薩之御疑甚敷先日建白いたし候様申唱候處如何之様子ニ候哉と御尋ニ付朝廷に差出候ハ、御聞ニ相達可申處御承知無之候ハ、定而浮説ニ而御離間之計策ニ而可有之候左様之儀ハ御懸念ふく朝廷ハ武家兩閣老を被得京地に之橋會桑被爲在容易ニ動搖者不仕朝廷ハ御鎮靜ニ被爲在候旨申上候間御聞上ニ相成候砌薩邸内員を吹立候々様成事無間斷いたし居御不審之休ニ被爲在且夜々或鯨波を揚候事杯茂有之候段被仰聞候付武家ハ右様之儀可有之肥後邸内日夜貝を吹太鼓を打算木訓練ハ當然之事ニ有之鯨波揚候杯之官家と流武家ハ勇敷祝事等ニハ鯨波揚候事茂聞ニ之有之薩ニ限候事ニ無之武家之習ニ而御座候段申上候處少之御安心之躰ニ被爲在候夫より宮様に參殿拜謁橋府に五万石之一條申上且殿下に申上候次第逐一申上候處華城ニおゐて御内決之次第最早御承知ニ付殿下茂同様朝廷より右等之儀若被仰付候様之議論有之候ハ、御盡力ニ相成可申由ニ付華城之内議取消之周旋いたし可申段御沙汰ニ付歸懸會藩に參外島機兵衛に面會殿下宮様方御都合申述候處不怪太慶いたし其儀ニ付只今同藩廣澤富次郎下坂いたし候筈ニ右之都合申含度候得共一向參人無之由ニ付直ニ參廣澤に茂逐一申入置候尤外島殿下に參殿猶委細奉伺是より華城之慶應元年

儀御取消ニ相成候様致盡力候様談候處明日參殿仕御様子奉伺勿論肥後守様に茂橋府に五万石之一條ハ御不同意ニ付周旋ハたし可申との事ニ有之廿一日外島關白様に參殿御故障ニ而拜謁ふく廿四日ニ罷出候由

一廿一日上村彦次郎財津民助會藩に參小野に而會瀧川播摩守様今日御登京ニ相成五万石御決議ニ而橋公に被仰渡管ニ而御使者桑名侯御勤之由被仰越候付會津侯を初公用局中當惑之由ニ而上村列見込有之候ハ、無伏臆申述吳候様頼談有之候然處四時過比桑名侯思召ニ而何様瀧川侯に當地之様子逐一被仰談候ハ、同侯御見込も可有之趣會侯に御使者を以被仰談候處調度會侯茂其御心付ニテ公用局中一議ニ相成候時分都合能速ニ瀧川侯夕七時比より桑侯に御出會藩君侯之旨を受外島機兵衛罷出右御相談之趣瀧川侯に被仰談候處御聞込と相違ハたし且昨夕其儀ニ付廣澤富次郎致下坂候付華城之廟議茂替可申哉茂難計一先急ニ下坂被致候様被決候會津侯桑名侯之思召ニ之橋府土地ハ不可然候得共昨秋變動昨冬江州御出張之賞ハ可有之重御品頂戴有之候様被置馬ニ金三萬兩御内儀被仰談候處播州侯御同意之由

一播州侯ニ之橋府御斷之書付ニ將軍家より御添翰御持參ニ相成内々橋府に被入御内覽候處橋府ニ茂御納得之由此節瀧川侯御登京之儀右之所迄ニ御登京之都合ニ而彼五万石之一條橋府ハ少茂御不審無之都合能事之由

一播州侯御廟議ニ之候得共此御座中故御咄之由華城ニ而橫濱談判之御議論有之大小監之御見込兵庫代地を遣不申候而ハ迎茂談判出來兼可申と被仰立候處板侯小侯兩閣老之御見込ニ之各之被申立候處尤ニ候得共是迄外夷談判之流弊ハ成否を見當候付每茂六ヶ敷相成候此節ハ誠實を以談判ハたし此度伯州侯列談判出來兼候ハ、小笠原侯御出ニ相成可申惣而出來兼候ハ、板倉侯御出ニ相成可申幾重ニ茂條理相立候様談判可致外無之段斷然御決心ニ付大小監方ニ茂代地之御論御引ニ相成候由瀧川侯ニ之即夜深更ニ御下坂ニ相成候

右之桑名侯瀧川侯御咄合之趣桑名公用人小寺新五左衛門御前に罷在候由直ニ承申候
一廿五日桑藩森彌一左衛門大坂より登京ハたし板倉侯小笠原侯より御内命ニ而罷登候由瀧川侯御下坂ニ相成閣老方に京地之御議論被仰達候處御尤ニ被聞召猶爲念朝廷御都合能有之候ハ、彌以京地御議論之通御廟決ニ相成可申御賞美之御

品茂内々會桑侯に被仰談候由御賞品前有之略先日來此許御役々相談ニ相成此節五万石間違之事故跡者増々疑念を被生候儀ニ有之候而橋府閣老隔絶之基ニ相成可申一刻茂速ニ橋公御下坂ニ相成人心狐疑を被解候様有之度一決ニ相成居候付森に直ニ右之通申入候處至極同意ハたし然者此節御賞美之節大樹公より華城ニ被召御直ニ被仰渡候様有之度君侯思召相伺思召無之候ハ、會津侯に相伺御同様ニ候ハ、盡力可仕由ニ付廿七日比下坂ハたし候由之事
十一月晦日 淺井新九郎

十二月二日我藩吏員葉室慎助宰府に於て薩筑肥米四藩士と三條實美等警衛に關する商議を爲し其要領を藩政府に報告す
〔長州再征帳〕

宰府表應接書取

十一月廿五日太宰府に到着仕候處肥前羽室雷助南里與助ハ翌廿六日着福岡表重役以下ハ同廿七日迄ニ追々着込之處久留米之重役馬淵彌太郎病氣ニ因而當月朔日參着ニ付直様筑藩に懸合同二日之夜檢校坊と中坊舎ニ而一同集會

- | | | |
|-----------|--------|--------|
| 福岡 | 薩州 | 久留米 |
| 番頭 藤井九左衛門 | 肥後 直次郎 | 馬淵彌太郎 |
| 森戸新五郎 | 肥前 | 今井新左衛門 |
| 鶴原九平 | 羽室 雷助 | 中田久馬八 |
| 戸田春平 | 南里 與助 | |
| 寺田嘉兵衛 | 中村次郎作 | |

右之通打寄ニ付歩御使番之内兩人同道罷越申候處筑薩亭主ニ而色々周旋藤井儀五卿以下取扱之稜書(別紙有之)を以此

條々篤斗申台御一致之所を以取堅申度と之演舌

慣助答

右之件々ハ今迄現之有形と致一覽候此條件ニよつて締方之仕法等其目途被建置候事ニ而可有之哉

藤井云

是等之事件御各藩之御見込ニ應し取固可申山云々

慣助答

當所飛入之私共ニ而ハ内外之情實一圓不相分更ニ定見相立不申乍然近日來境内之模様致見聞候處ニ而ハ延壽院丈之御圍ハ御取締も相立候儀と見受申候へとも所々散在之族等如何之者ニ可有之哉是等一時急迫ニ嚴格之御運平穩ニ而筋付可申形象ニ御座候哉何分走込之者ニ而ハ所見無之段申聞候處諸藩各尤と取合有之候然ニ藤井話之端番衛ハ交番之氣取と見へ候様なる意味ニ聞取候間其事承候處各藩御人數出張之上ハ交番之積ニ心得候山

慣助云

交番之儀ハ逆旅之他邦人萬事行届兼候而已ならず物ニ不馴兼向方之用辨應接之間ニハ如何なる間違を引出し御各藩之迷惑とも相成候而ハ難相濟彼是重疊不安意之筋ニ付此儀ハ今迄之通被差置候様御依頼被成度肥前侯とも被仰合其趣を以御懇談仕候様被命候事ニ付彌以御依頼可申段斷然申切候處佐米二藩も肥後様御同然之心得ニ付宜と申述候

藤井云

右交番之儀薩州にも兼而御相談有之候付御同様之譯を以一應ハ及御斷候へとも夫ニ而ハ筑前之面難相立次第懇々御頼談ニ付様々思惟仕候處只々薩より足輕と而ハ六人外登居不申候付外之仕法ハ無之士分四十人連越居候間是を廣間之交番ニいたし可申尤取分不調法粗忽之國柄京人應接等ハ以外心遣ニ候間支關前へ假屋を取建廣間番衛ニ當可申左様相成候得ハ用辨方其餘萬事之事ハ如今迄筑前様御引受被成候ハ、可宜哉と見込候此儀如何と云々

慣助答

斯之道ハ全中隅之論説至極尤之筋と存候然處此方ニ而ハ前件之通堅御依頼之儀を精々被相含且追々長州之御處置も御歩ひニ相成頼而監察御下り之上ニ而ハ何處之御模様相替候儀も可有之哉ニ付先當分今迄之通被押移候而も可宜哉よし又貴説に御同意申もいたせ君上方被仰合之末ニ付一旦復命之上なら而ハ決着相成兼候段及返答候處米佐も一同肥後様御同様之處分と演述之處薩筑とも猶發論とてハ無之候

森戸云

當表五卿之譯ニ因而爲取締構内物頭組共致廻方候此後ハ内人之關係も無之候付各藩是を交番ニ而受持ハ如何と云々

慣助答

御預人之警備筋とハ乍申他邦之者ニ而ハ所柄之情實不吞込差寄地人旅人之見定さへも出來兼候而々人を制可申事ハ中々難相成筋ニ而院内之詰番よりハ一層之難穴ニ有之連も其筋之者決而御請可申見込更ニ無之候間此儀ハ斷然御斷申度段演舌之處米佐も同然と云々

右之次第ニ而猶彼方より盛返之論談とても無之段々及深更候付話合ハ先夫限ニ而盛饜之饜應有之候

一右之末交番之一條ハ平かニ承諾可有之體ニハ相見不申勿論最前之趣を以申張候半事は難き事ニハ無之候得とも左様之

持ニ至候而ハ忽大臺御順然之御趣意を損ヒ不可然後道之結局再三愚案仕候處今度監察衆之御下向と申も筑前之周旋に

出申たるニ而ハ有之間敷哉左も御座候へハ薩筑ハ一腹之儀ニ付二藩より突込詰り交番之御差圖ニも相成候様成行候而

ハ極々御不手際ニ可有御座其上唯今宰府現在之形象見互候得ハ院内交番ニ而も無之候而ハ各藩御合體之有様五卿を始

場所柄於表面一切相見不申候然ニ根元筑前様ニ而ハ此節非常大變之御嚴斷を以藩中御一新有之是迄宰府之不處置を被

謝各藩御合體之形迹を表し萬般御一和之運ニ被成度と之御頼談ニ候得ハ差障も無之筋ニ相運候道路於有之ハ是非其向

き之御盡力不被成遣候而ハ第一御隣交之御信義相立不申又薩州ハ前記之通專周旋仕候儀ニ付成せハ可成筋を一途ニ御

勿切ニ相成候而ハ何歟御私便を被計候様ニも相響萬々一彼御兩家に御間隔とも出來仕候様なる事ニ成行候而ハ以外

之儀ニ而甚懸念之様も御坐候然ニ前文薩ニ而見込之通廣間計之交番ニ致候へハ煩き心遣も無之相見申候得とも彼藩同

様士分十人詰と申而ハ御人増不宜ニ付有懸之步御使番杯二人外様足輕三四人ツ、も相詰候分ハ造作も無之彼面々ニ取

而も實ハ箇様之勤稜有之一日ニ而も隙なし仕候方屹度身爲と見込候事情も御座候間左様相成候得ハ内外とも都合能相

運可申存付申候間先肥前衆に其趣を以内談仕候處彼方ニ而も此儘末之治り付兼候見當無之候處至極之存付尤同意ニ付

久留米に申入候而同案ニ候ハ、三藩一同筑藩に申入候方可然と之儀ニ而南里與助久留米ニ相越話合之處是以重疊同意

之趣ニ付三人一同筑亭へ罷越交番等之條件三藩國議之次第昨夜申立之通ニ候處當地之形象且ハ御情實之趣彼是思惟

致候へハ一偏之論ニ而も濟兼可申候間延壽王院門番其外用辨應接等ハ總而今迄之通御引受ニ相成支關向建切士分貳人

輕輩二三人宛交番致し候迄之所ニも相成候ハ、是非々々故障と申程之儀も有之間敷哉と存付候稜も御坐候間一應歸藩之上實地見聞之事情等及建白可申素國議之程ハ孰も測兼候得とも私共丈ハ盡力いたし決着之趣ハ出役之物頭より及挨拶候様いたし可申段一同申述候處不怪敷之模様ニ而昨夜御應答之次第業議仕候何分此儘美濃守様ニ申上候言葉も無之九左衛門始甚以行當既今朝以來如是奇合論談仕候儀に候處箇様之深志萬謝々々何様御懇和之姿外面に顯さへいたし候へハ筑前之面相立御人之多少なとハ決而論ニ不及候間吳々も依頼仕候と之事ニ而實以筑前私便之筋とハ聊相聞不申各藩交番無之候而ハ御合體之形狀更ニ相見不申候間前條之次第如何可有御座候哉宜敷被成御判決可被下候事

十二月

葉室 愼助

別紙稜書ハ是非筑藩ニ而目途を被建候様せり付置申候ニ付私宰府發足之前日暮方ニ至森戸新五郎以下四人携來是非箇様ニいたし度存念ニ而ハ會以無之彼方ニ而見込之儘をしらへ立入披見候間聊無伏藏存寄申聞吳候様と之事ニ御座候間差寄廻り方之儀ハ昨夜も委細申入置候通見込無之其外篤斗御國許ニ而話合様子ハ出張之御物頭を以て及答可申挨拶仕置候

一五卿始外出並隨從之者散在之儀取締之儀ハ此節公邊より之御再達且監察衆御下向被是上々之機會ニ付條理得失を明辨いたし水野溪雲南大一郎に説得之次第相談仕候處至極尤之議論とていつれも承伏之返答ニ御坐候左様相成候得ハ別紙外歩杯之件ニハ又模様も相替り可申哉と相考申候

十二月

葉室 愼助

- 一五卿衆住居所總詰當番之事
- 五藩より廣間に代る々々士分兩人宛出方之事
- 一同所玄關番之事

- 一五卿衆並家來隨從之者其他方より文通等差留候事
- 右趣次第ニハ御各藩御打合仕取計候事
- 一同所斷而會之事
- 右ハ差留候管ニ候尤趣次第ニハ御各藩御打合仕候上取計候事

但是迄之通弊藩より受持毎事御四藩に御通達之事

一表裏門法之事

追而定書入御披見候事

一廻り方之事

五藩より代ル々々御受持之事

下ニ付札葉室執筆

御本紙之内廻方之儀ハ追々御面談を以御斷申置候通

之次第ニ付彌以是迄之通御依頼申度外之稜々ハ都而

御書面之通相心得可申候

一五卿衆構内徘徊之事

五藩より士分一人宛爲守衛付廻之事

一右家來並隨從之者宿内外徘徊之事

右弊藩より足輕付添候事

一右同旅出之事

右差留候管ニ候尤趣次第御各藩御打合仕候上取計候

事

一隨從之者並五卿衆家來とも爲藥川湯町並須惠等に罷越

候事

右弊藩より足輕指添尤其節ニ御各藩に以廻狀爲御知

慶應元年

三九五

仕候事

一五卿衆並家來隨從之者其他方より文通等差留候事

右趣次第ニハ御各藩御打合仕取計候事

一同所斷而會之事

右ハ差留候管ニ候尤趣次第ニハ御各藩御打合仕候上取計候事

取計候事

一自然火災有之節之事

右兼而指出置候定書通相心得候事

一五卿衆並家來隨從之者共責馬之事

右責馬ハ差免乘廻りハ堅遠慮爲致候處ニ申入管候事

一右之面々武藝之事

右致遠慮候様申入管候事

一爲取締當構外出張之事

右ハ弊藩より人數指出置候事

一御守衛交代之節互ニ吹聽之事

右上下人數士分者名書を以通台候事

一自然非常之節出方場所之事

右ハ各藩御立合之上於現場相定候事

一評議之上各藩一同御内に申向之事

十二月三日幕府は神奈川長崎箱館三港の奉行に對し外國と和親を實正にし商法を嚴格にすべき旨を達す

〔慶應元五年の風聞書〕

二月七日附

神奈川表より來飛

一筆啓上仕候然者各國厚御取扱之儀ニ付三港奉行に被仰渡候寫奉申上候其外何等相替儀無御座候此段御達申上候云々

神奈川詰

關 三右衛門

二月六日

〇 〇 様

丑十二月三日

伯耆守殿御渡

神奈川奉行
長崎奉行
箱館奉行

覺

一外國和親實正ニモる事

一右實正ニモる根本者 公武御一和之事

一商法を嚴格ニ立る事
一萬事誠實を本とし互ニ公明正大に處置すゝき事

右之通被 仰出候間御趣意之旨相心得入念取扱候様可致候尤是迄逆も都而實正に取扱候ニ之可有之候得共今度條約勅許も有之候ニ付而者外國人談判筋其外猶更万事誠意を以取扱聊も虚妄之儀無之様との御趣意ニ候間其段可被相心得候事

十二月

十二月三日日本藩江戸留守居は征長出師發程に關する幕令を報告す

〔慶應元年八月以來 元治二年正月迄 慶應二年十二月迄 御國京 都大坂 返達 御用 狀 控〕

〔江戸都探索書、御國京 都大坂 返達 御用 狀 控〕

〔十二月三日附江戸留守居報告〕

御城出之御城使御坊主小谷景悅より手ニ入候御觸達寫等

毛利大膳末家並ニ家老共之内且寄兵諸隊中之者藝州廣島に呼出承札之上模様ニ寄惣御人數差向候ニ付攻口割合其外御中軍之内壹番隊並井伊掃部頭榊原式部大輔等藝州表迄出張貳番隊以下御先列之面々引續出張之筈被仰出候ニ付而ハ猶別紙割合之通被仰出候間差圖次第早々出張可被致候此段御供万石以上以下之面々に可被相達候

十二月

藝州表海陸出張割合之通可被心得候

初日

二番隊
四番隊

二日目

五番隊
六番隊

三日目

慶應元年

三九七

七番隊 内藤若狭守
 稻垣信濃守
 四日 御中軍前日
 八番隊 酒井河内守
 五日 御中軍
 拾番隊
 六日 松平伊賀守
 牧野河内守
 七日 拾六番隊
 拾六番隊出立後

松平丹波守
 内藤備後守
 松平讚岐守
 徳川玄同殿
 海路出張之分
 三番隊
 拾一番隊
 拾二番隊
 拾三番隊
 拾四番隊
 拾五番隊

右海路出張之分
 御中軍御日限被仰出次第夫々割合出張之積
 一陸路出立之面々荷物等見計船廻しの積
 右之通被仰出候事
 十二月三日
 青地源右衛門

十二月三日 播州安志藩主小笠原幸松丸征長從軍を命ぜられたるを以て書を我藩主に贈り依頼する所あり

〔他所御往復〕

一筆啓上仕候今般毛利大膳父子伏罪之儀御疑惑之廉々被爲在候付右爲御糺大目付永井主水正御目付戸川鉾三郎松野孫八郎藝州廣島表に被差遣大膳末家并家老共之内且寄兵諸隊中之者茂同所に被呼出承糺之上模様ニ寄惣御人數被差向候間下之關口一之御先被爲蒙 仰候段承知仕珍重御儀奉存候私儀同姓左京大夫人數并近江守一手ニ罷成同所一之先之心得を以御差圖相待候様被 仰付難有仕合奉存候小勢之儀御座候間萬端宜被仰合可被下候右之段爲可申上如斯御座候恐惶謹言

小笠原幸松丸

十二月三日

細越中守様

参人々御中

貞孚

十二月四日 一橋慶喜攝海防禦指揮を辭せんことを請ふ、允されす

〔京都大坂長崎探索書、壬生御陣屋引移以後諸扣〕

一御坊主木村養拙より手ニ入候寫

十二月十一日

私儀春中當地御守衛惣督被仰付候節攝海防禦指揮之儀被仰付候處何分多端之御時勢此上實備行届候見据も無之萬一非常之節御手薄之儀御座候而者恐入奉存候間何卒前顯攝海防禦指揮之儀御免被成下候様仕度此段奉願候以上

慶應元年

三九九

十一月

大樹公御口上書

一橋中納言申立候書面之趣ニ者御坐候得共差向同人之外攝海防禦指揮可仕者も無之と奉存候間中納言願之趣と御聞届無之様仕度奉存候此段 奏聞仕候

十二月四日長藩使節六戸備後助訊問八箇條に對する答書を幕吏に提出す

〔從京都來候探索書等、探 書〕

元治元年ヨリ慶應元年迄

〔十二月廿五日附三宅書翰に添附〕

御問

當春内輪致爭鬪候付大膳父子乍當中爲鎮靜致出張候段一應致御届有之候迎茂委細之事不分明との御事

御答

右者大膳父子寺院蟄居中役方に委任仕置候處役方之者私怨を挟み殘忍刻薄之取計方いたし情實通兼候付土庶一統憤

懣ニ堪兼少々争鬪ニ茂相成候得共肝要謹慎中之儀ニ付早速父子申合鎮撫最前之通罷在候尤右之筋ニ付舉國沸騰之姿

ニ茂相見萬一意外之儀致出來茂難計就而之父子蟄居役方に而已委任仕置候而之又候事實不通よりして肝要謹慎之旨

趣茂徹底不仕様可立至哉左様にて之別而奉恐入候儀と奉存御届申出置候通乍蟄居中不得止廻在直々指揮鎮撫仕

居候體ニ御座候

御問

當春之争鬪已ニ及鎮靜候上之大膳父子如已前萩に引取懼可罷在處一昨日申立之趣ニ而之鎮撫之爲と者乍申只今以山口

に罷在處々巡行いたし居候段如何との御事

御答

内輪鎮靜相濟候得之最前之通歸萩罷在可申管ニ候得共士民一統萬年來之旨趣いつれも承知仕居最早御寛大之御沙汰

振可被爲在と奉渴望候折柄豈計ん哉御再討之風聞等仄ニ承り及候而之國不知其所由士民何れも驚嘆之餘何賦必死

覺悟之様子ニも相見候付億萬一不心付之者有之如何様之所業可仕も難計役方に而已委任仕置候而之又候舊年來之誠

意を徹上不仕様相成可申哉と苦慮之餘り何と歎御沙汰被爲在候迄之別而鎮撫專要ニ付御届申出置候通廻在を茂仕不得止廻在懸り領國中央指揮方便利宜しき場所に暫滞居候次第ニ而畢竟去冬來之誠意貫徹爲致度心得より差起候事ニ御座候就而之山口滞在も眞之茅屋手挾之假住居寺院蟄居同様之心得を以罷在候儀ニ御座候間右苦慮之次第不惡被思召分被下候様奉願上候

舊冬破却之山口春以來再築之儀評議其後加修理武器間配いたし候との御事

先般外夷拒絶期限等被仰出候付而之何時襲來茂難計候處領國之儀と三面沿海敵衝之場所も不少殊ニ萩城地之邊鄙之所柄ニ而領内之指揮行届兼且之城下敵衝ニも相當り防禦方難渡之地形ニ候處古今時勢之違敵狀之變も有之十三代之祖輝元慶長中城地御親之節山口ニ之側廻相動候者計召連常々罷居他國使者之引受等仕候様との御内差圖之次第杯も有之旁山口之儀之領内に指揮方茂宜敷候付全以城構等仕候儀ニ而之無之眞之土居取連手近ニ召遣候家來計引連罷越居萩城に之番兵差置藩鎮之任且々も奉遂其節度書面を以相願候處巨細繪圖面相添差出候様との御事ニ付再繪圖面相添差出置候未だ御許容と不被爲在候得共其節既ニ領内に之諸夷追々襲來も仕片時々難開次第ニ付願出置候通眞之土居取立候而已ニ而普請ニ取懸現場城構と申儀ニ無之段之聊以御届面ニ相違無御座候然處去秋變動後何賦異心有之築立候様御聞及ニても被爲在候被破却之儀被仰渡何共迷惑ニ之奉存候得共恭順之誠意を以御沙汰奉待候折柄に付破却ニ取懸御見分を茂奉受置候儀ニ而委細戸川様御承知之通只今ニ至迄相違無之候尤先般外夷防禦武備充實之毎々被仰出茂有之候付奉遂其節度心得ニ而書面繪圖等を以御願をも申上置普請ニ取懸候儀ニ而元來父子異心無之御奉公之爲のミ造營仕候誠意之領内農町之もの迄茂篤斗承知仕居候へ之口外ニ之不仕候へ共去冬破却取懸候節も餘程内心ニ之不平ニ存居候ニ而も可有之哉今春國內動亂之節不待差圖修覆等ニも取懸可申模様ニ付早速取押其儘差置候事御坐候就而ハ別段加修理大小炮等間配之儀ハ勿論虚説ニ而決而無之儀ニ御座候最前より御届申出置候通城構と申ニ而茂無之況而普請半途未居住仕候ニても無之候間此等之儀深く御亮察被下候様奉願上候

謹慎中家來之者馬關來泊之英人夷イと懇親接待いたし候との御事

右之去秋京師變動ニ付而之深奉恐入候積年 叡慮貫徹候様ニと苦心盡力之廉も私闘之姿ニ付一先夷艦通航差免許イし改而御沙汰之旨を茂奉受度止戦之應接ニおよび通航差免許イし并薪水食料缺乏之節之相渡候而已ニ而其節早速御届申出置候通ニ御座候此外別段懇親接待いたし候儀之無御座候

當春中所持之蒸氣船亞人に賣拂方ニ付家來村田藏六花押有之證書差遣し長門茂其節夷人と直應對いたし候との御事

右被仰聞之次第始而承知仕候右所持蒸氣船之儀之先年於橫濱買入之節最早速蒸氣船餘程年數を茂經候由ニ而何れ改製不仕而之長持六ヶ敷候へ共領内ニ而ハ其手數出來不申其儘近海等之且々運用仕居候處過ル亥年於馬關攘夷之節蒸氣釜破損一旦及沈没其後再引上破損之釜之手入等仕可成運用ニ相成候得共元釜古釜之儀遠洋乗出候儀之無覺束猶又舊年來領内方他國に船差出候儀も不相成旁當分不用ニ付右船領内三田尻に碇泊兼而乗組申付置候もの之何をも揚陸爲致置候處不計も當春領内騷擾之節何もの所業ニ候哉夜中右船及紛失行衛不相分領内方脱走仕候ものも有之候間右之者共之所爲ニ候哉又之領内之騷擾ニ乘し脇方浮浪之もの立入奪去候事歟と被察候へとも差當行衛可相尋手段も無之數月を經候内ニ之何とか蹤跡可相分奉存候へ共今以いつをニ而右船見受候様之風聞も不承候間古船の上蒸氣釜破損所等も有之儀ニ付遠洋乗出及沈没候ともニ。之無之哉と相考居候處被仰聞候趣ニ而之亞人に賣拂村田藏六花押之證書差遣長門儀其節夷人に直應對いたし候との御事奉驚入候儀ニ御座候右ニ付相考候へ之多分右脱走之者又之浮浪之もの等金銀調達之爲右船を奪去應對之節長門と偽稱し或之藏六花押偽作いたし國許方賣拂之體ニ見せ候ものニも可有之哉何分共可惡之所業と奉存候長門儀之去年來謹慎中決而私ニ夷人に相對仕候儀。無之候藏六ニおひても主命を不受自儘ニ右船賣拂候儀之決而無之候被仰聞之旨ニ而右船蹤跡ハ相分候へ共何とも言語同斷之所業國元之儀種々離間ケ間敷風説等相唱候もの有之のミならず右等惡所業を以御疑念を茂奉懸候次第承候而之不堪切齒儀と奉存候

大小砲夷人方買入候との御事

右之何等之事方左様之風説差起候哉其根元之承知不仕候へ共國元ニ而之去秋以來謹慎中ニ候得之右等之儀之決而無之事ニ御座候

筑前に引渡ニ相成候元公卿に使者并贈物差送右爲答禮諸大夫森寺大和守長州に罷越候との御事

右之大膳父子謹慎中ニ付使者贈物差遣又之答禮ニ預候儀等一向ニ無御座候就而之乍序元公卿方國許下向之次第可奉申上置候元來一昨亥ノ八月十八日當座之御様子ニ而之偏ニ九重内不尋常御大變と而已奉存素より 聖躬ニ聊之御儀被爲在候御事と之不奉存候へ共國元頑固愚直之性質ニ而相考候得之姉小路少將殿大變後間もふき事ニ候へ之右等御輔弼之御方々萬一も不測之變ニ被爲遭候而之乍恐皇國之隆替のみならず公邊御政治向之張弛ニ茂相係り可申哉と煩念之折柄右元公卿方より爲攘夷西國下向之御願をも被仰上候哉ニ承り就而之御罪案之御趣旨之一回承知不仕 朝廷御様子振相分候後如何様とも御差圖可被爲在と奉存一同國元ニ御供申上候由ニ御座候然處於國許之大膳父子始委細之御様子之承知不仕只々御下向之様子報知ニ付早速御途中迄家來差出御歸洛ニ相成候様御理解之儀申付候處海上御下向ニ而行違ニ相成已ニ國內に御着岸不得止儀ニ付而此上篤と御理解可仕夫迄之處御差支無之候ハ、國許に御留置仕度段早速相願御差圖奉待候處其後爲何御沙汰不被爲在至去冬筑前表御引渡之御沙汰被爲在候付御引渡方仕候事ニ而其節監物方も追而都下御歸入相成候様御取扱之儀相願度申上置候儀も有之今般於私も其段奉願上候右等行懸も有之旁外向委細之情實承知不仕全私意を以取計候事歟と計相考候故ニ茂可有之哉此度被仰聞候様種々御疑惑を。奉懸候風説も差起候儀哉と奉存候間此等之情實篤と被知召。被下候様奉願上候

淡路監物大坂に被召呼候處離罷出段申立候趣も有之候付曲而被任其意外末家并ニ家老之内申合九月廿七日迄ニ可罷出旨再應御達之處終。及延引候との御事

右之最前淡路監物被召呼候節急速登阪可仕儀之勿論ニ候得共國內事情不得止儀有之且之兩人病氣旁早速登阪難仕御

猶豫之儀歎願申出候趣も有之委細御承知被爲在候御事と奉存候就而之外末家家老ニ而も國內事情之同様之儀且左京讃岐儀も病氣ニ而是又急速登阪難仕無餘儀御猶豫相願候儀ニ御座候尤私共儀ハ早速罷登候覺悟ニ候へ共國內事情ニ付而之鎮撫說得且之被是懸合等之心配も不少旁不得止被仰出期限迄上阪難仕暫之間御猶豫之儀之藝藩に取計方相願置可成丈差急上阪之心得を以當表迄罷出候事ニ御座候間於大膳父子最前より上阪不申付心底無之段ハ御諒察奉願候就而之國內不得止事情。別而厚御推察被成下候様奉願上候

穴 戸 備 後 助

〔慶應元年 尊攘録探索書〕

藝州表聞取書

先月廿日大小監察長門家家老穴戸備後助を國泰寺ニ被召出御札明之儀者田上慎三郎言上仕候間別段録上不仕候同晦日木梨彦右衛門井原主計名代 中老職之由於同所御札明相濟候後隊長河腰安四郎井原小七郎入江喜傳次三人一同ニ被召出御札明御座候處御札明條は穴戸同御返答之趣何レ茂無異同一應相聞へ申候間備後助一同申談書面ニいたし差出候様被仰付候處當月四日相認差出申候然處段々文辭之上ニ稜立候箇處有之間ニ者不敬ニも相當候間引直差出候様被仰付候處御受申上近日内差出候管ニ御坐候右書而差出候上之直様大坂表に御伺之管ニ而事ニ依り大小監之内御登人之御上坂直と被仰上候御相談ニて未々御決定之無之段永井様被仰聞候

公邊御徒目附共噂ニ之自然ハ開老之内御一人藝州に御下り候由
長州御返答振聞取之大意左之通ニ御座候御問之ケ條ニ御(前掲と大意相同し)きを以て茲に略之
右御札明之大意當夏御再征被仰出之節不容易弁有之云々之御主意者貫居候得共此節者尾州前大納言様御解兵之節之御運ヒニ御引戻シニ而御詰問も嚴密ニハ無之御返答之條理一通相立候得者大略ニ而御取切之御模様ニ奉伺候

○此節者一體寛大之御取扱振ニ而長州之情實を十分御聞届貫徹致候様ニとの御主意ニ御坐候間初度之御應接ニ而長人も不怪安心仕候由永井様より御沙汰ニ而者御奉書之趣も被爲在候得者御差圖邊者不被爲出来候得共當地之模様ニ而者急ニ事變ニおよひ候御見込者不被爲在段内密被仰聞候事右者簡要之主意迄草略相認申候以上
十二月
國友 半 右 衛 門

十二月七日米國に委託製造せし幕府の軍艦富士山横濱に到着す

〔尊攘録新聞紙並夷情探索等〕

日本新聞第廿一號

西曆一千八百六十六年一月六日

横濱開板

慶應元年十二月十日

既ニ世人の知る如く日本政府より亞墨利加ニストルニ託して製造せしコルフエツト軍艦船號フジヤマ積載一千今月九日我十一月廿三日香港を發し廿三日我十二月七日當港ニ到着せ

十二月八日幕府は去年七月京師事變の功を賞し會津外八藩に金若干を與ふ

〔御國家 都大坂 返 達 御 用 狀 控〕

元治二年正月 慶應二年十二月迄

松 平 肥 後 守

毛利大膳家來共多人數押而入京迫禁固及亂妨候節家來共不惜身命烈戦し諸手ニ救應等諸事行届且賊徒集屯罷在候山崎表にも出張速ニ攻落拔群相働候段達御聽一段之事ニ被思召候依之其節出張之家來一同に金七千兩被下候間功之次第ニ寄相應割賦死傷之者にも爲手當爲取候様可被致候

金五千兩

松 平 修 理 太 夫

金貳千兩
 金貳千兩
 金貳千兩
 金五百兩
 *金員數未承込不申候
 金貳千兩
 金貳百五十兩

松平越前守
 井伊掃部守
 松平越中守
 松平隱岐守
 酒井若狹守
 戸田助三郎
 蒔田相模守

* (龍口御役所「風聞書」所載十二月廿三日附酒井若狹守よりの届書に「去ル十一日云々金五百兩被下候間云々」とあり)

十二月八日我藩森井惣四郎會藩小野權之允林三郎と大坂に於て閣老小笠原長行に謁し閣老松平宗秀の外人應接のことにつき意見を陳ぶ

〔從京都來候探索書等〕

(前文は十一月廿七日の條にあり)

一前文横濱之件々大坂表におきて上田久兵衛林三郎と板倉小笠原之兩閣老へ内密言上々し恐ながら伯州ニ而之御應接貫徹いたし兼可申甚懸念之次第ニ御座候と申上候處閣老之御答ニ之自然伯耆ニ而相違不申節之拙者共兩人ニ而是非々々相違可申覺悟を究居候付其儀ハ懸念致間敷との事ニ御座候右之次第ニ付當月八日小野權之允林三郎私同道ニ而小笠原侯へ罷出相伺候ニハ惣林當時關東御在府之御役々々悉く參府開港之御論ニ而御座候間萬一伯州御仕損し之節御兩侯之内御東下御座候とも關東ニ而御同服之御輔佐無之候而ハ乍恐御氣遣申上候彼地ニ而現在見聞い々し候へハ水野泉州御始兵庫を開之御論ニ而御座候と申上候處閣老御返答ニハ此度ハ伯耆も是非談判仕直可申覺悟ニ而水野も其論ニ服

し候趣申越候付容易ニ仕損ハ有之間敷只今關東ニ而ハ兵庫の代港を出その論ニ而御座候京都ニ而も三港と限りて被仰出候儀ニ而之無御座候故代港ハ遣し候而も差支無之歟も難計まかし伊賀守と拙者ハ是非代港なし兵庫も開不申覺悟ニ而御座候此後ハ關東も開之論ハ相止可申見込居候と御答御座候右ニ付猶林より伯州ハ詔を御矯被成候御方ニ而此節御召仕之儀何程ニ可有之と相伺候處兵庫之應接ハ一時彼等を退くる之手段取計置候而後日屹度兵庫開不申様周旋之積リニ候へ之京都之御主意取失候ニ之相當間敷未々談判中ニ候へハ今日 詔を矯たる名目ハ付らば間敷見込居候と御辯白被成候重而林より只今ハ關東御役々々板倉侯御服之御方ニ而ハ無之皆々西洋僻之御方々ニ而候へハ萬事の御所置御異論之御方ニ而ハ御不都合ニ可有之と奉恐察候乍恐思召何程ニ可有御座哉と相伺候處閣老之御答ニ之只今迄ハ打續諸役々々入替りの多有之候而久しく相勤折合居不申候故何事も然シ不申其故萬事貫徹不致事の可有之候間此後ハ屹度役職長久折合候様い々し度當時在職之もの逆も各其才能ニよりて召仕候へハ隨分御用ニ相立可申殊ニ一時ニ難歩い々し候へハ黨派之恐も有之候故擧るも退るも洞察之上漸を以可致管ニ伊賀守と相談い々し置候まかし其方之説も一理有之何様其邊ハ伊賀守と篤斗相談い々し勘考可致との御返答ニ而御座候以上

十一月十四日

森井惣四郎

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ
 以別紙申達候横濱表之模様探索之趣且御地之事情付而森井惣四郎を被指立委曲御申越候通夫々致承知候彼表之儀兵庫ニ而之御談判御取返と申時ニ之運兼長州償金一條之御談判迄と相見候由且閣老方を初御役々々ハ都而開國を被唱講武所當リニ而之斷然戰爭之覺悟を極是非 勅命を奉し一刻も早く御談判を不被遂候而之難相成杯との説も起り居候由現實御地ニ而之事情左様可有之儀と被考申候勿論當時兵庫之要港を被開候而之 朝廷に之御不都合申ニ不及人心沸騰之基ニ而尤不可然候へ共同港拒絶之儀之小笠原閣老方も篤と御忖込之御模様ニ而御胸算之程も難量右之御腹さへ据居

慶應元年

四〇七

候得之寛急御處置之境ハ強而献言等難仕會藩之様子も承繕せ候處是以御同様ニ而君侯を初御差入御盡力と申場ニ之參兼何様事實探索之次第等至密閣老方御聽ニ達候ハ、猶御勘考之筋も可被爲在との評議ニ而同藩々林三郎を大坂表へ被指下管之山ニ付從外藩ハ猶更公然と押出義論杯申上候筋ニ之有之間敷仍而會藩を輔冥々中之周旋いたし候外無之幸當時淺井新九郎も致下坂居候付昨日森井を早打ニ而差下御留守居など篤斗咄合せ候筈ニ御座候右御用相濟次第同人之成丈急ニ御地に差返可申と存候御國より之官御指通候付貴酬旁草略如是御座候以上

十二月五日

三宅

井上 加左衛門 殿

十二月九日閣老松平宗秀江戸の自邸に於て外人と兵庫開港のことにつき談判す

〔自筆御用狀扣〕

一伯州閣老此節横濱に渡海御談判濟之上之其儘直ニ御歸坂ニ相成候様ニとの趣ニ御座候處右渡海後一應御談判之上爰許に御着日々御登城猶去ル九日敷御宅ニ而御談判之處委儀ハ相聞不申候得共兵庫開御取戻之儀ハ一切耳ニ寄付不申趣敷ニ相聞申候左候而翌日蒸氣船乗込御出帆ニ相成申候由是迄程能御受答ニ相成居候末、付右之通聞入不申茂彼ニ道理無之ハ不被申何様中々之難穴ニ被考申候(下略)

十二月十六日

井上 嘉左衛門

御國 惣連名 殿

十二月九日本藩京都留守居上田久兵衛歸國を命ぜらる

〔御國江戸往來狀扣〕

以別紙申達候(中略)

上田 久兵衛

右者於御國許御用有之候間用意濟次第早々差下旨同九日及達申候

〔京都自筆狀控〕

別紙を以申達候上田久兵衛儀一刻茂被差下候方可然と之儀之美濃滞京中追々御話合之通ニ而下着早速と跡役之人柄重疊咄合候得共可然見込も無之積り井口呈助に相決奉親候處不被爲在思召候付去ル廿四日申渡來月朔日比致出立候様子御座候大坂表之儀此砌ニハ候得共呈助も不日ニ其御地着可致候間久兵衛ハ於御國之御用有之用意濟次第早々被差下旨御達候様存候いまた親之埒ニハ至り不申候得共川尻町御奉行可然と中政府とも咄合候事御座候此段も爲御令申進候以上

十一月廿八日

平野 九郎 右衛門

有 吉 市 左衛門

小 笠 原 美濃

有 吉 將 監

郡 夷 則 殿

三宅 藤 右衛門 殿

猶々別文井口呈助着之上大坂にハ同人被差下候方可宜左候而久兵衛ニハ被差下之御達ニ可被及哉新九郎儀ハ宮様御初メ御入魂ニも有之京地ニ被差置候方都合可宜格別之差障も無之候ハ、願曰右之通御取扱有之度候將又阿部松前之兩閣老ハ御用御手殘有之趣ニ而江戸へ御滞之由此節江戸方申來右之通ニ而ハ節角御一新之御運ニ被爲至候内又朝廷方御難問茂出候様之儀ハ有之間敷哉既 朝命を以御在所に御愼と被仰付候末右之儘ニ被押移候而ハ御輕茂之筋

慶應 元年

四〇九

ニも相當可申哉此砌ケ様之處々又々御混雜を茂生候而ハ實ニ歎息之至ニ付會桑又ハ幕府御役筋に一刻も夫々江戸御引拂ニも相成候様々之趣御留守居等を以內々被仰立候而ハ何程ニ可有之哉御見込之程も可有之御用意ニ御話合有之度存候以上

〔肥後藩士 鈴木 登編〕
上田久兵衛先生略傳並年譜〕

十二月十日

○早朝家嚴之書、御國許御用之風評來ル余大ニ疑惑ス飯後財津京より着其命至ル且喜且歎、云々〔原註 日録〕

十二月十三日

○早打ニ而大坂表出立仕、云々〔原註 御奉公附〕

十二月廿日

○七ツ過熊本着、美濃殿行、閣老より高命之通一々同意存念相違シ御人數被差出管ニ一決、歸途道家立寄暮ニ歸ル〔原註 日録〕

十二月廿四日

○花殿出、御足高之内三百石被下置、川尻町御奉行被仰付、廻勸、暮ニ歸ル〔原註 日録〕

十二月十一日閣老松平宗秀水野忠精横濱に赴き外人と談判を開始す

〔尊攘録探索書〕

聞取〔十二月十七日 附益田勇報告〕

一十二月十一日松平伯州侯水野泉州侯横濱表に御出張即日英に御應接翌十二日佛に御應接有之候處御列席ハ外國御奉

行御日附のミニ而日本人と通辨官も御差加無之故木村古屋杯も御談判之模様ハ一切承知不仕併し彼是之模様ニ而推考仕候得之兵庫之御談判ハ何分無之趣之由〔以下は十三日 條にあり〕

〔風聞書、尊攘録探索書〕

十二月下旬

大坂表探索書

伯州侯御東下之御趣意之先頃御渡ニ相成候兵庫開港之御内書御取消之儀御盡力之爲御東下被成候よし

當時外國之評判記

日本政府之役人兎角ニ虚威を張り段々申論候而も和親之道相調不申

佛云氣長ニ情實を盡し候内ニ之終ニ之氷解し國之益ニも可相成候間何所までも從是ハ和親之道を守可申候

英云數年辯説を盡候而も更ニ了解之様子無之此上之勝手ニ爲致可申薩長之一度暴發致し候へ共致和親候上ハ至而懇切ニ謙遜いたし萬事右様ニ參候へハ必當強之策も相立可申候

右之趣伯州侯御探索之上御東下ニ相成横濱ニ而御軍艦より直ニ異船に御乗り込ミ英之ミニニストル館ニ而二宿御泊り程

能御應接も有之殊之外御打解無心置ミニストルト互ニ珍味を食し異人之枕を借り安々と御寝有之候付異人も大ニ喜ひ

流石老功ニ而事も分り斯親敷いたし候上ハ聊申分無之旨異人共申居候由從夫江戸入之節も異人とも御途中迄送り候由

十二月十一日日本藩留守居上田久兵衛閣老小笠原長行に謁し幕令の期日迄に征長の藩兵を出す能はざる所以を陳述す閣老甚喜ばず

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ 慶應元年

十二月十日限御人數出張御猶豫之儀付而昨夜壹岐守様に參謁御國議之趣を以懇々申上候處不怪御心痛ニ相成昨年小倉表之懲創ハ尤之事ニ候得共今度之期限を過人數出張不仕候而ハ重御軍令相立不申如何様之譯有之候とも此上延引之儀者決而難叶是ハ此方限斷然と及差圖候尤已ニ十日之期ハ過且軍鑑に有之儘申立候と有之上ハ已ニ取繕も成兼候場合重疊心痛之次第久兵衛と内密申談迄之事ニ候ハ、極内場ニ而何れ共仕法も可有之處軍鑑之言上ニ相顧候様相成候上ハ内密ニ而ハ相濟不申一體御藩是迄之御誠實公邊之御爲筋と被思召候處ニ而ハ右等之事可被仰立とハ夢ニも考不申扱々了簡ニ及かたき事共ニ候初發小倉に出張と被仰出候節久兵衛より取請られ鶴崎ニ引改候節も實ハ御軍令打交候邊ニハ差障無之とハ難中心痛もいたし候得共初メ伺濟之儀を手許之取調届兼候落度有之無餘儀鶴崎にと被仰付候此上ハ難有被思召期限前早々御繰出ニ相成候事と安心いたし罷在候處又々右之通御申立と申ハ所謂得聞望蜀と申ものニ而餘りなる事ニハ有之間敷哉此上ハ出勢之儀被遊御免候外無之御藩に右之通有之候而ハ公邊ニ而も餘程缺立候得共御軍法之重ニハ難替此様なる當惑之事ハ是迄無之候然處御藩にハ從前々御本末之心得ニ居可申との傳承も有之江戸表ニ而廻動いたし候節なども御勝手に通り候程之御間柄ニ候得者公論を差置役前を捨私論ニ而久兵衛之格別懇意之譯より之時ハ如何様とそ御上之取繕ひ工夫いたし候外無之何様一刻も早人數繰出候様いたし申度左様無之候而ハ柳川藩を是迄押へ置候も徒ニ相成處々出張之一ノ先も種々之異論出來長防之御處置も是限ニ而御藩之爲ニ天下瓦解ハ的然ニ有之如何ニも殘念千萬此方之口よりたとへニも申兼候得共薩藩之如キ是迄之姿ニ候得ハ右様之筋ニわたり差支候様之儀可有之も覺悟之前と可申御藩是迄之御誠實泡沫と相成候歟と只管歎息之次第ニ付此方も今夜中思惟いたし見可申久兵衛も猶深勘考仕候様との儀暮頃より四過迄之間懇々丁寧ニ御話有之候事

十二月十二日

上田久兵衛

十二月十三日一橋慶喜大坂に下る

〔文久三年四月以來 大坂返達御用狀控〕

十二月十七日青地淺井河口より 正月五日着

一橋中納言様當月十三日夕被成御下坂候付善之允伺動相濟申候

十二月十三日閣老松平宗秀横濱を發して上坂し同水野忠精歸府す尋て幕吏栗本瀨兵衛外人と應接す

〔尊攘錄探索書〕

聞取

一伯州侯之十三日曉横濱御出帆ニ而御上坂水野侯ハ同日御歸府右兩閣老御引拂之迹ニ而栗本瀨兵衛様兩日御談判有之其砌之品川榮助と申者通辯役相務候故古屋作左衛門を以右同人に御談判之模様相尋候處件之御談判有之候得とも有觸之事而已ニ而兵庫開港之議ハ 勅意ニ違背いたし居候段之承知いたし居候間此節伯州侯御出張ニ而之屹度右等之御談判可有之左候ハ、彼方も十分談判致たく含ニて相待居候得共閣老より御發言無之故彼方も黙止し罷在模様ニ御座候由

一栗本瀨兵衛様木村道之助へ御咄しニ兵庫開港之儀ニ 勅意ニ戻り候事故是非共御取消無之而ハ不相成候得共閣老方一切御談判無之困入との事ニ御座候由

但先頃攝海へ夷船を廻し其後夷人に色々尻押いたし候儀之栗本様根本ニ而取扱右様之通辭を申候ハ淺間敷心底と風説御座候由

一英のサトフと申者へ兵庫之儀如何と相尋候處此方ニ而之是非開港之存念候得とも閣老方ハ強情を御申出し被成候哉も不相知と返答いたし候由

一英のアレキサンドルと申者古屋作左衛門へ囀候趣ニハ兵庫之儀今分ニ而ハ期限迄ハ相待可申左候得之是迄追々之價金莫大御遣し不被成而ハ不相成當時幕府御費用多キ中愈増御疲弊相成候趣氣之毒千万且近來爲價金頻リニ銅錢を御渡しニ相成銅錢盡候ハ、南部鐵ニ而も御遣しニ可相成鐵も限り有ルものニ候へハ遂ニハ地を割ク外有御座間敷實ニ遠慮ホキ御仕方と囀し致候由

右之久留米藩永田恭平土州福富健次板倉様内吉田謙藏列横濱表ヲ罷越間取之趣直話ニ而御座候事

慶應元
十二月十七日

益 田 勇

十二月十三日幕府軍監長坂血鎧九郎豊後佐賀關に着す

〔長州再征帳〕

軍御目付長坂血鎧九郎様一昨十三日未上刻頃佐賀關に御着船直ニ御上陸ニ而御止宿昨十四日午ノ上刻頃同所御發足ニ候處御途中方雨ニ相成神崎村教堂寺迄御着直ニ此許に可被成御越との事ニ候得共雨天ニも有之川渡等及暮候而之不都合之儀茂難計候間其趣を以教堂寺に御一宿之儀を致御申談其通り相究り昨晩之同寺に御止宿ニ相成候今朝晴雨之無差別五時之御出立之筈ニ候段新美傳之助明石左直ヲ申來今日未上刻頃此許御旅宿法心寺に御着ニ相成申候此段相達申候以上

十二月十五日

西 山 大 衛 鶴崎番
代也

御客屋方

御 奉 行 衆 中

十二月十四日賀陽宮本藩重臣を召見して上田久兵衛の下國を借まる

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ

以別紙得貴慮申候昨日御奉行一同罷出候様宮様ヲ被仰付置候付罷出申候處段々御囀之内此間會藩ヲ罷出上田久兵衛儀御國許より御用有之御呼下ニ相成候儀御承知被成此許之儀關白殿下閣老方又ハ近衛様杯六ヶ敷都合之節久兵衛を御使ニ御遣ニ相成候得者和厄交リニ都合能取直候様之儀有之新九郎ニ而候へ者堅々過候而左様之事出來兼候付御國許之御用相濟候ハ、御差登ニ相成候儀者出來中間敷哉との御相談ニ付其儀ハ何程ニ可有御座哉同人儀付而者御席中カ些御懸念之趣も有之又自身よりも餘り深入仕候而者懸念も仕一旦罷下候上猶出京仕度との内話茂仕候付此節者地役ニ茂可被仰付未タ何役ト申儀ハ承知仕不申候へとも轉役茂被仰付候ハ、直様出京ト申儀者何程可有之哉ト申上候處成程久兵衛才ニ任せ獨斷之事も有之御國議トハ相違いたし可申ト御考之事も被爲在候との御囀も有之又此許ヲ呼登ト申ニ相成候得者矢張宮部鼎藏列ぬキ之節同様ニ相成御國之御威光ニ茂兼障候付左様ニ相成候而者相濟不申との御沙汰茂有之候付同人代リニ者此節井口呈助ト申者被仰付最早出立仕居候付此者を御使御試被成度段申上候處右者以前罷出候ものニ而者無之哉との御囀ニ付遊學ニ者罷登居候事も有之右者久兵衛トハ肌違之人物ニ御坐候得共年齢茂宜敷學問茂勝り居ケ様ト見込申儀者何方迄茂押通候ト申人物ニ而此節ハ能キ選舉ニ相成申たると存申候位之事ニ付新九郎呈助を先御仕御覽被成度段申上候處左候ハ、追而此取扱者久兵衛ニ而無之而ハ出來不申ト申儀有之節者指登吳候様ト之御沙汰ニ付右様之御沙汰ハ得而洩聞候ものニ付同人承知仕候ハ、病茂仕可申哉ト申上候處成程夫ハ病可申矢張極内意を可申候間上より被指登ト申ものニ無之而者相濟不申候付其節之極密可申候間宜御頼被成との御事ニ付委細奉畏右之趣之御國許に可申遺置ト程能御取合申上置候右ハ得太郎ヲ重々御取合申置候付委細之儀ハ書取ニして御元同僚迄指遣候由ニ御座候間御覽可被下候依而私より者一ト通得貴慮申候事ニ御坐候其餘段々御囀茂被爲在候へ共屹ト申上候程之儀者無御座先右之事件迄得貴慮申候間宜被仰談置可被下候以上

十二月十五日

三 宅

惣 連 名 殿

慶 應 元 年

四一五

十二月十四日日本藩政府は時局に鑿みる所あり在京當局に令し征長出師手當米の受取方を猶豫せしむ

〔京都自筆狀控〕

別紙を以申達候御手當米壹万俵御拜領之儀段々咄合申候處再々御人數被差出候付云々と有之候ハ去年小倉に出張猶此節鶴崎佐賀關出張之儀を被爲指候事と相見左候得之此節ハ未出張も無之事ニ付唯今御頂戴之難被遊追而御人數被差出候ニしても外々出張之列藩に拜領無之此方様迄之儀ニ候ハ、諸藩之嫌疑を被爲受候而已ならず公邊之御爲ニも不宜旁御斷被仰上管御座候右之通ニ付御米請取方之儀此方申出ハ勿論自然御役方より懸合有之候共右之合を以程能申向受取方之儀手數無之様有之度且諸藩方右御米之儀ニ付相尋候儀も有之候ハ、是又右之合を以應接有之候様存候右之趣ハ奉達御内聽ニ茂不被爲在思召候間左様御心得御役々にも御令被置候様存候此段早打御飛脚差立申達候以上

十二月十四日

郡 夷 則
平野 九郎 右衛門
有 吉 市 左衛門
小 笠 原 美 濃
有 吉 將 監
長 岡 監 物

三宅 藤右衛門 殿

右御用狀御奉行御留守居に相渡書面之通相心得候様御留守居にハ大坂にも申向置候様申聞候事

十二月十五日關老松平宗秀大坂に着す

〔文久三年四月以來
大坂返達御用狀控〕

十二月十七日青地淺井河口より 正月五日着

一松平伯耆守様當月十五日被成御着坂候付善之尤伺動相濟申候

十二月十六日日本藩江戸留守居澤村脩藏幕府の外交事情を報告す

〔探 索 書 扣〕

十二月十七日江戸立之御飛脚方來ル十二月廿八日之早方御國に遣

御用御頼外國組頭宮田文吉様に今朝里内官右衛門罷出其後外國應接御模様相伺候處伯耆守様御下向追々應接有之候得共兵庫港一條者何分御談判行届不申伯耆守様去ル十一日御當地御發途横濱表ニ而御談判も有之候得共何分行届不申去ル十三日同所御出帆ニ相成候由ニ御坐候價金一條貳度目三度目分百万ドルを耳白錢ニ而御渡相成猶四度目分も催促申出候由ニ御坐候耳白錢御渡ハ全ク價金之廉ニ而外ニ御送りニ相成候儀ニ者無之由ニ御座候

一ロシヤ、コンシール此節出府明十七日御應接有之候由御座候間御様子相伺候處多分蝦夷地境界之儀ニ付催促申出候儀ニも有之候哉と之御噂ニ御座候

一來々卯年中佛國都府ニ而各國博覽會相催候付御國も品々持越之儀申越尤彼國ニ而も太守掛リニて取扱候付御老若大小御目付外國奉行御掛りも被仰付種々御用意ニ相成候筈之由ニ御座候尤被差越候品之内官服貴賤之差別士農工商之衣類又ハ武器其外日用之品々禽獸等ニ至迄警者乗物ハ轅を初四ツ手駕等之類迄其他右ニ準被差出候筈之段御内話ニ相成申候由

一ベルジイ條約爲取替之儀ハ未タ御伺中ニ而御返答無之横濱表ニ相待居候由ニ御座候
右之通御内話御座候段申出候以上

十二月十六日日本藩淺井新九郎上村彦次郎閣老小笠原長行に見えて征長事件に關する藩議の次第を陳述す

〔長防再御追討一件〕

内密得貴意申候長防御所置之儀付而十二月十日限御出張之儀御違有之候付而十日限ハ御人數迄ニ而不被差出管之段御家老中申來候處監軍使茂御出船後ニ而其儘ニ難被差置閣老方に上田久兵衛申上御國議尤御聞届ニ相成候へ共御人數ハ早々被差出候様被仰合久兵衛儀ハ當月十三日早打ニ而出立仕候處同人出立當朝京都三宅藤右衛門上村彦次郎を以申越候趣有之猶御國議致徹底候様有之度申談昨朝小笠原閣老に新九郎彦次郎參調御應答申上候次第別番書取之通御座候細ハ御家老中より言上ニ相成申ニ而可有御座候以上

十二月十日期限御人數被差出候様公邊より被仰出候儀ニ付再度御國許被仰付越候趣を以周旋仕候様との旨ニ付上田久兵衛閣老方に拜謁申上候儀ハ同人より言上可仕候處新九郎京都表爲通議登京衆決ニ付即日下坂後猶於京都表衆議之趣有之上村彦次郎追懸下坂仕候久兵衛畢リニ罷出候御國被仰付越候御用狀閣老方入御披見候付御國議之趣大底通達仕候得共此上猶貫徹仕候様有之度談合候而新九郎彦次郎一同小笠原堂岐守様へ今日拜謁仕候而御國許被仰付越候趣猶巨細申上候様京詰重役申聞候趣ハ發端當五月將軍御進發之節於御途中御建白被差出候御趣意大意申上御建白之寫入御披見右之趣ニ付而ハ御實地之御所置第一之儀ニ付虚聲を被爲張候様有之候而ハ奉恐入候當時御糺問中ニ候へハ暫ニ而茂兵氣を被養現實ニ望候而兵氣擡不申候様との御趣意ニ有之候付當九月之比御布告御打入と御廟議被決候様内々奉伺候付右御建白之御趣意押立篤斗御糺問有之正激分離罪愆然天人憤之勢ニ相成玉石共ニ不燒様御順序之御所置有之度段會桑に相談申立候へ共充分貫通不仕候御變革後永井様藤州に御發足之節御順序被爲

立候而御糺問之御様子奉伺候得共御人數被召連候由ニ付於二條御城會桑より申上候通御先手御人數等被差出永井様多人數被召連候様有之候而ハ長激徒を徹成候勢ニ相成御成效茂速ニ無之且九州勢昨年永滯陣仕候有様會桑を以申上候通ニ有之候將又當秋之比久兵衛阿部様に相伺候趣御國許に申越置候久兵衛書上之寫入御披見申候右ハ御打替も被爲在候得共屹斗書付有之候付御國許におゐて御議定之根元ニ有之候別而久兵衛より入御披見候重役申向狀之通ニ而新九郎儀ハ昨冬小倉に出張現ニ實見仕居候落カマ。處昨八月來追々御人數御練出積ル處一万五千人程敵境に永滯陣兵氣擡候而ハ現ニ望遠ニ振立敵地攻入候儀ハ治世之俗習田舎者之習ニ而頭々茂殊之外心配仕候右付而ハ御備手頭々ニ茂昨年實見之處より實情申立候へハ上より無味取押候儀難成只々當座公邊之御都合而已ニ仕候而ハ却而公邊實地之御爲ニ相成不申候尤豐後ハ御領内に御人數差出候様猶御沙汰有之候間御先手人數少々被差出候迄ニ而之御費弊ニ之關係不仕候へ共虚飾を張名實相違ハムシ候事ハ深奉恐入候何様御糺問中ハ兵氣被養置御糺問之模様ニ應し諸手攻口々々懸候節一同ニ豐後路より被押出最寄ニ長州に攻入實地被遊御奉公度との御趣意ニ有之候段申上候付壹岐守様御沙汰ニ之最初久兵衛申述候處此際ニ至り御國之御人數不被差出候ふと被仰越候儀ハ御尤ニも考不申申越之御用狀被成御披見度段久兵衛に再三被仰聞候得共取藏候様子有之旁御不審被爲在候所申聞候其後御用狀被成御披見候而御國議之趣御尤ニ被聞召上久兵衛よりも委細被成御承知且新九郎彦次郎御國議始終御實地之御運ニ被爲在候段巨細申述候通被成御感服今更久兵衛に責附候段御氣之毒ニ被思召御國並京都詰重役に御國議御誠實之段御聞上ニ相成候趣ハ篤斗申越候様被仰聞候然處御人數之儀ハ久兵衛に申聞候通被差出候様無之而ハ於公邊御差障茂有之各藩攻口々々一二三各被仰付置候御國之儀ハ御實地之御心懸と之乍申別段被仰出候得之外之藩々又々費弊等申立期限御猶豫奉願候様之儀も有之且關東旗下並歩兵隊等ハ西向之心懸乏内々東歸之用意共いたし候位ニ而御國邊を目當居候付此節徒ニ御人數被差出候様申候而ハ虚勢被成御進候様ニ有之候へ共公邊よりハ實不被得止御子細有之候其邊ハ得々勘辨いたし候様被仰聞御許被仰越之趣各申述候趣逐一被成御感服伊賀守様に茂被仰談御上に平日御誠實ニ御所置

被爲在候段ハ毎度申上置候得共此度肥後より申所右之通ニ心懸候段篤斗可申上候久兵衛ハ申聞候通御人數ハ被差出候様猶申越候様吳々御頼談有之候事

十二月十六日

淺井新九郎

〔全書〕

十二月十六日淺井新九郎同道ニ而小笠原閣老ニ拜謁奉願彦次郎ハ申上候次第ニ付閣老より御沙汰之趣左之通今度乍恐拜謁奉願候儀之先月上田久兵衛ハ御國元御人數出張之一條ニ付御國議之次第御内々奉申上候處同人申上振届兼候哉御國議之情實貫徹仕兼於御國元之

公邊之御都合をも不願却而自國之便利を謀り自由ケ間敷儀を願立候様御聞取共ハ不被爲在哉以之外御譴責を蒙り不條理之筋を申立

公邊之御都合ニも差障候上ハ此節御征長之寄手御免ニ相成候外無之との儀も一應被仰聞候御模様ニ付而之京詰重役初一統奉恐入只々當惑之仕合ニ而此節御國議之次第之當五月御進發御途中迄御建白も被爲在候御主意ニ而今般長防之御處置筋之不容易大事件ニ候得ハ勿論姑息之情ニ陥リ御武威立兼候様成行候而之素可相濟様も無之候得とも徒ニ御威勢のミを被爲張候御主意ニ而之御威光ニ被壓無罪之冤を合候様之者有之玉石俱焚之勢ニ至候而之是又公平至當天下之人心ニ飽足候御處置トハ難申一途ニ恩威並行を實地之御運ヒを奉祈上候旨趣ニ而御先鋒を茂被爲蒙仰候上之實地之御奉公第一ニ心懸候儀一國中志願ニ候處乍恐 公邊之御模様ニおひ而ハ既ニ當九月御布告之儘直ニ御討入之御内議も被爲在候哉ニ奉伺候ニ付其砌も一會桑其外御役筋にも御内々初メ御建白之御主意を繼申立候次第も有之候處其後永井様御下向ニ相成屹度被遂御糺明候御筋ニ相運ヒ候段難有仕合ニ奉存罷在候内尙小倉に出張之儀被仰付候ニ付右之途中迄御建白御差出之節節分之内鶴崎に出張仕度奉願其節御附紙之旨も被爲在候趣を以奉嘆願候處尤ニ被聞召上其通相心得不苦旨被仰付難有仕合ニ奉存候將又此節當月十日限御人數出張之儀被仰付既ニ監軍に茂御下向被爲在候時ニ相

成候而猶御人數差出被兼候との儀奉願候儀之奉對 公邊奉恐入候仕合ニハ御座候得共右付而ハ兼而久兵衛ハ阿部閣老迄伺取置候旨も有之其趣を以御國元ニおゐてハ御覺悟ニも相成居且又御國情不被爲得己綫も有之候次第之昨年小倉出張之砌も事なく長々之滯陣ニ相成候付而之出張御人數軍氣茂漸々相弛ルミ事體之辨へ茂無之徒卒之内等間ニ之心得違之者も有之將校之面々之殊之外心配仕實戰ニ臨ミ勝算之見込も無之程ニ罷成候儀等深ク致懸念實地之經驗を申立此節迎も御詰問中御人數出張之儀昨年實験之故轍を踏候様成行候而之初ハ被對 公邊候御實地之御忠節立兼却而御不本意之筋ニも相當り可申上御備手ハ之中立筋も有之難捨置事情ニ付御國議之次第ハ 公邊外面之御都合ニおゐてハ御心痛之場合も被爲在候得共重大之事件外面之御都合等ニ拘り實地之御奉公筋を被爲欠候様御座候而之尙更奉恐入候次第ニ付前後を不願只々御忠節之實功を被奏候儀專要ト御國議を被擬候次第京攝詰合之役々何も尤と存込候處ハ御内々奉願候處久兵衛迄再度被仰付候趣ニ而之御國議之御誠意貫徹不仕却而御不都合之次第ニも成行候而之奉對 公邊素可相濟様も無之奉對御國に候而も無申譯次第と京詰重役初何レも奉恐入當惑之餘一旦之覺悟を差究候程ニ而追懸ケ態ト彦次郎を差下候儀ニ御座候處久兵衛ハ御國來狀等奉入御覽候上之御國議之御實意被爲在御酌取候趣奉拜聽候而之何レも一ト先安心仕候得とも折角彦次郎儀態ト罷下候儀ニ付一應御直上御委細之御模様も奉伺候而京詰重役初ニも申聞候ハ愈以難有安心可仕奉存候間乍恐新九郎罷出候御序ニ拜謁奉願候儀ニ御座候段申上候處閣老被仰聞候趣之最初久兵衛ハ御國議之次第申立候砌一旦之處ニ而之此際ニ至リ御人數出張御斷と申儀如何之筋ニ存し御國ハ之來狀致披見度段申聞候處久兵衛ハ兎哉角取隠し候模様ニ相見候間其邊ニ付疑念を生し候處ハ當座取詰察討ケ間敷儀も申聞候へとも御國ハ之來狀も致披見久兵衛ハ委細之咄も有之今日猶又新九郎彦次郎兩人ハ申出之趣始終致承知候而之愈以疑念致氷解御國議之御誠實逐一感服候ニ付右之次第ハ伊賀守様ニ茂篤斗被仰合 上様ニ茂御國之御誠實委細可被仰上との御沙汰ニ而最初久兵衛ハ御察討之次第氣毒ニ被思召候間歸京之上重役初致安心候様可申聞旨被仰付畢而御國議之御實意ハ無殘所御聞取ニ相成至極御感心ニ被思召候へ共 公邊之御都合ニおゐてハ御内輪不被爲得己御模様も被爲在候次第務々

慶應元年

四二一

被仰聞實地之心懸肝要と一途ニ相心得居候内外面之虚飾を申勸候様ニも聞受可申候得共一國之覺悟と。天下之見直しハ少し異り候様も可有之候間御國御誠實之御主意を以公邊無據事情をも酌取久兵衛に申合候儀ハ其末愈以御國に貫徹いたし候様京攝詰合中かも相助ケ盡力いたし吳候様ニとの御沙汰被仰付候事

十二月十六日

上村彦次郎

十二月十九日本多忠民老中を免せらる

〔御國江戸往來狀控〕

元治元年ヨリ慶應二年迄

以別紙啓上仕候

去ル十九日病氣ニ付願之通

本多美濃守様

名代 本多能登守様

永見健次郎様

右之通被仰付候由御留守居方違有之候此段爲可得貴慮如斯御座候以上

十二月廿七日

井上加左衛門

三宅藤右衛門殿

御家老殿宛

御中老殿宛

十二月廿日本藩物頭上月十郎右衛門三條實美等守衛の爲め宰府に赴く

〔御記録〕

慶應元年

御物頭

上月十郎右衛門

組足輕

二十人

右ハ五卿警衛之儀人數相増取締向精々行届候様御達之趣有之候付用意次第筑前太宰府表に被差越旨被仰付置今日爰許出立ニ而候事

十二月廿日

十二月廿二日幕府軍艦長坂血鎧九郎鶴崎着岸につき我藩備頭堀丹右衛門組一隊に至急同地出張を命ず

〔長州再征帳〕

今度軍御目付長坂血鎧九郎殿鶴崎御着岸ニ付猶其方組御鐵炮五拾挺組頭共至急ニ彼地に被差越候條此段可被達候以上

十二月廿二日

奉行所

堀丹右衛門殿

猶々本文御物頭着付早々可被相達候以上

十二月廿三日一橋慶喜松平容保松平定敬等征長の可否に關し會議を開く尋て再度詰問の事に決し會藩手代木直右衛門藩主の意を受け下坂して閣老を説く

慶應元年

〔慶應元年 尊攘錄探索書〕

先日御上京ニ相成居候大監永井侯去廿六日御下坂ニ付會津藩手代木直右衛門御一同罷下閣老方に肥後守様御趣意申上候由承り候間兩人一同罷越承り候趣左之通

去廿三日京都表ニ而一橋公初會桑侯其外監察方御同席評議有之候ニは當夏來末家并家老共之内再應御召ニ茂相成候得共不罷出漸備後助出藝仕候處段々不條理之事申立内情ハ篤斗相知居候得共彼是申張聊敬服之様子茂無之迎茂いつ迄糺問仕候而茂埒明不申候付此儘直ニ御所置御下し被成敬承致候ハ、其分之事ニ候得共敬承不仕異議ニ及候ハ、直ニ御討入可宜と申御議論有之又は成程可討とのケ條ハ段々有之此儘直ニ御所置御下し被成敬承致モ不致ニよつて御討入被成候而茂理ニ於て害は無之候得共軍事之上ニおゐてハ人心の向背且勝敗之機茂不察候而ハ不相成事ニ付願曰麾下之士茂眠を覺し自然と憤發仕候様相成候ハ肝要之事ニ付是迄御糺問ニ相成候次第有之候間今一應御詰問ニ相成候方可然との御議論有之一定ニ至兼各侯茂篤斗御勘考可被遊此節柄之事ニ付家來々々之存付茂一應御聞可被遊との趣ニ而此日之御評議ハ何々とも落着不仕御勘考と申處ニ而御退去ニ相成申候由然ルニ其後各侯御熱考之上大略御一定ニ而今一應御詰問と申處ニ而落着其趣を以手代木より肥後守様御存念を申上候様との旨ニ而罷下直ニ登城板倉侯小笠原侯伯州侯三閣老に罷出申上候由之趣ニは此節出藝之穴戸備後助（山縣半藏の變名也）は奇兵隊長山縣小助と歎申候者之由ニ而變名ニ而罷出居候由右之次第ニ而重疊不届成者ニ有之候間同人儀ハ少し御不審之ケ條茂有之候と申ものニ而被留置大膳父子に直ニ御尋之筋有之候間出藝仕候様被仰遣出藝不仕候ハ、封境迄御呼出し夫も罷出不申候ハ、乍恐脇より御勸申上候譯ニ而ハ無之候得共徳川家之御爲を被思召身を以殉國の御覺悟ニ而山口城迄御立越一々御糺問を被遊候ハ、跡の御所置茂出來可申自然万一の變茂有之候ハ、申上候迄茂無之直ニ御討入可被遊左候得之必傍觀仕居候者茂從て憤發可仕只今迄之處ニ而ハ何分御腰之居り兼候處よ諸藩の議論茂沸騰仕候間右之通御決心ニ而御差こまりニ相成其上ニ而茂諸藩不

應傍觀仕居候ハ、最早御家之御衰運と御覺悟被遊決而脇ニ無御頓着御決心被遊候様有之度段肥後守よ申上越候と申上候處三閣老御答ニ委細承居至極尤之事ニ而拙者共ニおゐても決心致し候然し 上様に不申上候而ハ肥後守殿へ復命茂出來申間敷篤斗申談 上様の思召茂奉伺可申間候間一兩日滞り差圖相待候様被仰聞候由

右咄終りて手代木申候ニ之此事ハ極々の機密ニ而肥後守方茂屹度申付他ニは決而漏不申様同藩たりとも此事御治定ニ不相成内ハ漏不申様被申間候得共此方様ハ別段之御依頼且御覺悟之御都合茂可有之と奉察候間私文之處ニ而咄仕候との事ニ御座候

右之通ニ付猶廿八日會津藩に罷越一昨廿六日承り候末如何之御決議ニ相成候哉承り候處閣老方御勘考之次第茂御座候間共趣を以昨晚手代木直右衛門上田傳次兩人京都に罷上り候由ニ而同藩田中左内壺人相淺同人儀ハ巨細之儀承り不申候得共大略之處ハ手代木よ申上候趣之御都合ニ相成候哉之由返答仕候

十二月廿八日

青地 源 右 衛 門
中 島 嘉 左 衛 門

十二月廿三日幕府大目付永井尙志等上京す

〔慶應元年日記〕

十二月廿五日

一大監永井主水正様藝州表御越之處長州御談判一ト通相濟一昨日御上京ニ相成候由御越之趣意一向分り兼會桑邊に茂御秘之由此御時躰右様御秘事ハ格別宜敷事ニハ無之亦々何ぞ御釀共ハ無之哉と致潜考候

〔慶應元年 風聞書〕

十二月廿九日附

慶應元年

京都來狀

去ル廿七日會藩某罷越彦藩廣島表に出張之者より内々申越候左之通
先達而大小監察於廣島表御札問之次第柄ハ一ト通之事ニ而申さは押之不足ト申事過日兩監察御上京之節橋會桑侯御一
座御評議有之當度之御札問振御行届無之兩監察ニ茂無余儀御詰問ニ不至廉茂有之其子細之當節長防之形勢全ク陽順陰
逆之心底相合候様相見且新撰組頭取初長人に致面會候處何分手強様子既ニ三都屋敷御取崩ニ相成候始末杯深ク憤り居
候様子ニ付同方より右之趣達上聞當度御札問振ハ御駈引可有之山口城御見分之儀ハ以之外不可然ト兩監察に茂申上候
様之儀有之兩監察ニおるても右等之情態御推考被成候間一ト通之御札問有之御上坂相成候儀無御據儀も候へ共前件之
通長藩之情態幕府を輕蔑し陰逆相合候場合ニ寛大之御所置如何ニも難被仰出候付今一際御責問有之可然との御内評ニ
相成不違兩監察再度廣島に御下り討手之諸侯方には尙嚴敷御手當被 仰出候而御札問之上彌誠實恭明之容子無之時之
無餘儀征長之外無之との御決議ニ御座候由

十二月廿三日日本藩鶴崎出張の物頭を選定す

〔長州再征帳〕

覺

御鐵炮三拾挺頭 宇野市郎右衛門
同拾挺頭 白木五兵衛
右同斷 綾部孫助
三拾挺之副頭 吉海市之丞

慶應二年四月十四日歸藩(此一行は書き入れ也)

鶴崎に被差越候名前右之通御座候以上

十二月廿三日

右書付丹右衛門を御奉行迄添紙面を以達有之候事

堀丹右衛門

〔京都自筆狀控〕

以別紙申達候上田久兵衛儀去ル廿日此元着鶴崎表に御人數繰出之儀聞老方御内命之趣等委敷相達候付段々評議いふし
一番手之内より御鐵炮五拾挺御物頭共當年内ニ被差出可申相決夫々及其達申候尤最前御鐵炮貳拾挺差出被置候付都合
七拾挺之御筒數ニ相成御先手之數ニも備不申候得共彼表御番代を初土着之人數を加候へハ千五百程之御人數ニ付万一
火急之御討入ト申持ニ至候ハ悉皆繰出之都合ニいたし候得之御先手之御人數丈被差越置候振ニも相成又現實七拾挺
丈ニ而申候得之御先手之内被差出置候ト申譯ニも相成候間其御地現實之都合ニ被應御見込ニ公邊御届之儀御留守居杯
御申談程能御取計候様存候久兵衛申出之趣も有之候間此段爲可申達上々早打御飛脚を以如是御座候已上

十二月廿三日

郡 夷 則
平野九郎右衛門
有吉市左衛門
小笠原美濃
有吉將監
長岡監物
長岡帶刀

三宅藤右衛門殿

慶應元年

十二月廿三日我藩醫田中春岱英人斬殺の事に座して遠島に處せらる

〔江戸返達御用狀控〕

水野和泉守殿御差圖

細川越中守家來

醫師 田 中 春 岱

其方儀兼而懇意致候清水清次儀外國人を殺害候旨咄聞上ハ不容易儀ニ付早速其筋に可申立候處無其儀押包打過罷在追而同人被召捕後難之程難計存候折柄勢州桑名表に亡父墓參之暇主人に聞濟相成居候ニ付一旦同所を立去夫より京師に罷越中村泰元と變名いたし潜ニ罷在候段清次に馴合候儀ハ無之共右始末不届ニ付遠島申付候但出帆迄在申付候

十二月某日高輪泉岳寺内の英國公使館略落成す

〔慶應元丑年ノ風聞書〕

十二月開書

高輪泉岳寺土取跡に英館出來相成夷人為應接横濱より來り見分之上海面見晴らし不宜よしにて折角出來之場所所々取崩し候よし且又異人不居合時足輕躰之番人四五人罷在候處浪士共六七人先頃參り候て此様ふるもの差置候而は皇國之御爲メニ不相成候間近々燒捨可申候間左様相心得可申旨申達猶松火ふと少々持参いたし番人に見せ候よしニ付近邊之ものとも火災を恐れ候趣相聞候石之全く虚唱にておとしのためニ申聞候哉との事ニ御座候下略

十二月

十二月某日諸物價高直につき江戸市中小前の者へ救助せし米の石高調査を行ふ

〔慶應元丑年ノ風聞書〕

十二月あらへ

諸物高直ニ付市中小前之者に計御救米被下候米高

七月十九日より十一月十三日迄合人數十九万七十五人

白米七千百拾五石九舛

五舛者 七万六百四十二人

此米三千五百三拾貳石壹斗

三舛者 拾一万九千四百三拾三人

此石三千五百八拾貳石九斗九舛

口數六万五千九百六口町數千三百六十四ヶ町

外淺草寺地中三十四ヶ院

右之通御座候以上

十二月

十二月廿四日神奈川發行日本新聞は英國公使館燒失のこと假公使館に於て内外吏員の衝突ありしこと火災後物價の騰貴せしこと及び屢々外人に危害を加ふるものあることを報す

〔尊攘録新聞紙並夷情探索等〕

慶應元年

日本新聞第廿三號

西曆一千八百六十六年二月九日

慶應元年十二月廿四日

神奈川開版

江戸に於て先日の大失火以來暫時薪炭衣服其他諸物の價非常騰貴せる由、余等情考ふるに是等の事皆日本政府諸役人の不行届より生る事と思へるに、是の如き非余等日本の地に在留を可き免許を其國の政府より受けざるより日本に居留し江戸市中を歩歩せんとする外國人を見て害を加へんと欲する者多く屢々危難に遇ふ事今に至りて未だ全く止まず日本即今太平世界にして此の如き事あるは偏に役人の所置宜しからざる故にして歎息す可き事なり

尙一事件ありし事を聞けり是ハ現今英吉利ミニストルの爲に一時假建の使節館に於て外國役人と日本役人と争ひを起し外國人大に怒を發して日本役人を逐ひ出し且之と戦えんと欲せし由に依りて江戸に在留せしミニストルハルリバルクス此事件取鎮めの爲に大に心勞あざしとぞ

先年盛大に建築せし使節館ハ殆ど落成に至るや否や忽ち一炬焦土とふれり此大災の如きも全く誤失より起りしハ非ぞして惡黨の所爲とせし事疑ひ無し

内田 孫太郎 譯

十二月廿五日本藩物頭三人銃手五十人を先づ鶴崎に出張せしむべき旨を鶴崎郡代をして幕府軍監長坂血鎧九郎に申告せしむ

〔長州再征帳〕

手控

越中守人數出張之儀ニ付而ハ最前委細達御耳置候通於大阪奉伺候處人數之儀ハ先差出候様御沙汰御座候間先度差出置申候人數之外猶此節先手物頭三人鐵炮五拾挺差出申候尤昨年小倉表にハ最初に一備差出候得共鶴崎佐賀關ハ領分ニ而非常爲警備陸方船方共ニハ土着之人數大略千五六百も有之兼て番頭初其筋指揮之役々も差置候間勿論御討入之御都合次第ニハ不取敢右等之人數直ニ繰出引續城下之人數も急速出張仕せ候筈ニ手當いたし置候間右之趣も具ニ相達候様申越候事

(書キ入レ)

右書付ニ添翰白木箱入ニして仕出候事

鶴崎表に御人數出張御見合之儀公邊に被仰立之御主意軍御日附様より御所望の書取ハ頃日差遣置候通ニ候處於大阪表猶御沙汰之趣有之候付此節御物頭三人組共被差出候間右之趣御日附様は申上振別紙手控一通差遣候條御番代にも被入按見最前之振を以御目附様可被達御耳置候以上

十二月廿五日

御 奉行 中

鶴崎

御 郡 代 衆 中

尙々於大阪御内意奉伺候節板倉様小笠原様御列座にて長防之儀理も戦争ニハ不至御見渡ニ候得共一旦被仰出候より御軍令立兼候様有之候てハ難相濟少々ニても御人數ハ被差立候様至密御沙汰有之右様之御都合御目附様ハ申ニ不及一統にも聊相洩候てハ難相濟各心得までニ申達候間土着御人數等を以差當り表分之算用合候様可然御取合可有之旨候以上

十二月廿五日在京本藩重臣三宅藤右衛門は永井尙志等の訊問に對する長藩使者の答書を得征長出兵に關する所見を附して之を藩政府に報告す

慶 應 元 年

四三一

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ

以別紙申達候藝州表ニおいて御札問之次第別紙寫之通ニ而御答書之趣之再三出來之由ニ而結局之處ニ而之無之哉ニ候得共右書面之通ニ候得之中々服罪など申埒ニ無之激家之勢益烈敷此上手詰之御札問被出來兼候處より歎既ニ永井様初彼表方御引取ニ相成候付段々承繕せ候處永井様御見込ニ而ハ先此處ニ而御處置を被付寛大之御沙汰ニ相成候ハハ正激相分候勢茂可有之との趣ニ而會桑邊且閣老方茂其御見込ニ有之候由尤橋公ニ之此儘御處置ニ亘候而ハ折角御進發之詮も無之却而激家之勢を益のみふらも列藩自由を働キ候基とも相成候而者幕威茂是限ニ申ものニ付今一應御手を被詰國內再巡見等を茂被仰付度との御趣意ニ御座候得共若事破候節者直様御討入ニ申御覺悟相立居不申候而者難相成夫等之境永井様御懸念之趣付而者於橋公茂其御目算者屹ト相立兼候哉ニ而未タ御内議も一定ニ至不申由將又永井様被召連候赤根武人列長府に被指越夫方萩家老へ説得之處何方も初發ハ中々受付不申候へとも寛典之御趣意等申聞稍取入激徒之長高杉普作に而會いたし度右家老へ相頼候處是迄晋作よりハ疑を被入候程之事ニ付引合せ等之媒酌いふし候而之彌以關東方之嫌疑を受可申ニ相斷候由右一條ニ而茂激家之跋扈被ト候事ニ御坐候其上英夷方尻押いたし居候而已ならず薩方も専尻押いたし同藩より兵を出し不申候ハハ九州諸藩も疑惑ヲ抱容易ニ動申間敷其内萬一大旆を被動候ハハ一策有之坏との儀も申出居候哉ニ而最可恐之形勢ニ御座候此節之儀實ニ天下興廢之所係ニ而會藩杯よりハ當秋以來御國論之通敵之術中ニ陥候ト申ものニ而是迄之仕損ハ致方茂無之此末之處猶更無伏藏申談吳候様との事ニも候へとも重大之事件廟議之所歸も未タ相分不申從外藩主立候而之參謀之先指扣居候方可然ト御留守居方にも篤ト申含置候事ニ御座候尤結局之處ニ至候而之冥々中彌以天下之御爲を謀御役々周旋之覺悟ニ罷在申候情當時之姿ニ相成候而之鶴崎表御人數之儀御國議之次第愈以的中仕候様ニ被考候得共從公邊此節不被得止御内情を被明別途御頼之趣も被爲在候付而之御國論を被狂少々之人數ハ御指出ニ茂相成可申哉之處此交ヒ諸藩ニ先立討手之御人數出張ト申響ニ相成候而之後道之變化

次第天下の所指茂如何ニ付御領内に御軍監御引受之譯ニ而矢張右警衛之唱を以少々之人數を被増候位之事ニ而御討入之御人數ニ無之段ハ御隣藩等にも繁然ト相分居候様有御座度左候へハ御番頭など押出ニ之不及儀歟ト奉存候長防御處置筋之儀ハ君を代置國を不除ト申様なる筋ニ茂落合可申歟御見込之趣も御座候ハハ至急ニ可被仰下ト奉存候右御人數一件最急務之事ニ付態と上々早打之官脚差立候事ニ御座候以上

惣 連 名 殿

三 宅

猶々長防國內之事情別紙探索書を茂進達仕候以上(長藩使者の答書は十一月四日の條にあり)

十二月廿七日板倉伊賀守秋元但馬守山陵修補の功を賞せらる

〔慶應元五年年風聞書〕

正月十日

持出 和 泉 守

伊賀殿家來より差出届書

舊臘廿七日於京都表同所詰家來之者松平肥後守様は御呼出傳 奏業より被 仰渡候由ニ而御書付一通御渡左之通 板 倉 伊 賀 守

山陵多年及荒蕪兼々恐被 思召候處去ル文久二年於大樹尊奉御修補之儀一切戸田越前守に委任同人爲代同姓大和守令上京五畿内丹州諸 山陵百有餘所御修補速ニ成功相成候處畢竟發業之御厚評之上致差圖候故積年之 御賞裏付狩衣賜之事 御賞裏付狩衣賜之事 右之通大坂表より申越候間此段御届申上候以上

慶 應 元 年

四三三

板倉伊賀守家來

山 本 易 藏

正月十日

〔江都探索書〕

慶應元年八月以後
然者河内國拙者領内ニ有之候雄略天皇御陵御普請御手傳相勤候付舊臘廿七日傳 奏野宮中納言殿大坂表家來之
被召呼蒙 宸賞御狩衣地拜領仕並右御用取扱候家來之ものにも拜領物被 仰付候段申越難有仕合奉存候依之右之趣御
用番に御届申達候此段爲可得御意如是御座候以上

正月十五日

秋 元 但 馬 守

十二月廿八日松平春嶽山陵修補の功を賞せらる

〔風聞書〕

慶應元年
正月十四日

御用番和泉守殿御宅に松平越前守より家來差出候書付

舊臘廿八日松平肥後守様に家來之者御呼出別紙之通從 御所被 仰出候由ニ而御書付御渡有之難有仕合奉存候依之大
藏大輔並越前守より御禮動向之義如何相心得可申哉此段奉伺候以上

松平越前守内

正月十四日

青 山 小 三 郎

別 紙

松 平 大 藏 大 輔

山陵多年及荒蕪兼々恐被 思食候處去ル文久二年於大樹尊奉 御修補之儀一切戸田越前守に委任同人爲代同姓大和守
令上京五畿内丹州山陵百有余所 御修補速ニ成功相成候儀畢竟發業之砌厚評之上致差圖候故積年之 叢念一時ニ被爲
違御追孝相立候段御満足被 思召候依之爲御賞裏付狩衣賜之事

十二月廿八日曩に鶴崎出張を命せられたる三鐵砲頭及び組共今日より明日にかけ熊本を出發す

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ

別紙を以申達候御人數出張之儀付而ハ追々及御相談候通ニ候處一旦被仰出候御軍令立兼候而之如何ニも難相濟少ニ而
茂御人數之被指出候様閣老方々委敷御沙汰有之候よし此節上田久兵衛下着具ニ相達候付御物頭三人御鐵砲五拾挺出張
之及達明日明後日二切ニ被差立管ニ御座候右ニ付一ト通御届之儀此節御書方々申向候由ニ候處御人數之多少等委敷御
尋茂難測依之軍御目附に鶴崎ニ而差出候手扣寫差進候間御留守居杯にも都合能御咄合被置候様存候以上

十二月廿七日

サト省
惣

連 名

三宅 藤 右衛門 殿

慶應二丙年正月五日征長後備尾張玄同江戸城留守とし出府を命せられ尾張慶勝之に代る

〔風聞書〕

正月 大坂より來狀之内抄

一尾州玄同公關東御手薄ニ付 御進發御供被差免御出府當五日ニ被蒙 仰來ル十一日當地御出立之管ニ御座候同五日尾
州老公御封書出候趣尾藩士之眞話ニ御座候多分老公御呼出ニ可有之との趣ニ御座候

一長家老穴戸申開之書付並穴戸木梨もり兼而含ミ居候趣意と諸隊中より差出候書付極々之秘密ニ相見へ如何之儀ニ御座

慶 應 二 年

四三五

候哉少しも取沙汰無之候下略

〔慶應二丙寅年
尊攘録自筆狀〕

清水彦一探索書

紀州様御藩方極内申來

長州之一條も舊冬之模様ニ而ハ穩ニ可相濟模様之處長人之申立ハ高之内少ニ而も減祿いたし候而ハ不相成との申立之由或ハ宍戸備後ハ偽物ト申風聞も有之且薩州方長州を助ケ彼は胡麻すり候趣旁ニ而長州もこたまり候ものと相見品ニ寄候ハ、彌御追討ニも可相成候様子彼是ニ而御歸府之見留附不申夫故玄同様御後備御免關東御警衛被仰出前大納言様御後備被仰出先ツ成瀬軍人正御人數引率上坂追而老公御上坂と申事ニて玄同様來月十日頃御着府之御沙汰ニ御座候畢竟之天朝ニおゐて入らざる國事の御世話振有之長州式ハ薩州の爲ニおだてられ今以彼是と御世話被成候故泰平之世を亂し候様成行儀ニ而埒もなき事ニ御座候彌國亂と相成候時こそ目か覺め可申笑止千萬御座候此段已下略

正月廿七日

〔元治二年正月ヨリ
京都自筆狀控〕

〔二月二日井上加左衛門より在京在藩の重役へ通信の一節〕

然ハ今般玄同様御事江戸表御留守之御心得被成候様被仰出御出府之御模様付而ハ爰許様々異説を生し候趣相聞委細之御趣意も不相分若哉意外之御處置ともハ有之間敷哉と案勞仕候處御出府之上ハ清水御殿に被爲入候筈ニ而左候得之方般ニ御主張と申譯ニも參り兼候付尾藩ニ而も一旦歎息之士も唯今之却而御東行を相待居候由ニ密々相聞(以下略)

正月六日紀州彦根高田三藩の使者藝州より上坂し長州寛典の非を訴ふ

〔慶應二寅年
風聞書〕

正月 大坂より來狀之内(抄)

一紀州彦根高田之三藩藝州出張先より當六日早使着坂京攝之御模様奉伺候ニ 御寛大之御所置ニ御論議之趣只今之儘御寛大ニ而之第一 天幕御威光も衰へ且御後難も眼前之事ニ付根を絶之御所置可有之候様言上ニ及ひ候よし

正月七日閣老板倉勝靜小笠原長行等上京し長州寛典の處置を唱へ會藩硬論を主張す

〔慶應二寅年
風聞書〕

正月 大坂より來狀之内(抄)

一橋公永井侯御上京ニ而橋會桑侯に御議論之處今一應閣老之内御壹人並大小監察之御方御付添藝州に御下り御糺問可有之御論決ニ而永井侯御下坂之上大小監察之御方より此上致詰問候而之如何様之難題申出候も難計既ニ御疑惑之廉も辨解致し昨年来謹慎之儀相違無之ニ付急速御所置可然と御議論起り浪花 御城中御同意ニ而橋會桑三侯に御論議として去極廿九日永井戸川瀧川三侯御上京之處御論決相成不申哉當四日五日頃戸川侯御壹人御下坂同七日夜倉小笠原之兩閣老並戸川侯御上京ニ相成申候閣老方ニハ此上御取詰相成候而ハ時機ニ依り不得止を御人數被差向候御場合ニ至り可申左候而之方今之勢且旗下之兵情實も御卓見有之而之御論ニ而可爲御座會侯ニ而御私憤も有之此度御尋問之廉々申聞き曖昧たる事不少眞ニ伏罪之處も相見へ不申候故此儘御所置相成候而之彼之意之如く相成候姿ニ付 幕威も相衰へ可中今一應取詰伏罪不致候得之長征可致御論ニ而巷説御座候寛猛如何相聞可申哉動靜此御論決一舉ニ可有御座候

正月七日日本藩は三條實美等警衛の兵を増加せし旨を幕府に申告す

慶應二年

〔五卿一件〕

元治元年以後

〔正月七日老中松平伯耆守に提出〕
三條實美初爲守衛太宰府表に人數差出置候處右者松平美濃守殿一切御引受守衛向を初專御周旋相成居候事ニ候得者遠境人數等差出置候而格別之利目無之御進發ニ付而者御先手先鋒被仰付置且小倉表に警衛人數差出候付而内外多端之計會中旁美濃守殿方に致依頼彼地出張之人數當分相減爲用辨少々殘置候段去六月廿五日委細御届仕置候通御座候然處今度長防御處置御取懸相成候付而右實美初取締向行届候様御達之趣ニ付守衛之人數物頭初組共猶又太宰府表に差遣候旨申越候此段申上候以上

細川越中守家來

正月七日

青地源右衛門

正月上旬久留米藩田中紋次郎柳河藩益子多門各々藩命を帯ひて我藩古賀富次を小倉に訪ひ肥米柳三藩の聯盟を策す

〔長州再征帳〕

演舌書取

先頃於小倉御話被下候次第歸國之上直様重役共に申聞孰茂具ニ致承知國許ニ而茂方今之時勢約ル處如何成行可申哉重疊懸念仕候事ニ而御兩藩之儀之御隣領之御國柄別而無伏藏御相談仕萬一異變茂有之節之御相互ニ緩急相授候事ハ勿論之儀ニ兼而相心得居申候處此節貴諭之趣承候而之彌以其心得ニ罷在申候先右之趣私より及御返答置候様申聞候事歩御使番古閑富次方別格之通伺出申候同人儀追而太宰府詰杯ニ可被差越ニ付其節兩藩に立寄本紙之趣演舌仕せ候而者

如何程ニ可有御座哉

〔古閑富次覺書〕

久留米藩田中紋次郎柳川藩益子多門舊冬より於小倉詰合申候處追々兩人より私迄不容易頼談筋有之候趣噂いたし押移申候處當月上旬不圖一同私旅宿に罷越候哉ニ付健氣付共差出閣談仕候内兩人申候ニ追々噂いたし居候頼談筋余之儀ニ無之緒當時勢を熟考致候處逆茂以前ニ復しかたく約ル處列國割據之勢ニ相成候之必然ニ相見候處兩藩之如キ小藩ニ而ハ往々之處如何相成可申哉君臣共日夜掛念仕候よし然處御國之儀之正義第一之御國柄ニ而加之天下之御雄藩ニ有之何事茂是迄御國之御處置を奉慕諸事見合ニ仕候内ニ而御隣境之儀ニ有之向後之處改而深御結託申上置度事整候ハ、上-down共安心之至無此上幸ニ付偏ニ私に依頼いたし候間何卒盡力いたし吳候様左候而私歸路兩人共同道仕候間兩藩に立寄吳候ハ、兩君上ニ茂御逢可有御座候付篤斗直ニ御熱談申上吳候様との事ニ付私儀ハ元來塚原様御用聞として被差越傍探索を兼候様被 仰付置候ニ付各様重大之事件ニ關係いたし候任ニ無之達而相斷候段及返答候處紋次郎列より折角私を見込不容易機密を打明候處取合不申而ハ甚當惑之段差迫り無余儀様子ニ相見申候間然之一ト先歸國之上御重役方へ其次第粗御内意奉伺其上ニて猶私より一左右仕可申候間夫迄之處相待吳候様素より右様之大事獨斷ニ而去就相究候儀之如何様相談有之候共難相成其上兩君上拜謁杯之存茂不寄事ニ而先兩人にも御國々之儀猶此上ニも取堅置候様申述候處兩藩之儀之兼而其邊之處御内命茂有之候歟ニ而勿論末々まで異議無之候由ニ候へ共猶取堅ノ私一左右次第世上ニ不目立様御内使者を以御頼談ニ可相成申述候右段々之次第ニ而其儘ニも難捨置不得止御内意奉伺候間至急ニ御様子被仰聞可被下候事

正月十日關老小笠原長行本藩京都留守居淺井新九郎井口呈助を引見し防長處分に關しては決局割地十八萬石若くは十萬石の兩議を以て朝廷に伺ふことに決せる旨を語る

慶應二年

四三九

〔京都大探 索 書〕

慶應元年八月
永井主水正様始藝州より御歸坂後於華城御廟議被決一會桑侯に御相談として永井様舊冬御登京ニ相成於京地一統今一應御詰問有之長征之御結局ニ至候様御評決ニ而舊冬廿五日永井様御下坂猶又同廿九日御登京華城之御廟議之矢張相替不申趣を以正月早々御打寄ニ而御衆議有之候得共被決兼候ニ付同四日戸川鉦三郎様御下坂坂倉侯小笠原侯御登京ニ相成可申趣橋公被仰越同七日兩閣老御登京八日九日十日於橋府御衆議有之候

一昨夜小笠原侯内分御呼出ニ付兩人罷出於橋府御衆議之儀趣委細被仰聞橋公之發端より今一應御詰問可有之御趣意ニ而舊冬御詰問條理相立不申且突戸備後介之山形小助申ものニ而重役僞前後成形不都合而已ふらそ御請之次第名實相違顯然いたし是非今一應詰問可致此節閣老方ても國境迄御出大膳父子御呼出直御詰問有之若病氣故障等申立候ハ直様踏入口に罷越大膳父子病床迄も御出ニ而御詰問候而是非其罪を糺可申萬一右之間ニ而彼を暴發いたし候ハ罪狀顯然名義相立候付大旗被進御征伐可有之様御固執ニ被爲在候由閣老方大小監方ハ大膳父子助命隠居被仰付領地之縦削地激徒之主魁迄夫々被仰付候ハ激徒之口實無之大膳父子正義之もの奉感佩正激分難いたし可申萬一右之通寛典被仰付候而も背命いたし候節屹と被仰付候との御趣意ニ而父子之隠居被仰付領地之現十萬石被召上激徒主魁十人計も公邊に差出候様被仰渡候ハ長人大概安堵いたし跡ニ懸念無之御緩典ニ被仰付候様との御趣意ニ有之候九日御衆議之節漸御處置御評決ニ相成候得共橋公御重典之思召ニ而領地都而被召上追而社稷を被存迄ニ十五萬石現地可被下置會津侯之領地半高被減候様閣老方之現十萬石被召上候様削地三等之御議論ニ分レ九日迄ニ之被決兼十日之朝會津手代木直右衛門外島機兵衛上田傳次桑名森彌一左衛門三宅彌三右衛門小笠原侯に參上いたし昨日橋府御退出後橋公會侯に御内談有之此節緩典被仰付候ハ又激徒再起後憂不可測是迄之見込之處引下候儀之趣も相成不申併歩合候而會侯之御見込通ニ十八萬石現地被下候様其趣を以會桑公用人より閣老方に説得いたし候様との儀ニ付小笠原侯に頻ニ申上

候由右ニ付十八萬石削地と十萬石削地兩議を以朝廷に御伺ニ相成可申段被決即夕橋府に御出又々御衆議ニ而右兩議御伺ニ被成御評決候由小笠原侯御直話相伺候事

正月十一日

淺井新九郎
井口呈助

正月十二日在京本藩重臣三宅藤右衛門長州處置に關し我藩の所見と幕府の議論と一致せざる旨を藩政府に報告す

〔尊攘録自筆狀〕

長防御處置振等之事

以別紙申達候長州御處置之輕重一定ニ至兼父子隱居拾八萬石又之十萬石之削地と申兩議を以御伺之御決議ニ相成候次第ハ委細御留守居書取之通ニ御座候然處此節寛大之御處置可被仰付儀之畢竟事を不破様と之御趣意と相見候處削地之一條之此許見込ニ合兼甚以奉掛念候石ニ付而之朝廷之方周旋之儀小笠原閣老御頼とふし被託候趣も有之誠ニ天下之大事件容易と喙を容候筋ニ之有之間敷候得共治亂興廢之所係都合次第ニ之默止居候場合ニも有之間敷今夕御役々打寄得斗申談候筈ニ御座候此許ニ而之初發より君を代置社稷を全く可被存置哉之見込ニ候へ共何方も手強キ義論主張之折柄甚以心痛之次第ニ御座候右一條變化ニ應し急使を以得貴意可申先右之段まで申達置候以上(御留守居書取は九日の條に出づ)

正月十二日

三宅藤右衛門

(家老 中老 宛)

正月十三日伊達宗城書を長岡護美に贈り時事に關する各地の狀況及び自己の所見をのぶ
〔子爵長岡家文書〕

(折返シ上ハ書)

密 陳

別緒密陳舊冬十月初旬京阪困難絶言語候實ニ大事去ル之時と奉存候處森吏難退一會桑粉骨盡力ニ而挽回恭賀無礙此事ニ奉存候爾後御維持之神策如何と奉注目候

○一橋公ハ一變毎ニ一黨功有之故幕疑如何ト痛心中上候

○仲冬薩吉并幸輔突然來京邸申合候趣ニて僕上京相促候得共救時之大策更ニ無着眼陳述之主意凡而同意ニも無之暴動ニ類し候故程能申聞歸し候尤大芋ハ持重と察候故學動次第處置も可致賢兄へも可及御相談候處夫切ニ相成候間別段不申陳候キ

○條約夫々

勅許ニ相成可賀之至雀躍仕候右ニ付條約面心付申立候様ニと御座候得共不案内故何事も不申上候其内饒近

皇國ハ封建之委ニ付海外郡建諸國之例と違可申奉存候旨申上候何分皇國及して隆盛獨立とし諸夷壓倒之一新大策速ニ御施爲奉渴望候

○筑前も藩士混亂之由爲何譯候や

○貴國彌開國強兵之御策物産御開キと奉察候

復職閣老之處置未々端倪も無之様存候如何

○長一條舊臘出藝家來歸候得共不得要領大監も歸阪のよし亦因循ニ不相成神斷奉祈候恐々頓首

正月十三日

正月十四日日本藩政府は書を在京三宅藤右衛門に贈りて征長出兵に關する其意見に答へ且つ國事周旋の方針を示して京攝間に於ける時局に對する處置を委任す

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ

別紙を以申達候舊臘追々ニ其御地被差立候早打等去ル四日五日六日七日八日日々清鶴崎出張之御人數並藝州ニ而御札問之始末右付而御處置筋等之儀委細被仰趣致承知御請左ニ一ツ書を以申述候

一舊臘十日限御人數之被差出間敷外々御同様御差圖次第出張之方ニ被仰付度旨上田久兵衛より御内意申出候節閣老方より種々御察討有之何様御便利之筋を以主張いたし候哉之御喚取ニ相違無之左候而ハ往々之御都合ニも差障候間態々淺井新九郎上村彦次郎を大坂に被差下土臺之御趣意具ニ申達候處無殘所御氷解ニ相成御内輪之事を茂御打明御頼談被爲在候由御互ニ大ニ致安心候然上之勿論兎哉角可被仰立様も無之既ニ舊臘押詰御物頭三人御筒數五拾挺被差出候儀之最前申達候通ニ而右之員數も大略御元御見込ニ致符合候處出張之名目御注文通ニ無之其儀之軍御目付様ニ申述候口上書取之通ニ而柳川侯より御懸合之節も同様御返答ニ相成候間今更致方無御座殊ニ新九郎列閣老拜謁之砌も現實征長人數之處ニ而取合せ有之たる儀と被考候得之枝葉而已言葉を飾候而も自然と事實相響候ハ必定ニ而夫丈ケ不本意少々御人數被差出候と申儀茂又相響可申旁右之一條ハ其儘差置候事御座候

一藝州ニ而御札問之一條寸斗服罪之場ニ落合兼永并様御始御歸坂且御出京ニも相成追々御評議之末積り閣老小笠原侯御出張模様次第ニハ山口迄も御出是非とも大膳父子に御應接幕威相立候丈ハ御盡力可被爲在御様子之由先ハ御順序之御運ニ候得共是又思召通ニハ參り兼迎も鼠色ニ而相濟頓而大樹公御東歸之埒ニも至可申哉實ニ杞憂ニ堪不申御心配之程深察入候如是不容易折柄猶更御國議之御確定を御承知無之候而ハ御不安意之由夷則に内狀を以被申越候趣も致承知御尤ニ存候右御國議之御案内之通公武之御間御周旋何方迄も皇國のため御忠節を被盡候迄ニ而其儀ハ始末相貫他日青史之上ニ而も大史公之非議を受不申様之心懸ハ申迄も無之候得共 朝廷將軍家之御都合且前後左右列藩之形勢次第道理ハ道理ニ而も此筋を強而申立候得之後道御國家之禍とも可相成見込之事柄之成丈ケ差扣又道理ニも相協禍ニも不相成

事件ハ御國議之筋を以盡力いたし御名分も不落御國家茂致維持候儀專要ニ可有之乍然御儀之一事一物之上ニ臨候而之心得ニ而豫一定難致候間此節改而尊慮奉親候處京攝間之事ハ諸事被遊御委任候間兎角御爲宜様可有御取計旨被仰出候御奉行御留守居にも得斗御咄合候様存候

一今度小笠原侯御出張ニ相成候而も召思通參兼鼠色ニ而御東歸も被爲在候ハ、向後列藩身勝手之御振舞有之候而も御譴責ハ難相成或御參勤無之御方茂可有之或ハ御貢獻を被受候御向茂可有之何事茂我儘次第ニ而差寄中國西國筋ハ徳川家之度外ニ相成銘々強大を營可申さまハ迎斷然たる御處置も不被爲出來實ニ長大息不之至御座候然處舊冬以來之公邊ニ而追々非常之御難陟有之上下とも段々人材を被得候御様子ニ付追而ハ御運も直り可申哉丁度之際前文之通御紀綱廢壞之主臺を被開候ハ重疊殘念至極ニ御座候間長防之一條ハ乍恐癸丑以來專關東之御失政より釀成候件々多強長防之罪狀迄ニ無之と只管御自責之御趣意を以御一段別途ニ御切分寛宥之御取扱ニ相成左候而向後ハ彌以御慮御遵奉賞ハ賞罰ハ罰公平正大之御政道ニ御差入可被爲在旨朝廷に被仰立前後兩般之御所置ニ相成申候ハ、責而御抑揚之一助ニも可相成候得共中々外藩杯より盡力之可屈勢とも不被考たとへ一旦其儀御無用ニ相成候而も外國之混雜を初往々御慮御遵奉公平正大之御政道何程ニ可有御座哉何様如是相成條候上ハ天下自然と割據ニ成行勢と而已被察候事御座候以上

正月十四日

帶刀殿なし
惣 連 名

三宅 藤右衛門 殿

正月十五日關老板倉勝靜小笠原長行下坂す

〔京都自筆狀控〕

此書取御國にハ二月二日之早打御飛脚に御目せを以仕出濟

一長州一條ニ付京攝御役々方御議論兩途に分難被決候付一先之兩議を以 朝廷に御伺之様子ニ候處去ル十五日板倉侯小

笠原侯俄ニ御下坂ニ相成將軍様に御伺之由ニ候右御下坂前兩關老御出立懸ニ一橋公に御出御對面御願被成候得共是迄申候通ニ而幾度御對面ニ相成候而も無詮事ニ付御逢無之外御用向之御取次まで被仰置候様との趣を以御對面御斷ニ相

成候(下略)

正月廿九日

淺井新九郎
井口呈助

正月十八日細川若狹守佃島砲臺を請取る

〔風聞書〕

正月十八日

持出 和泉守

宅に細川若狹守より差出候届書

佃島砲臺今日御臺場掛り役々より請取申候此段御届申上候以上

細川若狹守

正月十九日關老板倉勝靜小笠原長行等上京す

〔尊攘録探索書〕

(慶應二年二月三日附首藤敬助正月十九日より下坂中之間取書の一節)

一小笠原壹岐守様板倉伊賀守様永井主水正様今十九日七ツ頃御着京伏見街道ニ而小笠原侯内大野又七郎ニ途中ニ而行合茶店ニ而暫ク嘶し關老御上京之振り尋ね申候處此節ハ彌以大坂丈々ハ御評決ニ相成京師ニ而一橋公會桑當り御異論さへ無之ハ直ニ御奏聞ニ相成候筈尤頃日來一橋公御論殊之外強ク被爲在候處近日ハ大分御解ケ合ヒ之御模様ニ而既ニ右

慶應二年

四四五

之儀ハ桑名侯より大坂に被仰進候ニ付大ニ安心仕何レ都合宜敷被爲運候と相考へ居申候と噂仕候

正月廿二日關老板倉勝靜小笠原長行參内して防長處置に關する幕府の決議を奏上す朝議之を容る

〔從京都來候探索書等、慶應二丙寅年尊攘錄自筆狀〕

正月廿二日(板倉、小笠原)參内決議言上之覺

毛利大膳父子家政向不行届家來共一昨年七月父子黒印之軍令狀所持京都に亂入奉對 禁闕及炮發候段不恐 天朝所業不届至極ニ付大膳父子可處嚴科處益田右衛門介福原越後國司信濃等先條之主意取失非禮非義之及暴亂候付三人斬首之上備實檢並參謀之者共夫々加誅戮任用夫人候段深恐入悔悟伏罪相謹罷在候趣自判之書を以申立猶其後變敷件々相聞候付永井主水正戸川鉦三郎松野孫八郎差遣相糺候處彌恭順謹懼罷在候趣ニ付於大膳父子朝敵之罪名者相除候乍去畢竟不明統御之道を失家來之者犯朝敵之名候段其科不輕雖然祖先以來之忠勤を思ひ格別寛大之主意を以高之内十万石取上大膳登居隱居長門者永登居家督之儀者可然者相撰可申付候右衛門介越後信濃家名之儀者永世可爲斷絶此段遂 奏聞候

正月

〔慶應二寅年 風聞書〕

防長御所置之儀

- 一大膳父子剃髮寺入
- 一封土拾万石被削
- 一他國より入込居候浮浪之輩不殘本國に引渡
- 一昨正月再發之激徒悉く斬戮

一毛利家血食之儀之末藩之内より可然舉人材

去ル廿二日伊賀守殿登岐守殿參内之砌御渡相成候 勅書

長防所置之儀之祖先より勤功も有之候ニ付寛典被行候思食之處決議言上被聞召候猶國內平穩可被安震襟被 奉イ 仰出候事

〔諸雜御留守居録上〕

(始め朝廷内示せらるゝ所の答旨其一)

格別御出入御坊主徳力孝益より差遣候書付寫

再度從天朝御沙汰寫

長防所置之儀決議被聞食候方今之外患内憂紛亂ニ而之於國體深被爲腦 宸襟候間厚加仁惠早至當之施所置國內平穩奉

安 宸襟候様被 仰出候事

正月(日附に形勢 雜記に據る)

〔防長回天史〕

(其二)

防長處置決議言上被聞食候祖先より勤功も有之候に付寛典を被行候思食候間其邊相心得猶國內平穩奉安宸襟候様被仰出候事

慶喜等其趣旨を奉じ難しと爲し固く執て動かす朝議已むことを得すと爲し遂に其文を更めしふりと云ふ

正月廿三日朝廷更に防長處置につき幕府に指示せらる

〔諸雜御留守居録上〕

(正月廿三日)

慶應二年

別段從天朝御沙汰寫

長防所置之儀昨日被聞食候得共自然疎暴之所置有之候而之内憂外患之治亂ニ拘り候儀ニ付旁被觸 宸襟候間人心紛亂不致様分明至當之所置可致別段被 仰出候事

(中略)

尙四侯(會桑板笠)に傳奏より演舌被仰渡左之通

拾万石愈於取上之精々下田を撰不拘紛亂候様厚可有勘辨決而疎暴之所置無之様旁申入置候事

正月廿三日閣老板倉勝靜小笠原長行大坂に下る

慶應二丙寅年
〔尊攘錄探案書〕

(慶應二年二月三日附首藤敬助正月十九日より下坂中之間取書の一節)

一大坂ニ而ハ京地之御模様如何被決候哉と一統奉案勞候而諸藩何之物議も不吐御模様奉待候處同廿三日兩閣老御下坂ニ相成伊賀守様ハ書之内早打御乗り切ニ而御歸坂壹岐守様ニハ夜八ツ頃御歸着ニ相成申候翌廿四日壹岐守様内前場小五郎ニ逢ヒ御模様相尋ネ申候處京地ニ而之御都合不怪宜敷被爲在一會桑御異議もふく閣老御説ニ落合廿二日御參内御奏聞被爲濟御所よりも寛大之處置ニ可被行との御書も御渡しニ相成候而御下坂ニ相成り申候何レ此上ハ速ニ御處置筋被仰出ニ而可有御座尤右ニ付而ハ閣老之内御出處ニ相成敷又ハ參政之内ニ而も御出ニ相成敷未タ篤斗御評決ニ至り兼ネ候と噂仕候

正月廿三日土藩坂本龍馬等伏見寺田屋に於て幕吏に襲はれ數名を傷けて逃走す

慶應二丙寅年
〔尊攘錄探案書〕

(慶應二年二月三日附首藤敬助正月十九日より下坂中之間取書の一節)

一伏見ニ而浮浪之者兩人寺田屋と申旅宿ニ居申候ニ付段々同心共打寄捕ヘニかゝり申候處同心六人ニ疵ヲ附立去り申候是ハ昨年當り御國ニも參ル山薩州ニも參り候土州脱走人坂本龍馬新宮何某之由遁去申候時ハ薩州之屋敷に匿シ申候由之見込ニ御座候

正月廿四日日本藩江戸留守居澤村脩藏は英國公使館建設、白國との假條約交換延期、横濱陸軍訓練場設置等に關する件を在府當局に報告す

慶應元年八月以後
〔江都探案書〕

今朝御用御領外國組頭宮田文吉様に里内官右衛門罷出外國御模様相伺候處差而相變儀無御座由候得共去ル十一日英國ミンストル出府御應接之泉岳寺前接遇所舊冬荒方御出來之處猶種々注文申聞候ニ付右注文通ニ御取繕ニ相成候管よて高輪町家茂如來寺寄之方ニ而間口貳拾間程之取拂ニ相成右之方ニ茂建物出來候由其上横濱山手之方ニ同國假ミンストル館出來之由ニ御座候

一ベルシーイ國假條約彌爲御取替ニ相成候趣ニ而過日外國御奉行横濱に御出張之處同國方申聞候ニ之未タ各國條約之趣茂曉ヒ承知不致候付各國條約而一覽之上書而爲取替可申旨申聞候由ニ御座候

一佛國より陸軍傳授之者追々渡來之管ニ付横濱南之方ニ而拾万坪餘之訓練場出來之由尤實丸ニ而之訓練ニ付廿四五万坪も無之候而之不相成趣ニ申聞候由ニ御座候得共先拾万坪餘ニ御出來可相成管之由御内話ニ相成候由右之通御座候以上

正月廿四日

澤村脩藏

正月廿六日閣老小笠原長行防長處分申渡の爲め廣島出張を命せらる

慶應二年

四四九

〔長防二度目御征伐一件〕

正月廿六日

藝州表に爲御用早々罷越可申候

御進發御供

小笠原 登岐守
松平 伯耆守

右被仰付旨於奥相濟

正月廿八日尾藩成瀬隼人正兵を率ゐて大坂に到る

〔江都探索書〕

慶應元年八月以後

御進發御後備之儀今度尾張前大納言殿に被仰出此上之御模様次第大坂表御進發も被爲在候ハ、早々登坂引續被致出張候様尤彼地御進發迄之私儀人數引纏早々上坂可仕旨被仰出候付右附屬之人數並手勢引續今日名古屋發足仕候此段御届申上候以上

正月廿三日

成瀬 隼人 正

私儀兼而御届申上候通去廿三日名古屋發足仕伊勢路六日振旅行今日大坂表到着仕候此段御届申上候以上

正月廿八日

成瀬 隼人 正

正月廿八日佛國公使大坂に到る

〔大坂廣島返達御用狀扣〕

慶應二年正月

正月廿九日河喜多上二月十日着

追啓御出入之者に問合置候返事唯今相達左之通

昨日着坂之外國人之佛蘭西ミニストル上下十人御城代様御中屋敷ニ止宿安治川口迄之蒸氣船ニ而渡來之趣

但出坂之旨趣不相分候得共先日方出坂之手當ニ相成居候分ハ相違不意ニ渡來ト申咄も有之候得共不取留説

右迄申來候尙委敷儀茂相分候ハ、追々可申達ト存候以上

正月廿九日日本藩京都留守居淺井新九郎井口呈助は防長處置に關する幕議の内容及び奏聞後の朝廷の狀況等を在京當局に報告す

〔從京都來候探索書、尊攘錄皇武令、京都自筆狀控〕

元治二年正月

一長州一條ニ付京攝御役々方御議論兩途ニ分れ難被決候付一先ハ兩議を以 朝廷へ御伺之様子ニ候處去十五日板倉侯小笠原侯俄ニ御下阪ニ相成將軍様ニ御伺之由ニ候右御下阪前兩閣老御立懸一橋公へ御出御對面御願被成候得共是迄申通

ニ而幾度御對面ニ相成候而も無詮事ニ付御逢無之外御用向之御取次迄被仰置候様との趣を以御對面御斷ニ相成候同十

六日會津様桑名様一橋様ニ御出ニ相成昨日兩閣老御對面御願候得共御逢無之由御懇切ニ御尋ニ相成閣老ハ天下之執權

ニ而右様御逢無之候而ハ難相成段被仰上候處橋公御後悔ニ相成以來右様之儀仕間敷板倉様ハ桑名様近き御間ニ而御紙

面ニ而も可然様被仰上候様橋公御願ニ付直ニ御紙面御仕出ニ而兩閣老御喜悅之段御返書到來候由

一同十六日會桑侯橋公に被仰上候ニハ此節京攝之議論兩議ニ分れ候得共逆も事を執候ハ閣老始御役々ニ而此節ハ先御任

ニ相成以後結局ニ至り候様有之度被仰上候處橋公も外ニ閣老を撰候へ共兩閣老ニ過候人無之兩閣老へ任せ處置致させ

候外無之との趣大略御解ニ相成且會桑侯方ハ大概兩閣老ニ御同意ニ而有之候由

一十九日兩閣老又々御登京ニ相成此節ハ將軍様ニ御伺取ニ而長州御所置簡様 御所御伺ハ簡様と御書付御請書迄出來同

日幕前御着ニ而直ニ橋公ニ會桑侯閣老御衆議有之閣老方今晚中是非御評決ニ而廿日ニ之 御所御伺之筈ニ候此節之橋

公始會桑侯速ニ御落合ニ相成閣老最初より之御見込通ニ即夜被決廿廿一日 御所御支ニ而廿二日官武御參 内ニ相

成候

一此節長州御所置之儀付而ハ官武共國事懸り之御方迄被開置極々機密ニ被成候様左様無之候而之若長州に暴露致し御都合ニ相成不申候付幾重ニも他に漏出不仕候様聞老より 朝廷に被仰上終而御書取を以言上ニ相成六條様より御口上ニ而奉伺候趣左之通

一長州一條ニ付舊冬致詰問候處以前通謹罷在候昨年尾州前大納言に謝罪いたし候趣を以朝敵之名を除き緩典被仰付領地之内十萬石被召上候様決議仕候此段御委任ニ付言上仕候

長州に被仰渡候御書付聞老より御持參ニ而 朝廷に御内覽ニ御差出之由御趣意大略左之通

一昨年尾州前大納言ニ謝罪いたし候趣を以朝敵之名を除き緩典被仰付大膳儀軍令條之黒印を與候付隠居蟄居被仰付長門儀中軍之帥として中途迄罷登歸國後何之所置も無之候付隠居永蟄居被仰付領地之内十萬石被召上相應之者相撰相續被仰付候趣之由

一長州處置寛典ニ有之候得共彌以結局ニ至候見込如何之段傳奏より御尋ニ付武家方より御見込有之候段御請有之候由
一長州之處置終候共將軍様永夕御滯阪被爲在天下之人心安堵いたし候様傳奏より被仰渡候付還御等ハ決而無之様御請有之候事

右之趣六條様より伺取候

一長防處置之儀祖先より勳功も有之候付緩典を被行思召候處今度決議之趣言上 被聞召上候猶國內平穩奉安 宸襟候様

被 仰出候事

右者 御所より御書付を以武家に御渡有之候御書付寫

一長州御處置被仰立之内十萬石削地ハ下關上關大島等海邊要地を直ニ御取揚之由右等之御處置ニ而ハ的面ニ事を生し可申左候へ之國內平穩之 叡慮ニ應兼其儘御處置御取懸ニ而之殘念之儀併御國へ之御先鋒も被蒙仰居候末必多す無事を希候様聞へ候而ハ難相濟候付廿七日宮様は罷出内分御旨趣奉伺候處堂上方之内ニも段々御説違橋府初設同様之見込

も有之近衛家杯ハ隣より之尻押ニ而聞老方よりも猶緩典之御説ニ而漸猶國內平穩之數字を以宮様關白様御取切大概武家方御決議之處ニ押寄ニ相成居候事ニ而十萬石削地より引下候得之忽近衛家薩人勢を得時ニ乘し又々長人も京地に引入候勢ニ相成宮様關白様方御身上茂如何成行可申哉之崩有之先當ら毛障ら毛之御答ニ相成居候由然處右等之御配慮ニて御決議之趣ニ相立候處無事に十萬石削取之御見込有之候哉之段奉伺候へハ其所只今ニ相成大ニ御懸念之趣ニ而萬一御處置不出來ニとも相成候得之是又御二方身上之大事と相成候故御雙方共ニ退職之御打立若三藩より強而留候へハ關白様ニ之諸侯御呼出之御注文宮様ニ之橋公自ら御下阪ニ而御所置被付候様左候ハ御安心ニ而御留りと申御舎之山御内話有之候廿八日會藩に罷越承候得之既ニ一昨廿六日殿下に三藩公用人を被召諸大夫を以御退職被思召立候付主人々々々達候様被仰聞いつきも當御時節御退職之儀存も不寄事ニ候へ共罷歸銘々より申達候付昨廿八日三藩一同御參殿御留ニ相成候處畢竟此節御所置付而ハ京師御手薄ニ被思食候よ之儀ニ而土州宇和島老侯又之御國御連枝様方ニ而も御呼登ニ相成候ハ御留ニ相成可申との御事會桑侯杯實ハ御不同意ながら勘考いふし猶御答ハ可申上との趣ニ而御退出ニ相成候由宮様ハ今廿九日當り今一應殿下に御打合せ之上橋公御下阪之儀被仰出不行候得ハ是又御退職之御積之山諸侯召ハ何方も不服ニ而行れ申間敷橋府御下阪ハ御處置之堅リニ付會藩などハ行可申見込ニ御座候

正月廿九日

淺井新九郎
井口呈助

正月晦日賀陽宮二條關白を訪ひ一橋慶喜を將軍たらしめんとするの件及び薩長の隱謀にて京師擾亂の虞あるを以て兩肥土佐の三藩主召登の件等につきて反對の意見をのべ尋て我藩留守居を

召して此間の幹旋を依頼せらる

〔從京都來候探索書等〕

今二月朔日關白殿下より淺井新九郎に參殿仕候様申來候處折節新九郎儀病氣ニ而打臥參殿仕兼候段御斷申上候處其内尹宮様より茂新九郎儀殿下に罷出候ハ、其已前宮様に參殿可仕旨申來候付彦次郎儀參殿仕候處其砌會藩小野權之允參殿仕居同人一同御前に被召出御模様奉伺候趣左之通

昨日彦次郎宮様に參殿御内話之次第極密伺取之趣ハ委細昨夕言上仕置候通ニ而昨日宮様二條殿に被爲在御成直ト御對話之處殿下之思召ニ而ハ橋公を將軍職可被仰付就而之列藩を茂被召登御評議可有之左茂無之候而ハ當時幕府之形勢ニ而之天下之事無覺束被思召御辭職ニ茂相成可申敷之思召立以之外不可然左候而ハ却而天下之動亂之基を開候筋ニも至可申御不同意之件々御懇切ニ被仰上候處殿下にも至極尤ニ被聞召右之思召ハ先被思召留宮様に茂御安心之山然處橋府之御内々殿下に種々申入候趣ニ御聞込ニ相成候御模様ニ而此節長防御所置付而ハ京地之變動難計との御懸念一方其次第八薩長相通居今度之御處置筋承服不仕節之是非大施被進候時ニ茂可相成其節ハ山陽山陰之要地に大軍を支候内上國之慮を窺奇兵を出し京地におゐて事を發する時之公卿之内ニも被相應候方々茂有之事ニ候得之必大事を成得んとの陰謀其萌相顯居候次第等々申上込候趣深く御憂念之餘り御恐怖之御模様ニ而右付而ハ乾度京地之御手當筋相立居不申候而之難相濟事ニ付此節御國より兩公子之内御登人様並肥前土州兩老候を被召登橋桑會に心力を合せ薩長之陰謀を致壓服候様有之度との思召ニ付宮様よりハ其儀之却而彼是之差障出來致し得少く御都合不_レ宜段種々御論談被爲在候付一通りハ尤ニ茂被思召候得共とかく追々之御聞込筋御胸中ニ折込居候所より御懸念不被爲解御模様ニ而御國當り之見込等も被聞召上度との御主意ニ而今日殿下より新九郎被召出候筈ニ御咄合被爲在候間新九郎二條殿に罷出候已前右咄合之趣等得と御含置被成度思召ニ而宮様よりハ被爲召候山然處列藩御召登之儀最初之處ニ而ハ橋公を將軍

職ニ可被仰付敷之御内議も被爲在度殿下ニ之深き思召を茂被爲在候哉之處橋公ニハ勿論殿下之御内情之聊不被知食御同意之御模様ニ茂被爲在候得共會桑ニハ殿下御内情を茂推察ニて御憂苦之所右宮様御説得ニ而先被思召留根切ニ相成此節兩公子之内並肥土兩老候御召登之儀ハ全右之長防御處置御取懸ニ付京地之變動御懸念之所より起り候御主意ニて事柄ハ同く候得とも情實ハ異り候乍然會桑よりも宮様同様之見込ニ而種々之指障茂可有之殿下之思召ニハ御不同意ニて其次第を今朝日橋公に得と申上候而橋公御同意候得之明日二日橋會桑御三方御揃ニ而二條殿に御出直と被仰上候筈ニ相成居申候山橋公ニも近日ニ至り而之御手元要職人より追々殿下御内へ親々被是御不本意之事共申入候儀有之候處より殿下ニ茂御聞之次第も有之就而之最初列藩御召登御内情等橋公ニ茂初而粗御心被爲附御手元被届兼候儀ト御當惑之御模様ニ茂候得之今日會桑等之存念委細申上候ハ、大方ハ御同意可有之との見込之由權之尤咄承申候左候得之橋會桑等御同服ニて明日殿下へ御出御懇談被爲在候上之殿下も御安心之場ニ茂至可申と宮様ニも被思召候得之尙此上外藩カ之見込も橋會桑同論ニ出候ハ、彌以殿下之御安心茂附可申候付新九郎快復次第罷出右之趣等御舍居候而申上吳候様有之度との御沙汰ニ候左御座候へハ昨晦日迄奉伺居候次第ハ今日ニ相成候而之御内輪之御模様大分打替一躰之景氣相甘候様奉伺候事

二月朔日

上 村 彦 次 郎

二月朔日本藩探索森井惣四郎横濱見聞録を在府當局に提出す

〔尊攘錄探索書〕

慶應二丙寅年 正月廿六日より横濱表に罷越聞取之趣左之通ニ御座候(抄略)

一英國陸軍之法舊冬 公邊より直傳之儀御頼入ニ相成候得共英より御請不申候處及再應漸英人承知致候由然處佛人カシユン 公邊御役人に取入彼是説得いたし候尤栗本潮兵衛之カシユンと無二の中ニ而兩人ニて相巧ミ英の陸軍制之本國

に直傳として遣し候ニ付先横濱ニ而之佛の陸軍傳習致度と申事ニ相成英人にて御斷にて英も一旦之大に憤り栗本カシ
ユンが計策ニ出タル事も相察日本佛國に議論を發可申筈之處猶近日之處ニ而之佛よりの傳習を拒み候形ニ相聞候ニ付
差扣居候由佛の陸軍傳習練所として堅廿五丁横十丁之地面御借渡ニ相成筈ニ而既ニ舊冬より兩三度御見繕も有之候
得共英人の思もくも有之且右様之地面も容易ニ無之旁以未タ場所と相極り不申候由ニ御座候

一佛のカシユン常時關東難陟之事ニも預り候勢有之其故カシユンに取入程よくいたし候得之カシユン直ニ關老に罷出
何某何某之實ニ非常之人才海内ニも稀なる人物御用ひ被成候ハ、屹度 公邊之御爲ニ相成可申杯と申込候得之關老も
實と心得ニ相成其人必拔擢有之候故奉職心之人々益カシユンに取入甚敷ニ至り而之大判小判之賄賂を行人も有之候由
ニ御座候

一蝦夷地に參居候英國之醫師蝦人之墓七ヶ所發キ骸骨奪取去候ニ付御懸合ニ相成候得共明白不致之處魯人中ニ立入漸く
相分候由右ニ付英ミニストルの場合ニ而蝦夷に參居候者國に歸され候筈ニ御座候由横濱に參居候英人此節之儀之何とも
辭無之由承申候

一當正月横濱遊女町ニ而佛之士官之者亂妄を働候ニ付大勢にて打殺死骸粉ニなる様打殺皆々逃ケ去角力者豈人外ニ町人
貳人解死人ニ出候由ニ御座候

英國アレキサントル直話之件々左之通ニ御座候

一アレキ間 兵庫開港之儀之薩長共ニ望欲し居候處當時何方にて故障有之候哉 公邊より兵庫開港容不申段 京師に被仰
上候由承候處實事ニ而有之候哉 答 公邊より被仰上候儀ニ而之無御座 京師より開申間數被仰出候ニ付 公邊ニ而之
朝命を奉して御聞無之由答申候猶彼問候ニ之 京師ニ而之和親貿易御許容ニ相成候末如何譯ニ而兵庫御容シ無之哉 答
貿易之何方にていたし候而も支無之事ニ候得共和親之儀之何時破レ候も難計石非常之節帝都近く開港いたし居候得之
兵燹京師に差迫り候ニ付許容いたし不申段答候得之定まし左様之儀ニ而可有之とアレキ返答仕候

一アレキの話ニ柴田日向守様佛蘭西に御出の節親之シーボルト當年七十二歳ニ相成候得共深く日本の事御氣遣申上態と
和蘭陀より佛迄罷越柴田様に種々言上いたし候處一度之御逢有之候得共二度目ニ之御逢無之老人の身として不厭遠海
實ニ日本之御爲筋と存込罷越候得共一度之後之御逢無之事老父も甚々不平之趣書狀ニ申越候由話仕申候
一アレキの話ニ老父も兵庫開港之日本之御不爲と兼而申遣し候處當年之猶日本に渡海之積りにて最早今頃之出帆之頃歟
と相察居候と話仕申候
一日本中ニ而薩州ニ一番開ケ居候國にて白砂斷制法傳習として英國より兩人琉球に雇入當時傳習いたし居申候とアレキ
話仕申候

横濱港生糸輸高

- 亥ノ年分 一壹万六千六百貳拾七担貳拾斤七分九厘
- 子ノ年分 一壹万六千六百拾壹担三拾斤五分壹厘
- 丑ノ年分 一壹万六千六百三拾六担四十五斤七分
- 一昨丑年英國年貢之惣高五千六百万石ニ而有之候由承申候
- 右之通ニ御座候以上

二月朔日

森 井 惣 四 郎

二月朔日本藩江戸留守居澤村脩藏尾張玄同の江戸城留守を命せられたる内情を探知して之を上
司に報告す

〔慶應元年八月以後 江戸都探索書〕

尾州玄同様御東下之一條段々承繕候處當初之關東御手薄ニ付御留守御心得被成候様との儀ニ御座候得共往々之處之清

水殿に御入被成候様被仰付候由其子細之前大納言様と玄同様と御熱和ニ無之より御家中も二派ニ相分餘程根深相成容易ニ御手茂付兼等閑ニ押移候ハ如何成る紛亂を生し候も難計勢ニ相究申候間何となく右之通被仰付答ニ内議右之候由旗本衆より極密承り申候玄同様之阿部松前杯と以前より御懇意之由御家中ニ而之竹腰籠若殿御同論ニ而一派相立居候由竹本隼人正様ハ前大納言様方ニ而右之候由右之御見議故水府之奸黨と相唱候徒ニハ呼吸相通居候趣尾州藩水野彦三郎より極密承申候

二月朔日

澤村脩藏

二月朔日我藩探索森井惣四郎益田勇水戸藩事情聞取書を在府當局に提出す

〔慶應二丙寅年
尊攘録探索書〕

水戸表事情聞取

一昨十月於水戸表斷頭いたし候節近藤儀太夫と申者嚴敷議論いたし即日引入候山右近藤ハ元來奸家之由ニハ候得とも市川三左衛門鈴木石見守等餘り苛酷之取扱いたし候故何分見兼候處ハ異論差起り候由付而之奸諸生之中近藤之説ニ同意之者多分有之當時市川等ハ一味之者之上下舉而百二三十人外無之由尤兼而奸家之勢之公邊ハ嚴重之御取締ニ而も被仰付候節之浪田揚り屋杯ハ罷在候者之始末いたし籠城をも可仕氣込ニ御座候由之處追々一味之者も減少いたし當時之左程之氣焰之無之哉ニ相聞候由
一當時水戸國中ニ而嚴敷金を募り候山右之如何之趣意歎相分不申候得とも自然之節籠城之覺悟ニ而之無之哉と見込候由一昨十二月中於水戸表五十人計り斷頭仕候との事ニ而姓名之書付をも有之候得とも出所不詳且其後水戸ハ別段申越候儀も無之故實否疑ト相分兼候由
右三ヶ條水藩菊池剛藏方直話申候事

一昨十一月水野泉州侯水戸家老鈴木石見守御召寄ニ而公邊ハ御沙汰無之中ハ決而斷頭等いたし中間敷尤右之趣承知之段ハ書付いたし差出候様御沙汰ニ相成居候處當正月初右書付差出候由

右ハ水野侯御直話之由會津藩林三郎方承申候事

二月朔日

森井惣四郎
益田勇

二月朔日我藩外四藩は昨年十一月の幕令に基づき三條實美等の警衛を嚴にす

〔水野溪雲齋在西手記〕

同年(慶應元年)十一月十二日板倉伊賀守より留主居呼出シ相達之趣寅二月廿七日大岡勘之允寺田嘉兵衛へ申遣候處指出候事

長防御所置之儀追々御取掛ニ相成候ニ付兼而松平美濃守に御預被置候三條實美始五人之者共云々(慶應元年十一月十日の條に出づるを以て茲に之を略す)

右ニ付寅二月より本陣詰相勤尤當藩より之惣詰之是迄之通ニ而取計筋之各藩より一切預不申晝夜士分兩人ツ、足輕兩人ツ、不明様相勤一藩より五日繼ニ而請持當藩願番也予之惣詰計ニ而外ニ相増候儀無之事

二月朔日ハ五日迄薩州 同六日ハ十日迄肥後 同十一日ハ十五日迄福岡

同十六日ハ廿日迄肥前 同廿一日ハ廿五日迄筑後

右之願番ニ而相詰出火非常之節固メ場所表門前肥後裏手馬場薩州筑後福岡

二月二日幕府は長藩に對し裁許申渡の爲め閣老小笠原長行を廣島に派遣すへき旨を達す

〔尊攘錄皇武令〕

慶應二寅年

二月二日之夜板倉伊賀守様より御留守居御呼出ニ付青地源右衛門罷出候處御用人を以被成御渡候御書付寫
毛利大膳父子御裁許之儀別紙之通相達候萬一於致違背之速ニ御征伐候間猶心緩無之様可被致候
右一通

耳書 細川 越中 守に

毛利大膳父子伏罪之儀御疑惑之件々相聞候ニ付大目付御目付を以御糺問有之候處彌恭順謹慎罷在候段一昨年自判之書
を以申立候通相違無之趣ニ付寛大之御趣意を以御處置之末御奏聞相成候就而之壹岐守事藝州表に罷越御裁許可申渡旨
被仰付候間此段相達候也

二月二日在京本藩重臣三宅藤右衛門長州處分に關する官武の意向等を藩政府に報告す

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ

以別紙申達候長州御處置御伺等之儀ニ付而御留守居より指出候別紙書取一通則進達仕候右御處置筋付而ハ從 朝廷猶
寛大之御沙汰も被爲在度との趣ハ密々周旋之儀御留守居杯へ申含置候筋も有之候處於官家ハ兎角御力乏敷處より御身
上之御氣遣のみ多く寛なる方ニ相成候得ハ近衛様派之御説橋會桑之議論立兼候處ニ御畏縮有之若又此度充分之御處置
出來兼候得ハ又々長州勢を得禍忽ち御身ニ及候半杯御恐怖之情より宮殿下ニハ只今之内御辭職と申様なる御打立も有
之候位之事ニ而眼前之利害ニ御泥み永久之義理上ニ御着眼無之實ニ敷敷事共ニ御座候且諸藩召之一條ハ橋公を將軍職
ニ御取立之御下心之様ニも内々相聞被是不容易御時體更ニ目算も付兼候程之事ニ而後道之成行甚以案勞仕候借小笠原

閣老ニハ當月四日頃より藝州に御發向之山矢張十萬石之削地父子蟄居激徒之巨魁ハ關東に指出候様被仰渡管之由尤結
局之御胸算連ハ屹と相立居不申趣ニも相聞萬一事破候へハ俄ニ御討入と申持ニも至可申敷左候へハ御人數出張之御手
賦等多端之御配意も可有之右之大事件も御座候上旁らニハ御連枝様方之内御登京之事も小々御口氣ニ出候哉之由御國
許之御覺悟筋益御難儀之事のミニ而深心痛仕居申候右等之趣爲可得貴意江戸よりの官脚を上々早打ニ而指通候事ニ御
座候以上

二月二日

三宅 藤 右 衛 門

惣 連 名 殿

尙々京攝並官民之近狀筆紙ニ難顯儀も不少今暫見定之上模様次第中島嘉左衛門へ委相含早打ニ而指下可中と心組居中
候

追啓仕候先月廿九日迄之事體ハ御留守居書取進達別紙申達候通御座候處 朝廷之御模様朝夕ニ變化仕晦日より昨朔日
迄之御模様宮様に上村彦次郎罷出奉伺候趣同人より書取差出候付別紙入御披見申候右書面之通候得ハ列藩御呼登之御
沙汰ハ大方止ニ相成可申相考申候此後之様子ハ近日早打差立得貴意可中と奉存候以上(本文別紙とあるは正月廿九日の條
に掲げし淺井上村等の筆記なり)

二月二日

三 宅 藤 右 衛 門

惣 連 名 殿

二月三日遣外使節柴田日向守江戸に歸着す隨行之我藩人岡田攝藏亦歸り幕薩の雲に乗せんとす
る英佛の關係等につき見聞の概要を報告す

〔御飛脚前探索筋言上並御家老達等之加帳〕

一外國に御使ニ御出之柴田日向守様去ル朔日横濱ニ御着船ニ而當月三日御歸着佛國より陸軍傳習之異人兩人同船ニ而參

慶 應 二 年

四六一

り候由ニ御座候右陸軍稽古場所二十五万坪程無之候而之差支候趣申聞候へ共横濱邊ニ右様之場所無之田地を潰し十
坪餘之場所出来可申管ニ候得共元來横濱邊地味宜敷地ニ而田畑潰し候も無益ニ付未夕右場御治定ニ不相成由ニ御座候
右之通御座候事

二月十三日

澤村脩藏

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ
以別紙啓上仕候此表之儀先靜謐ニ而異聞無御座候扱福澤諭吉方に入塾ハムし居候岡田攝藏と申者去年五月上旬公義御
役方外國渡海有之節上下ニ加り英國迄罷越當月上旬致歸府一舛之光景委細申出候得共事長取摘言上茂出来兼申候間航
海中を初各國ニ而之見聞之次第書綴相違候様攝藏に申聞置候付次御便迄ニハ差出申候管ニ御座候尤日本政府ハ虚言而
已ニ而不義理を成候付英國より討戰之議起候得共佛國杯之衆夷ハ同意不致趣ニも相聞申候由方今内患未治折柄外寇之
恐不少實ニ異卵之世上ニ御座候先々荒増右之趣爲可得貴意如斯御座候以上

二月十六日

井上 加左衛門

三宅 藤右衛門 殿

長 岡 帶 刀 殿

以下七人充

〔尊攘錄新聞紙並夷情探索等〕

岡田攝藏洋情密告

西洋風聞記抜抄

一亞墨利加「ジョンソン」と云ふ者ニ巴理府にて逢し時同人の話ニ英吉利佛良西の兩國は頗る日本を取らん事を希望もる
の模様あり夫故に今薩州之幕府ニ背き内々ニ事を計り討幕の企をふ事を英國にては能く承知せといへとも之を知ら
ざる底にて薩州人等が英國ニ到り諸器械及び軍艦を求め或は諸學術傳習杯もるも懇切ニ取扱ひ置て夫を幕府ニは何
の沙汰も不致又幕府ニも懇切ニ相交り此節横濱ニおゐて日本より海軍陸軍之傳習を頼み候處英佛相争ふて傳習せん事
を望み人ニ物を教ゆるに相争ふて教ゆるの理本し是皆英佛日本をふつる終ニは吾有とふさんとの遠謀あり又今幕府
と薩との間ニ事ふらそ其勝敗之模様ニより必ず勝利の方ニ應援せしと語申候

一巴理府滯留中薩州人石垣銃之助

本名新納某大身の上し此度關研藏 本名五代才助此者は長崎にて親數相交り候外ニ壹人名前失念
參居り候内の重役ニ御座候 仕候以上三人は役人ニ而渡海致居諸生十六人薩人都合十九人

又外ニ長州人八人土州人二人英吉利ニ參り居何も遊學生ニ御座候併し面會は新納以下の三人迄
ニ御座候此三人は英譯を本旅館ニして佛國、和蘭等の近國ニ離れ何か周旋いたし候様子御座候等ニ兩三度面會いたし談話之序ニ

何故ニ事を公にして渡海は不致やケ様私ニ忍びての渡海本意は 公邊より異心を挾ての事と疑念懸る間敷ニもあら
そと申候得之五代云今日本之事情薄氷を踏か如くして一日も因循し難し幕府にて速ニ奮發し日本國の歐羅巴各國之
交同様ニ相ふらは豈幕の臣下たる薩州方許多の金銀を費してらるる事をなすべきや然ルニ依然たる幕更因循深く之を
嘆もる事の餘り物入をも不厭ケ様遠海を隔て是迄罷越候之日本國中ニ爲ニ而日本國中の爲之即ち幕府の爲ふらそや只
々日本國之歐羅巴ニ劣らざる様ニとの寸志にして敢而幕府へ異心を狭ての事ニは毛頭無之候得共ケ様の事を今幕府ニ
申出候ても決而開濟ニ可成勢ひも無之故差當り日本の危急を維持の爲の渡海ふりと申候間私より貴君久敷此地ニ遊
岡より波濤の辯昔日より亦一步進めりと申候得之五代より左ニあらそノと是又笑申候

一歸帆の節船中ニ而乗合諸西洋人等の噂ニ今英吉利より薩ヨムるを寄せ薩と幕府と事あらん事を希望もる模様あり
故ニロンドン府ニ而薩人を懇切ニ取扱ふ事幕府の使節よりも丁寧ふり今年も島津三郎の二男ロンドン府ニ渡海ニ相成
候由依而歐巴羅の風聞ニは薩州は却而幕府より權ありて不遠日本國中は薩の有と可成杯と申唱ふをも此儀決而行わ
せざる事と心ある人は承知せり英の幕府薩之間ニ事あるを希望もるは幕府を疲弊せしめて終ニは日本の諸港を英の有

とせんとの底意あるへし杯と取々の嘯ニ御座候

右之外諸人の説話園巻之風聞等日本の事ニ關シ候事件前文ニ大同小異別ニ録上仕候程の事承り不申候以上

慶應二年寅三月

岡田攝藏

二月三日在京本藩吏松本某三藩召登説の濫觴と之に對する我藩の處置及び一橋慶喜將軍職繼承説と一橋家の侍臣攝家入説に關する事情を報告す

〔御國家返 達 御用 狀 扣〕
元治二年正月八日慶應二年十二月迄
〔御國家返 達 御用 狀 扣〕

二月三日松本より様書

内啓長州御處置振を初此節御留守居中書上昨日御國に差進候寫一冊内密御差廻申候書面之内甚混雜兼候處も御座候得共御便差急候付其儘ニ而御國に茂仕出申候間御推覽可被成候尤右書上後之所等一昨夜淺井と綏りと咄承取候處も御座候付其分左ニ申上候間書上〔正月廿九日附〕と御見くらむ御考合可被下候

一書上之内御二方御身上之大事ニ相成候——と御座候ハ尹宮様關白様御兩人之御事ニ而長州此節削地を穩ニ御請仕候得之何之波風も無之候得共萬一御請不仕候得之直様大旗御進ニ不相成候而ハ難相成左候得之近衛様且薩藩よりハ頻リニ御寬典を建言之末ニ付御二方御職掌難相立是一ツニ而大旗御進ニ相成候得之薩と長々内應之密計茂可有之哉之唱も薄々御聞込ニ付長州ニ事を起せ帝都ニ旗を擧可申哉も難計是二ツニて若其場ニ相成候へハ天下之大亂ニ相成御二方御身上之勿論一日茂難相立因而御國をこしめ土州宇和島之三藩御召登帝都御守衛被仰付候へハ薩藩手を引動申間敷候間萬般ニ嚴重ニ御行届御心強被思召候との御趣意之由

一三藩御召登ハ元來橋公茂若大旗御進ニ相成候ハ、其跡帝御手薄候付薩之御恐不少由ニも相聞候付其濫觴ハ橋府より起候哉も難計候得共宇和島老公ハ橋府之御流義ニ無之候付其所を以推量り候へハ此節右三藩御呼たがりハ關白様御内

慮歎とも見込候由

一良之助様を宮様關白様橋公より御召たがりハ不始于今事ニ而昨年來や、もすまは御促ニ相成候得共上田淺井其節々事を設とやかに御拒申上居候由依而此節逆茂成丈ハ御召登之御沙汰出候共御取消之方ニ盡力之儀此元御役々議定ニ而候處一昨朝關白様より淺井御呼出之儀申來候然處近日外邪引入中ニ付神山源左衛門爲名代罷出申候得共御用柄ハ不被仰聞新九郎出動之上罷出候様との事之由定而御召登御内意ニ可有之との推量ニ而即日土村彦次郎宮様に罷出相伺候處全御召登之儀御内沙汰之管之段被仰聞候付尤三藩ハ宇和島ハ前段橋府御差合ニ付土州老公肥前老公夫ニ良之助様之管ニ而御三方様被成御上京候得者何茂公平至治之御運ニ可相成との御趣意之由被仰聞候付三藩御召登ニハ被爲及間敷趣種々利害御説得申上候付宮様ハ御合點之由ニ而此儀橋府茂重疊呼たがり候得共會桑より説得いゝ候ハ、御聞入相成可申關白様ハ會桑之力ニ而之よかノ、貫徹いゝし申間敷可然外藩より御安心ニ相成候様得申上候ハ、十二九御聞入ニ茂相成可申哉之段被仰聞候由依之此元段々御評議ニ而今日中ニ之淺井も出動之管ニ付左候へハ直ニ關白様ニ罷出利害之所急度申上候管ニ而御聞濟有無如何哉先夫迄之嘯合ニ相成居申候

一當御時體切迫之有様ニ而ハ逆茂將軍職之橋公ニ而無之候而之相濟申間敷も亦々關白様思召立三藩御呼登も本文御職之儀御相談之御含も有之候而之御事も有之候由候得共其儀者會桑たつて利害御説得ニ相成候間先其御念ハ御取消ニ相成候由右之通ニ之候得共其中ニハ關白様ハ橋公之御間ハ十分之御煎合ニも無之よし其儀一向橋公ニハ御存無之由之處近日少々御聞込之次第有之候而甚御驚之由ニ付以後共御心持之するも有之候而以後者能御歩合御純然ニ茂被爲至可申歟之由御座候右御聞入之次第ニ申候之橋府之御左右臣一兩人時休也必多度關白様ニ茂罷出居候由之處其内ニハ橋府之御腹より不出事をも色々關白様ニ申上候事を橋府會桑邊より御聞込ニ相成御驚ニ茂相成候由御座候

本文之筋合如何様成事とハ駭相分不申候得共薩人之尻押本と種々形山ニ申立或主人之將軍職を一己之榮利之爲より關白様に御促申候様成事歟と被相考申候橋府も蘊奥之御心中ハ難量候得共表分之所之昨年來別而飽迄宗室之御爲ニ

慶應二年

四六五

御力を被爲盡候得共いまた人心都而歸嚮と申譯ニ之至兼候處御家來右之通ニ而ハ却而主之惡名を求候様成事無是非次第御座候

- 一 小笠原豊州様藝州御越もとふ歟明四日頃御出立之様ニ承知仕候得共いまた大坂よりハ何共不申來候
- 一 橋府御下坂もいまた御模様まかと相分不申候書上面之通閣老方と少々御不煎合之末御文通ニ而御ほとけニハ相成候得共大事之御時節彌以水魚之御計會ニ而無之候而ハ相成不申候間何様御下坂ニハ相成不申候而ハ濟申間敷哉ニ宮様御咄御座候由ニ承申候
- 右之段計承取候趣荒々内密得貴意申候以上

二月三日在坂本藩探索首藤敬助長州處分其他時局に關する聞取書を提出す

〔慶應二丙寅年 尊攘錄探索書〕

正月十九日より下坂之中聞取書

(前略)

- 一 今度御處置御運之振り且幕府中御息込ミ之次第此節之不怪御秘し之御模様ニ而一切外々にハ何之情實も相分居不申候ニ付壹岐守様内大野又七郎を尋ネ今度御處置振り且閣老御息込ミ之次第御先鋒も被仰付置候儀ニ付別段之譯を以被伺候丈嘶吳候様及相談申候處聞取之趣左之通
- 一 壹岐守様御附添之御方より先ニ藝州に御出ニ相成大膳父子名代として三末家之内藝州迄被召寄三拾六万石之内拾万石制知被仰付ハ廿六萬石計リニ相成申候由
- 一 激徒之巨魁迄誅戮ニ被行拾萬石ハ大藩之諸侯之内に御預ニ相成候由尤制知之ケ所ハ要地之所下之關山口當リニ而有之候趣右檢地ニ御出之御方未タ篤斗御定リ無之何レ大目附御目附之内ニ而も御出ニ可相成歟との見込ミニ御座候若右之御處置於致違背ハ直ニ御打入之御覺悟ニ而共節ハ將軍様ニも大節を被向候御覺

悟之由大野見込ミニハ萬々戰爭なしニハ事ハ治り中間敷何レ戰ハ不免ものニ而共邊ハ壹岐守様元より御覺悟有之候由又壹岐守様ハ御之まり候而も土臺之將軍様御腰不居而ハ逆も不行事ニ而共邊ハ篤斗御伺ヒ取ニ相成居申候由ニ噲仕候勿論此儀ニ付而ハ追討之諸藩丈ニハ急々御達も可有之と申候則昨夜五ツ頃ニ御達ニ相成り申候

- 一 大野より改而噲仕候ニハ今度御藩より御打入前ニ壹岐守様御間柄之譯を以御人數三百位計リニ而も藝州表迄被差出候儀ハ被爲出來間敷哉此場ニ至リ未練ニも相聞ヘ元より強而願候譯ニも無御座候得共總之人數ニ而ハ誠ニ心細く御大藩之應援後口ニ有之候ヘハ彼レ伏罪之助ケニも相成候事故頭クハ總計之御人數ニ而も御間柄之譯を以御氣付之筋ニ而被差出間敷哉と申候元より即答仕候よふも無御座篤斗考重役とも嘶合可申併最早日間ヒも無御座急脚相立申候而も遠國之事故往復ニ手間取迎も御間ニ合ヒ兼可申と答ヘ引取申候

- 一 今度御處置之一條ハ内輪長州と御うなもき合ヒ有之是丈之御刑典ハ御受申候と御ちよふじ合セ之上と處々ニ而雜說御座候得共右大野嘶ニ而考ヘ合セ申候ヘハ是ハ何レ間違と相見ヘ申候
- 一 今度御處置ニテ閣老之御説ニ落テ申候儀ハ格別諸藩ニ而異議も無之趣ニ相見ヘ申候ヘ共獨薩州京地ニ而申出候趣ニハ向 朝廷發炮致候ものを寛典ニ被處候而ハ此後如何様之心得違ヒ之者有之哉も難計京地御警衛之儀も甚無心元此儘御斷申上人數不殘國に引取と申出候由小松帶刀杯も近々下國之由風評仕候
- 右之人數引拂之風評ハ間違ヒと相考ヘ申候

(中略)

- 一 長防罪狀書之御高札處々ニ有之候處京大坂共ニ一時ニ何者ともまれず盜ミ取申候段々考ヘニハ姦商米双場之爲ニ致し候とも風評仕候
- 一 土州侯將軍様御進發跡ニ京師御警衛被仰付候處御請ニ相成正月八日ニ國許より飛脚着仕候由土州手島八助より承り申候

(中略)

一大野又七郎ニ筑前五卿之御處置尋ネ申候處是ハ關東に被召下相應ニ御取扱被仰付候方可然と愚考仕登岐守様ニも申上置候趣申仕候
右之通聞取申候以上

慶應二年二月三日

首 藤 敬 助

二月三日長藩六戸備後助義に大久保一藏の齋せる勅書寫を藝藩に致し防長處置の真相を質す

〔尊攘録探索書〕

一薩藩大久保市藏當正月廿五日此ノ勅諭ヲ持參廣島に參り六戸備後介に相渡翌廿六日引取候右ニ付此書而備後介より藝藩に差出候由

寅二月三日差出候由

松平安藝守家來に六戸備後介より内々演説

別紙寫登通國許より急使ヲ以致差知候定而於尊藩。頓ニも傳聞仕候事歟之不存候得共猶爲心得申越候との事ニ而扱彌別紙之趣ニ候得之實ニ圖國意外之御沙汰ニ可立至士民一統驚駭仕。此上主人父子底意士民情實共逐一縷述仕於大小監察方も巨細被聞召届候甲斐も無之儀と孰も仰天致居候様子ニ御座候併道路之説全取留候事ニ之無之万一。虚説歟も不存候得とも追々御耳ニ入置候通國情切迫之御虚説亦らも掛念仕候故鳥渡及御聞繕候彌右様之御沙汰共被仰出候節ハ國內鎮撫も出來兼途ニ御沙汰而承伏仕兼候事ニも可立至候哉尤 朝廷にの奏聞書之如何有之候哉未々拜觀不仕候得共朝廷より被仰出候御文面ニ就キ推考仕候得之幕府御所置振 叡慮と之歸歸仕候歟とも相見へ旁疑敷御座候故彼此御聞札之程相願度毎々御面倒ニ之候得共態々申越候儀故何と歟返答不申遣候而之彌一統不安心ニ存候付何分之處御聞せ可

被下候以上(別紙は勅書也正月廿二日の條に出づるを以て茲に之を略す)

二月四日閣老小笠原長行等大坂を發して藝州に下る

〔風聞書〕

二月十日附大坂より書翰之内

御老中小笠原登岐守殿昨四日藝州表に被致發途候付附添之大目付室賀伊豫守御目付牧野若狭守外國奉行兼木下大内記奥御右筆組頭等出立兵庫より御軍艦ニ而廣島表に相越右之御軍艦戻次第大目付永井主水正御目付岡部三右衛門御勘定奉行兼井上備後守御使番等七日八日之内出立ニ相成候由御座候

本文岡部三右衛門義之小林甚六郎藝州行御免ニ相成候旨ニ而候事

右十日附出飛藝地之模様決定之境浪花ニおゐて不相分趣ニ相聞候事

一京坂之間ニ今以惡徒多く右之薩人相加り 大樹之惡説を流し候由既ニ 大樹公當時御病氣健忘之御症ニ而御政事更ニ御構ひ無之悉皆執政之手ニ出候様跡方もふき浮説相立甚可惡事ニ候云々

二月五日閣老松平康直今明兩日に亙り佛人と横濱關稅輕減に關する談判をなす尋て英國公使と商議する所あり

〔御飛脚前探索筋言上並御家老達等之扣帳〕

(二月十三日附澤村脩藏報告書の一節)

一御書方機密間に左之通及書上候事

當月五日六日松平周防守様御役宅ニ而應接有之候由ニ付昨朝御用御頼外國組頭宮田文吉様に里内官右衛門罷出御模様

慶應二年

四六九

相伺候處右兩日者佛國ミニストル應接有之横濱運上減方之儀談判有之候へ共行届不申猶追々御應接有之筈之由ニ御座候一昨十一日御同所様ニ而英國ミニストル罷越應接有之候處是以運上減方早々取極メニ相成度旨其外泉岳寺接遇所之談判又之英國に遊學生御遣シニ相成候儀ニ付而之應接迄ニ而差而相替儀無之よしニ御座候是迄御應接之節外國御奉行御配下役々も出席之上調役之もの應接御問答之趣書留來り候處兎角御應接之御模様京都へ洩候付五日六日兩日之應接之節ハ御老若大小御目付外國御奉行迄ニ而其以下出席無之處猶又相替り十一日之應接より外國組頭壹人出席被仰付既二十一日ニ之文吉様御出席ニ而執筆役御勤ニ相成候由ニ御座候(以下は二月三日の條にあり)

二月六日佛國公使大坂城に登り將軍に謁す

〔大坂廣島返達御用狀扣〕

二月七日河喜多より 同廿六日着

別啓佛蘭西ミニストル着坂之段之先月廿九日之別紙を以申達候通候處昨朝五時過右ミニストル壹人書記官壹人登城於御白書院御目見被仰付於殿上間御料理被下置候由御目付方御出入之者より承取候段澤田壽作より相達申候(下略)

二月九日本藩京都留守居淺井新九郎井口呈助は諸侯召集に關し二條關白の諮問に答へたる要領及び該件に附帶する各項を列記して在京當局に報告す

〔從京都來候探索書等〕

當月朔日關白様より御呼出兩人共風邪ニ而昨八日參殿仕候處三諸侯御召之一條ハ宮様初會桑御不同意ニ而大體御留りニハ相成候得共關白様ハ矢張御懸念有之外藩之見込如何可有之哉との御主意ニ而新九郎御呼出之由ニ付當時節諸侯御召不可然筋合段々申上候處委細御承知ニ之相成候得共宮様御望通り一橋公御下阪ニ相成候而之京地御手薄ニ相成矢張

御懸念之御様子ニ付將軍様大筋さへ御動無之候得之決而御危儀ハ無之段及辨解宮様御舍之趣も有之候ニ付暫之間五七日ニ而も橋府御下阪ニ候得者人心安堵長防御處置之御都合且幕府御基本之御盡力ニも相成可申段申上候へハ大概御安心之趣ニ付即夕呈助同道會藩へ罷越小野權之允へ出會右之趣ニ付其舍を以て御周旋有之度段申入候處橋公御下阪之儀ハ閣老方之方ニも既ニ起り居其事ニ就而之儀と相見一昨七日手代木直右衛門坂城より御呼下ニ相成居候由橋府よりハ假令御下阪ニ相成候とも徒ニ置ざらしニ逢候までニ而無用之事ニ付御下阪無之様會候へ御周旋御頼込ニ相成居候付京地ニ而之御取扱ハ何分難被出來由申候ニ付左候得者新九郎今九日より下阪之筈ニ付於彼地手代木申談模様ニ寄板閣老に茂罷出彼方より重疊御懇切ニ御下阪之儀被仰越候而何卒橋幕御隔り無之様願曰心配可仕候段談合罷歸申候事
一權之允咄合之内笠閣老四日御發途前將軍様御直書ニ而長州御處置之儀ハ萬事御委任一切御肘撃様之儀不被爲在候との事且又御處置相濟候上人心居合候迄之彌以御滯阪御決心との事若長州承服不致候得之直様御進發可被成との事右三ヶ條小野話兩人ニ而承申候事

一肥前土州御家老此節藝州へ被召寄候段御沙汰有之候由久留米久徳與十郎よ上州荒尾騰作承申候段昨日上村彦次郎に相咄候由右ハ正月十日晚登岐守様へ彦次郎と新九郎兩人罷出候節御處置筋御舍之御咄ニ取扱方又之削地御預之儀ニ付御國其外最寄之諸侯に御預之御咄出候ニ付御國之儀ハ御先鋒被蒙仰候以來長州之受も不宜且御指折之内ニ被召加候而ハ甚以迷惑仕候ニ付是ハ御斷申上候段兩人口を揃而申上候事ニ有之定而其時分よ之御胸算ニ而爲有之歟と今更存當り候事ニ御座候何様此方様ハ右之一條ハ御逃と相見恐悅奉存候以上

二月九日

淺井新九郎

井口呈助

二月十日尾張玄同江戸に着す

〔尊攘錄自筆狀〕

（前略）

尾州玄同様去十日御着府ニ相成日々御登城相成申候先般御上洛之御留守被爲蒙仰候節之月ニ三度之御登城ニ候間此節も右之御振合を以御伺ニ相成候處日々御登城被成候様御用番々御差圖有之候由右様日々御登城ニ而萬般之御政事向御關係ニ而之大ニ御氣遣申上候との事尾州藩水野彦三郎浦五兵衛より密話承り申候

澤村脩藏

二月十七日

二月十二日前開老阿部正外棚倉に塾居す

〔水野風説記〕

私父隱居豊後義去十二日白川出立仕同日夕在所棚倉表へ引移塾居候旨申越候此段御届申上候以上
二月十八日 阿部美作守

二月十二日長州人大樂源太郎書を我藩鶴崎人毛利到に贈り防長二州決心の狀を告ぐ

〔毛利文書〕

（鶴崎毛利莫氏提出先考ニ關スル事蹟取調書）

拜啓舊臘廿二日之貴墨本月五日相達愈御清安被爲在奉珍賀候御手録及風説書等様々御垂示被下厚意勤懇不知所謝也哉
秋日鷗國咸月衰天下之事有不忍言者弊藩依然孤立無才無賢御憐察是祈頃者又再討之様子儘に承之兩國一心之外は無他策候得共往々姑息論を唱候奴も有之然し大概は伏誅候見機時中之高論奉伏候賊儒安井之事御同論に候小生在江戸二年彼と不一見は有故也鹽谷芳野か徒皆同様ニ御座候然し比安井は罪輕事一等也阿蘇大官司の事小生も少々風聞承居候招

容なれば伺ひ度事如山に御座候時勢次第今秋共は御方角へ小遊仕度候吉田寅の門人照顔録を刻し同志に頒ち候小生二部有之候一部先生に呈之候間御評可被下候唯今文吉來り告別候眞の是而已秃筆を走せ候隨分々々玉體御厭ひ專一に奉存候頓首

二月十二日

山口生

毛利翁 坐下

再白先日入貴覽候三絶何卒御削正御送奉祈尙貴稿御垂示之儀華翰中に相見候此度は是非共御贈示奉持候感遇之高作

浩氣二十字之中に盤旋す毎度感吟仕候○小國子病歿無妻子淺利氏は平安之由に御座候小生未相識不文亂筆御海恕是

祈（小國子是小國藩藏長藩の儒臣也）

莫曰此書ハ徳川幕府か長州藩ニ蒙らしむるに朝敵の名を以し征討の師を出せし日先考か同藩儒臣中瀬一ニ大樂源太郎又山口直太郎

ニ同藩の爲めニする所の意見手録及同藩ニ關する風説書を送りたるに對するものより文中敵藩依然孤立、、再討之様子、、兩國一心之外無他策、、姑息論、、伏誅、、當時同藩の内景如何ん徳川幕府か征討の師を出たるにも拘らず躊躇不決之窮狀醜態宛然として目睫にあり阿蘇大官司、、阿蘇惟治は肥後阿蘇の人華胄ニして當時屈指の尊王家より先考と交情極て密照顔録ハ文々山か正氣歌古道照顔色の句ニ取りて其稿ニ名しふり

二月十九日幕吏井上備後守廣島より着坂す

〔尊攘錄自筆狀〕

井上備後守様主水正藝州より十九日御歸坂ニ相成候得共御處置ニ之御關係無之山併御見込ニ之大膳父子山口城罷在候激徒共擁塞いたし正義之者手を入得不申候由付而之中々御處置有之候而及都合宜敷ハ有之間敷との趣、有之候井上様

之不日藝州に御出張之旨ニ有之候唐津藩前場小五郎廿日歸坂いたし當時之長州一統靜謐之趣ニ有之宍戸列も廣島ニお
ゐて同様ニ御座候御處置之儀廿一日二日比ニ之大膳父子廣島に罷出候様被仰出候而不罷出候ハ、名代三末家岩國に罷
出候様被仰出旨ニ有之此節 天幕被仰出之通御請申上終而閩國學而嘆願いたし候由相聞申候

一岩國城邊當時地雷火を仕懸置候由激徒之官軍に備へ唱候へ共其實激徒ニ備置候由

一浮浪激徒本藩より三末家に預り候旨ニ候得共徳山に之激徒参り不申候様願出候間長府に預ニ相成候由

右兩條之流言之様ニ承候由ニ有之候事

二月

一頃日宍戸備後介の藝州に差出候書附之些不審ニ有之候處表向藝州より此許に差上候ニ而度無之且笠閣老着藝之上茂差
出不申候由ニ而備成書付ニ而無之様相考申候

右之通淺井新九郎大坂より申越候事

二月廿四日

井 口 呈 助

二月十九日幕更横濱に於て外人と關稅改正の談判をなす此頃英國公使諸藩と直應接の許可を要
求す

〔慶應元年以後江都探索書〕

外國御模様爲探索今朝御用御頼外國組頭宮田文吉様に里内官石衛門罷出候處文吉様去ル十九日より横濱表に御出張昨
夜御歸府之由ニ而御用多ニ而御逢御斷ニ候得共押而相願候間御逢被下相伺候處追々佛國より各國運上之儀ニ付應接有
之候一條ニ而横濱に御出張彌支那通リニ御取極ニ相成候由右之双方諸品元金高五歩之運上右ニ而者是迄より減方ニ相
成哉之段相伺候處格別之儀之無之との御噂ニ候得共是迄之品ニ寄貳割壹割五六歩位迄不同之由其上今度御取極元金高

ニ相成候得之外國よりハ元金高下直ニ積り可申儀と奉存候左候得之多分減方ニも可相成儀と奉存候

一近日英國ミントル應接兩度有之候得共文吉様ニ之横濱御出張御留守中ニ付暇と御承知ハ無之候得共其以前應接之節
英國より申出候ニハ蒸氣船並鐵炮類共諸家に勝手ニ賣買致し外國にも諸家家來渡來之儀及御免ニ相成度旨申聞候由尤
諸家より願出候得之御免ニ可相成旨ニ候得共是迄願出候向茂無之趣御答ニ相成候處近來英國より之諸家家來多人數入
込居候段申聞候右之主人々々に願濟ニ而ハ無之國々より欠落同様之者ニも可有之旨御答ニ相成候處右様ニ而も次第ニ
多人數渡來候付一統御免ニ相成候方可然其上横濱並御當地宿寺ニ而之諸家家來直應對之儀御免ニ相成度旨及談判候得
共右之趣公邊ニ而も御差支無之候得共勝手次第異人直應接御免ニ相成候得之自然異變出來可申其節當人御仕置迄ニ而
ハ相濟不申此末償金御指出ニも可相成哉ニ而右談判不行届近日兩度之應接も有之談判ニ而も可有之哉之御噂御座候
一ベルシーイ假條約爲御取替之旨ニ候得共同國よりハ各國之條約面之内より都合宜様ニ爲取替度旨申出候ニ付未々御治
定ニ不相成右ニ付文吉様ニも節句過ニハ猶横濱に御出張ニ相成候由御座候

右之通御座候以上

二月廿八日

澤 村 脩 藏

二月廿日幕府横須賀製鐵所創設につき堀田相模守に同所取締を命す

〔風聞録〕

二月廿日

宅に堀田相模守家來呼可渡書付

持歸 周 防 守

堀 田 相 模 守 に

堀田相模守

其方御預所相州横須賀表に製鐵所御取建ニ付爲御取締同所勤番所見張番所に人數差出候様可被致候尤人數差出方其外心得方等委細之儀之小栗上野介竹内下野守藤澤志摩守大久保帶刀増田作右衛門可被談候
右書付持歸同夕留守居呼渡之

二月廿二日幕府は藝藩を経て長藩の末家及び老臣を廣島に召喚す

〔長防再御追討一件、慶應元年八月
京都大探
坂長崎 索書〕

松平安藝守に

毛利左京

別紙書付相達候間毛利大膳毛利左京毛利淡路毛利讚岐

申達儀候間廣島表に早々罷出候

吉川監物に其方より早々可被爲達候

毛利讚岐

二月

松平安藝守家來に

同斷

吉川監物

毛利大膳に

申達儀候間廣島表に早々罷出候様相達候間可被其意

候毛利大膳に通達候様可仕候

大膳家老

松平安藝守家來に

穴戸備前

毛利大膳家老

毛利筑前

穴戸備後介

申達儀候間廣島表に早々罷出候様可被申付候

申達儀候間猶滯藝罷在候様可相達候

〔尊攘錄皇武令、慶應元年八月
京都大探
坂長崎 索書〕

二月廿二日以書付相達

塚原但馬守

毛利大膳家老

溝口出羽守に

穴戸備前

松平左金吾

右之者共に申達儀候間廣島表に早々罷出候様相達候

毛利左京

毛利大膳家老

毛利淡路

穴戸備後介

毛利讚岐

右之者に申達儀候間猶滯藝罷在候様相達候

吉川監物

右之趣爲心得相達候間可被得其意候事

二月廿二日幕府大監田澤對馬守小監松浦越中守長崎に赴く

〔慶應元年八月
京都大探
坂長崎 索書〕

外夷一條(報告書の第四節)

大目付田澤對馬守様御目付松浦越中守様去月廿二日大坂御出立兵庫迄陸行同所を正覺丸蒸氣船御乗組長崎表に御出之由右ニ付風評ニハ長崎表ニおゐて夷人御取扱ニ相成攝海ニ廻らぬ様ニ御處置有之候との事又一説ニハ長崎ニおゐて英佛を日本之御爲筋を申上候旨申出候付其御聞届ニ御出とも申候何分取留メ申事も無御座候得共右兩條ニハ廻レ申間敷との諸藩見込ニ御座候(下略)

寅三月朔日

首 藤 敬 助

二月廿三日幕府は長藩若し命に服せずんば征討の師を出すべき旨を塚原但馬守をして諸軍に傳達せしむ

〔尊攘錄皇武令、慶應元年八月
京都大坂長崎 索 書〕

塚 原 但 馬 守に

今般毛利左京毛利淡路毛利譜岐吉川監物並大膳家老二入出藝穴戸備後介滯藝相達候付廣島表に到着次第 御裁許申渡候若於致違背ハ兼而被仰出候通連ニ御征伐被遊候間就而之先達而被仰付候討手之面々其節ニ至り手後々無之様可相心得之旨其方より無急度可被達置候尤軍目付之御使番に茂右之趣爲心得通達致し可被置候事

二月廿三日

二月廿三日閣老小笠原長行廣島より書を所司代松平定敬に贈り長藩寛典を歎願すとも容易に聽許すへきにあらざる所以をのぶ

〔侯爵細川家書庫箱入文書〕

寸牘奉拜啓候和暢之候ニ御座候處 御所益御安全 公方様彌御機嫌克被遊御座奉恐悅候次尊君様御康勝被成御眠食奉欣躍候此程之御結構被蒙 仰千龜萬鶴奉拜賀候右御悅乍略儀此中へ認込候段失敬御宥免奉仰候然ハ鄙生儀去ル四日浪花出立同七日夕無滞致藝着候早速御吹聴可申上候處外邪ニ被侵一時平臥罷在其后快方ニ相成候得とも御用多ニ而取紛心之外延引相成候段恐縮之至御仁恕可被下候去月中ハ上京度々拜而致大慶候下坂之頃之御約束之寒暖表頂戴難有全御有合と奉存願候處態々御取込ニ而御贈寄被下候由御手数敷かけ何共恐入候儀ニ御座候日々取出致重寶候段くれノ御厚

禮申上候御答禮ニ何そ面白物奉拜呈度心懸申候得共珍物未見當其中可致拜呈候儀其後 御所中も至而御靜謐之由全ク色々御骨折故之義千萬難有安心ニ而當方處置可致御厚禮申上候此上共御盡力奉願候御裁許申渡候義も一旦之素直ニ御受申上其上ニ而只管致歎願候歎之評議致居候様風聞ニ御座候萬一今一層寛大之御沙汰願出候共 御所ニ而一切御取上ク無之様致度尤其主意柄ニ寄不取上して難叶茂も有之候ハ、鄙生方早々可申上候不束至極ニ而御座候へとも鄙生義上々全權御附與ニ而當地へ出張致居候上ハ篤斗致勘考可取用事ハ速ニ申上離取用義ハ差押へ候間鄙生方不申上候内ニ善惡共御取上ハ堅ク御無用ニ奉願候此分御採用無之而ハ鄙生ハ處置決而出來不申詰り天下之御大事と相成可申候間 皇國之爲を厚被思召吳ノ御取上無之様 關白殿下尹宮其外へも屹度被仰上被下候様奉願候兼々御約束も申上候義御如才も無之と奉存候得とも御所之處何分ニも懸念故念ニ之念を入管と申俗諺を思イクドク申上候段心中御推察可被下候尤一橋殿肥後守へも申遣候間能々御相談御一同御一致ニ而關白殿宮様邊へ前以篤と被仰上置候様伏而奉希候御吹聽旁御禮石之義も相願度呈愚書候余者期後便候頓首謹言

二月廿三日

小 笠 原 壹 岐 守

松 平 越 中 守 様

再白折角御自愛專一ニ奉存候鄙生不快大概快復ニハ候得共未タサツハリとハ致兼併何も御案思被下候様之義ハ毛頭無之候間乍憚御休神可被下候早々不備 右桑名森彌一左衛門方三月十三日借り寫ス

首 藤 敬 助

二月廿五日幕吏井上備後守大坂を發し廣島に下る

〔京都大坂長崎 索 書〕

慶應元年八月

(寅三月初日附首藤敬助報告書の第二節)

長防御所置一條

長防御處置之儀ハ小笠原侯へ御委任ニ相成御處置被仰渡等之御都合ハ頃日々追々聞取書差出置候通り今以異聞も無御座候處聞老御役人御出藝後御勘定奉行大坂町奉行兼井上備後守様去月十八日藝州御出帆翌十九日御登坂相成候付色々風評も有之取留メ候事無御座候得共先一躰長防之形勢最初之御見込とも違ヒ候趣ニ而何分今度之御處置被仰出承伏之模様無御座迎も戦争ハ免まざるとの御見極メて益御腰を御居ヘニ相成候様ニとの御主意之由井上様同廿五日夕大坂御出立猶御出藝ニ相成同廿九日藝州々之飛報參り廿三日別紙之通藝州表に御達相成申候右ニ付會桑之見込も尋ネ今度ハ彌以御腰居り候哉と問合申候得ハ此節ハ聞老御始不怪御之よりニ相成居此迄之處とハ違ひ萬々怪敷御手術等ハ有之間敷其儀ハ安心致し幕威挽廻不仕而ハ難叶時節と噂仕居候併諸藩之見込ハ是迄之姿を以考へ合せ十分に御腰之居りハ信し不申趣ニ而段々人氣不揃ニ有之由ニ御座候

二月廿六日小倉駐在の幕府監察塚原但馬守は裁許申渡の上長藩若命を拒むがごときことあらば征討の兵を進むべきを以て豫め其準備をなし置くべき旨を同地詰の我藩士に達す

〔長防二度目御征伐一件〕

塚原但馬守様より今日私共之内即刻罷出候様御達ニ付寺本八郎助罷出申候處別紙之通御書付御渡被成御請申上候就而御演舌之趣ハ御國許より重役等御呼出ニ而御内意可被爲在候等之處詰合居候付私共は御渡被成候段被仰付且御國許に之早速可及通議旨御内意被仰付候間御渡之書付相添相達申候以上

二月廿六日

小倉詰
御物頭中

御奉行衆中

今般毛利左京毛利淡路毛利讃岐吉川監物並大膳家老二人出藝大戸滯藝之儀相達候ニ付左京始廣島表に到着次第御裁許申渡候上若於致違背之兼而被仰出候通連ニ御征伐被遊候就而之先達而被仰付置候討手之面々其節ニ至り手後ニ無之様可相心得旨無急度可被達候

二月

二月廿六日毛利左京等召喚の爲め藝藩の使者廣島を發す。

〔尊攘録探索書〕

(三月二日附大里八左衛門報告書の一節)

一左京已下御呼出之儀を以藝之御使番神尾尙太郎山香馬之丞兩人口徳山岩國へ參り若月準二戸島瀧之丞兩人蒸氣船ニて長府清末へ參り何をも二月廿六日廣島出立依之三月下旬頃ハ末家初一同罷出可申敷ト藝藩杯見込居候事但日限無之ニ付程ニよまてハ四五頃も相成候わん敷將又備後助演舌書之趣メてハ罷出申間敷様も見込有之候事

〔風聞書〕

四月十二日傳聞

藝州より被差出候長府清末に參り候使者歸國差出候書面私共儀府中に御使者被仰付候ニ付而去月廿四日府中に宿屋に罷越御用人庄原半左衛門に御書付相渡御口上之趣相達候處御家老田代内記を以御返答被仰出候

若月準二

慶應二年

四八一

戸 島 瀨 之 畝

御達之趣ニ付遠路態々御使者を以被仰越御書付落手仕候左京儀御相對可仕管之處不任心底候ニ付此段私方御挨拶仕候様申付候

私共清末に御使者被仰付當月朔日清末御客屋に罷越片見小次郎に御書付相渡御口上之趣相達候處御家老内藤忠一郎を以御返答被仰聞候

若 月 準 二
戸 島 瀨 之 畝

今般御達之趣ニ付御使者を以被仰越候御書付體ニ落手仕候譜岐義御相對可仕管之處持病其上風邪ニ付臥付罷在不本意次第御座候間宜敷様御挨拶仕候様被申付候

一岩國山口に參り候御使者昨八日夜歸藩御届申出候御達之趣御返答之儀之從是追々可申上候御書付之儀體ニ落手仕候右之趣ニ而兩所共即答之儀左候得之最早末家並家老共不罷出候義之顯然此上之御先手頭ニ而も差遣有之無理ニ病間になりとも押通り御申渡し可有條理と奉存候得共此節之條理不分明ニ而安心も難相成込入候事

一若月準二外登人下之關に着岸可仕管之處争闘已來竹木等押倒候儘取片付も可仕候處重キ御上使御通し申上候も恐入候間長府海岸に御着被成候様ニと下之關之上陸不爲致候由

但此儀之全く下之關に之地雷火仕掛候ニ付要地海岸に之其地之人民をも通行不爲致候よしニ相聞申候夫ゆへ清末に着船と申候

二月廿六日英佛我に對する交渉に意見を異にすること及び幕府財政必迫の狀況を報する者あり

〔慶應二年 風聞書〕

三月廿二日 京師風說傳聞

兵庫鎮港之儀此儘差置候而之萬國通商之妨ニ相成候間 將軍家に英吉利人干戈を差向候企有之薩長等にも内約此說信し候族多分有之

一右ニ付佛蘭西之説之元來日本之勇壯之國ニ而當令及干戈候得之二百年來太平之事故一旦之勝利ニ而海岸二三ヶ國之手ニ入可申ふれ共全國掌握之策之無之右様兵端を開候上之必魯西亞人日本國之援助致し日本國も兼而勇壯之人氣振立日本よりも可發立其期ニ至り必勝之策無覺東何分小國ふれ共產物多應之利潤有之國故先々平穩ニ通商致も方可然と英吉利人に及返答候趣ニ而夷人共互ニ嫌疑を生し争論ニ及不穩様子右之次第ニ付佛蘭西人より逐一及内通薩長之者夷人共に内約之儀分明候由

一薩長互ニ援助有之由ふれ共又嫌疑之筋有之哉一和ニ之無之山乍去夷人に之前件之交通有之由
一公邊御勝手向實ニ御必迫ニ而京師御出役之方々宿料壹ヶ月分銀二三枚ツゝ前月渡り之處此頃ニ至り追々御渡ニ相成且又一橋公ニ之當時大低三十四五万石之御賄相成居候處御約束之通御賄被成兼候趣ニ而御當惑之御様子兼而京住之向に御藏米相渡來候處三分一正米三分二之淺草御藏御張紙直段ニ而御金渡之御沙汰有之候よし

一御築地升寅之方猿ヶ辻と申邊兼而御築廣ニ相成風聞も有之候處追々大藩より御遣營申上度旨被申立候趣ニ而彌有柄川宮御宿坊御花畑ニ爲被下元御宿坊御取拂御築廣め之御遣營方今御必迫之御中ニ無御據近々御取懸り可有之右御入費四百萬金之御見込と申事之由其上守護職上屋敷外ニ御役屋敷文武館等數ヶ所之御費請不容易御入費其上一橋公御館も出來候半而之難相成當今御必迫之折柄從 禁廷之御難題追々被 仰出當時之御模様ニ而之一兩年先之御見透も無之如何成行可申哉と御掛り之方ニ之勿論幕下之惑亂之様子萌有之趣

一長防御裁許承服候者追而 御上洛 御三代様之こくとく 御例二條 行幸且御推任可有之右萬端御事濟ニ而 還御可有之趣

一長防之者京坂所々ニ潛伏有之由(下略)

二月廿六日付

二月廿七日在廣島宍戸備後助は長藩末家以下召喚の幕令に對し辯訴する所あり

〔尊攘錄皇武令、慶應元年八月 京都大坂崎從京都來候探索書等、尊攘錄自筆狀〕

此度御達之旨有之末家毛利左京毛利淡路毛利讃岐吉川監物外宍戸備前毛利筑前御當地迄罷出候様御達相成候付銘々在所表に早速御使者を茂被差立候由ニ承り候處已ニ去八月御尋之趣有之末家並家老之者大阪迄罷登候様御達ニ相成候節孰茂氣分不相勝候付上阪之儀御斷申出置候其後末家中いつまも快氣仕候者有之儀も承不及候殊ニ備前筑前兩人儀之去秋大阪迄可差登於國許内決も仕候得共同く不快中ニ罷在備後介儀之備前一名中之者故右爲名代差出筑前も同様ニ付并原主計差出候處是又途中より氣分不相勝候ニ付其末木梨彦右衛門名代相勤御尋御用も拜誦仕候位右備前筑前も今度とても如何可有御座哉尤其後時日をも經候事ゆへ快氣仕早々當地まで罷出候様相成候哉も不存候得共去年以來之處心附候儘入御内聞候間可然御含置被下度相願候以上

二月廿七日

〔尊攘錄自筆狀〕

右書面備後介木梨彦右衛門限ニ而決斷差出之儀と之相見不申同月廿六日同人共より本藩に早追使之者差立本藩より茂前後追々使之者入込ニ相成候趣相聞候よし就而之本藩打合之上差出候事敷と相見候由左候而右之書藝州方登岐守様ニ差出候處當朝日壹州侯より左之通被仰渡候由

前條之書面 公邊之御都合且長州之爲ニ不相成候間備後介說得何と敷出藝之儀申談候様藝藩に御含ニ相成候由
三月朔日關稅改正、訓練御設置及び横濱出入船艦數等を報する者あり

〔慶應二年 風聞書〕

三月朔日附同三日着横濱港より來狀之内

差圖 役勤 方何 某

當方差而相替儀も無御座候得共此節各國より稅限之義五分ニ致し度旨申出候此方より鐵炮術之儀英國と佛國と兩方に傳習相頼候ニ付兩方ニ而何敷不承知申出旁先頃應接等御座候由内々承知仕候
一横濱北方と申邊一休ニ日本訓練場ニ相成江戸表步兵三千人其外役々大勢爲炮術傳習場所出來次第參候由尤場所之何をも田島ニ而聖堂付地頭之由百姓共殊之外難儀申出候と申事ニ御座候
一去二月十一日陸軍奉行大關肥後守殿西丸御留守居製鐵所掛り竹内下野守殿御目付大久保筑後守殿其外御目付方大隊訓練見分有之下拙なとも其節出張仕候右之神奈川炮術方之近々陸軍奉行之支配ニも可相成哉之風説も御座候
一辨天地内ニ常月上旬より濱碇と敷中輕業師參り大仕懸ケニ小屋も出來大分大入之由尤日數十五日之間興行之由右相仕舞次第角力參り興行之由右等之外何も珍敷説も無之至而禮ニ御座候且各國軍艦商艦共日々出入有之候得とも大勢員數之是迄之通より貳拾貳三艘より三十艘位迄之處ニ御座候云々

三月二日賀陽宮我藩京都留守居井口呈助に有栖川宮及び諸卿赦免請願に關する消息を傳へらる
〔從京都來候探索書等〕

今二日尹宮様に參殿仕候處先月十九日正親町三條様より此節大膳父子朝敵之名被除候處ニ而之有栖川宮様を始二十卿

慶應二年

四八五

方差、寄年來之御儀御免被 仰付候様との被 仰立有之候由之處其儀ハ決而難被爲叶段廿六日屹々 勅裁有之實之三條様も矢張尻推候者有之と相見近衛内府様は茂御内意之御模様ニ有之候得共前文通之 天機ニ而何となく御説を御引込ニ相成候由畢竟頃日 幕府詰問之落書 本文詰問之落書ト御座候ハ別紙積置候之書付 根ニ成候而意外之方々朝廷を嘗候而聊御動搖之前候ハ、夫ニ付込ミ長州寛典之説を立可申との結構かと被察候との御沙汰ニ御座候左候而村上下總近日宮様は罷出四方山之御嘶申上候内長も難斃 幕も中々難斃兎角世之中ハ因循よろしく御座候杯と戲言雜リ申上引取候由薩も國人ハ左程も無之と相見候得共同人及び大島高崎杯辭者被思召候段御意有之候事

三月二日

井 口 呈 助

三月九日幕府は外國條約に關し意見ある者は速に建議すべき旨を更に諸侯に令達す

〔大坂廣島返達御用狀扣〕

〔三月九日松平伯耆守渡〕

細 川 越 中 守

外國條約之内異議有之面々之無腹藏以書面可申聞旨去十月中相達置候間可成丈早々書面を以可申聞候様可被致候

三月

〔尊攘錄新聞紙並夷情探索等〕

外表一條御達書並聞取書横濱新聞紙

首 藤 敬 助

慶應二寅

三月九日夜御用番松平伯耆守様御呼出ニ付罷出候處左之御書付並御名前書御用人澤村又七郎を以御渡ニ相成

候事

外國條約書之内異議有之面々ハ無腹藏以書面可申聞旨去十月中相達置候間可成丈早々書面を以申聞候様可被致候

筑前 因州 御名 藤堂 久留米 柳川 備前 薩州 肥前 對州

藝州 土州 濱田 津和野 彦根 高松 松山 榑原 小倉 中津

右建白未タ不相濟藩ニ而御座候建白相濟居候藩は建白之主意相尋ネ申候得ハ大抵何方も一ト通り大體之論迄ニ而巨細枝葉ニ者論涉リ不申趣ニ相聞尤越前ハ中根雪江齋藤登坂仕雲州作州當り御親藩申合セ外國條約ニ付異議之見込も無之外ニ別段氣付候儀も無之段建言ニ相成り申候趣ニ御座候

右越前伊藤覺左衛門聞取

一今度條約異議御尋ニ付諸藩寸斗速ニ申出無之譯之實ハ條約外ニ陰微ニ外國に被差遣候品々有之紀律も立兼子居申候得共此儀申出候而ハ却而忌諱ニも觸レ可申且御尋子外之儀ニ付諸藩十分ニ建言不仕趣ニ相見ヘ申候

右肥前福地六郎右衛門久留米松岡傳十郎聞取

一條約異儀御尋子之御達者拾萬石以上之諸侯迄ニ御座候由

一兵庫開港之儀ニ付頻リニ外夷方迫り候ニ付暫ク右申出を防ク爲ニ三港無運上ニ而交易被差免候由風評仕候

三月十四日英國公使薩藩岩下佐次右衛門と 大中寺に於て談判する所あり尋て公使薩藩邸に至る

〔慶應二丙寅年 尊攘錄自筆狀〕

一松平防州英國ミニストル應接中何事歟彼方申出之趣難取上事有之候故防州聞入無之處猶被方強而申募暴論を發し候ニ付防州大ニ不平を鳴させ貴國との交之固方可變様之無之候得共暴論家との交之一切出來不申已後之應接別人といたし可申と返答有之候處彼も語塞り再び其事之發し不申由只今迄之聞老ニて右位之應接も無之由木村道之助方内話いたし候由承申候

一同日之事敷同侯應接中英ニストル諸藩人に直應接御許容有之度段申出候ニ付正義之者之支無之候得共法を授き直應接を許候得之自然激徒迄も紛入亂妄相働候而之各國に對し相濟不申候故直應接難被許段返答ニ相成候處彌正義之人と申候得之支無之哉否之段問詰候ニ付正義之拒ミ不申返答有之候處彼薩州岩下佐次右衛門至而正義ニ候得之應接仕度と申出防州甚々當惑暫く返答も無之途ニ彼之議論相立候由ニて當月十四日大中寺ニて岩下英人と應接其趣相分不申薩領内ニ商館を拵可申事ニて之無之敷との見込ニて御座候然處同日夕英「ミニストル」、アレキサントル薩邸に參ル同十七日高繩接寓所見分としてミニス、アレキ罷越歸路薩邸に立寄同日夕猶兩人車ニて妻子迄も携へ薩邸に罷越申候由ニ御座候(下略)

三月廿五日

益 田 勇
森 井 惣 四 郎

三月十四日在坂本藩探索首藤敬助は防長處置に關し諸藩の間に議論沸騰の狀況、土佐藩主の京都警衛、土肥兩藩老臣等の着藝及び薩藩老臣小松帶刀等の動靜を探知して之を上司に報告す

慶應元年八月
〔京都大探 索 書〕
阪長崎

一 幕府御徒目付鍋木仙之助去ル六日藝州出立十月着坂直ニ上京十二月下坂ニ付昨十四日會桑同席面會仕聞取左之通
一 於藝州表穴戸列より申張り居候之今度之御所置天朝よりハ別段寛大之恩食ニ被爲在候ニ幕府ハ苛刻之御取扱ニ相成候御模様如何之譯敷何とも疑惑千萬と申居候由 右之全ク薩州より尻押し之故と申見込ミ之由
一 穴戸備後介存込ハ昨冬御糾問相濟候上ニ而滯藝ニ而御處置被仰出迄被差置候様歎願仕候處被爲叶唯今迄滯藝仕候然ルニ末家並家老まで被爲召候而ハ滯留仕候甲斐も無之國許ニ對しても面目立チ不申何卒出藝之同列丈ニ而御所置承度段評議仕居候趣ニ御座候

一出藝之諸藩も段々異論區々ニ而差寄り藝州ニ而茂今度之御處置之餘り極典と申居幕府御失休も多端有之内憂外患之折柄ニ而今少し寛大ノと申居候へとも十分見込ミハ吐キ不申右ニ付閑老よりも屹度御尋ニ相成り見込丈十分申上候様被仰付候御含ミ之由備前より之申出ハ矢張藝州と似寄り候説ニ而是迄幕府之御失休を數へ削知等被仰付候譯ハ無之其上大膳父子ハ元より寵恩ニ而臣下ハ斯ク致し候事ニ候へ之盤居等之御咎も餘り苛刻ニ過ルと申出候趣右之態々國許より罷出閑老迄申出候由且又備前よりハ藝州に密書杯差越し種々怪敷姿有之由ニ御座候
一 彦根上田大垣柳川之説ニ而ハ削地之一條要地有高拾萬石と申候得之彼是三拾萬石近ク有之高ニ而實ニ一大諸侯を御取潰之御力無之而ハ出來申間敷是迄之姿ニ而之萬々御受申見込ニ無之段申出右ニ付彦根より近々登坂當所ニ而屹度申出候積り之由

一 今度鍋木登坂上京之趣意ハ前條通り諸藩議論沸騰いたし候ニ付自然裏廻りニ而朝廷へ吹込ミ候不軌之諸藩も無之とも不被申朝議御動搖ニとも被爲至候而ハ一大事之事故右決而御動搖無之様との閑老思召ニ而鍋木登坂ニ相成候趣ニ御座候
一 閑老思召ニといかミ諸藩より色々申出候而も是迄御評決之處大躰ハ決而御替り無之尤其内少々之高低ハ御手之内ニ有之事ニ而決而曖昧之御處置ニ之不被爲至御覺悟之由
一 會藩外島機兵衛説ニ之於藝地之閑老御始メ京坂之間御懸念も御尤ニ候得共内外藩々申合せ決而御動搖無之様周旋仕候間無御心置十分ニ御腰を被居於藝地御處置被爲在度存段右鍋木嘶申候
一 桑藩森彌一左衛門説ニ之於藝地天幕之思召御齟齬之段を根ニいたし色々物議沸騰仕ニ而可有之候得共決而天幕御齟齬之譯ハ無之此僞文ニ而篤斗於彼地御説得可被成と申右前文通り僞勅之書付を出し鍋木に遣し申候
右鍋木旅宿ニ而聞取

寅三月十四日

首 藤 敬 助

慶 應 二 年

四八九

〔侯爵細川家書庫箱入文書〕

一 肥前家老中野敷馬先月廿日國許出立去ル四日藝州に着仕候山土州家老ハ高島圖書と申入去ル朔日國許出立仕候由未タ着藝之儀ハ分り不申候
 一 土州侯京師三ヶ月交代之御警衛先日被仰出候事

右ニ付土藩原四郎嘶ニ之即今處々御用相動居住吉並藝州表誠ニ國力も疲弊御受中上候事何程ニ可有之哉と噂仕候
 一 水戸公子頃日御下坂ニ相成一兩日御逗留ニ而直ニ猶又御上京ニ相成り申候
 右者舊冬 幕府御賄等被下置候御禮旁將軍様御機嫌伺として御下坂ニ相成候由此節ハ暫ク御逗留ニ相成候へハ一橋侯に之御間も御都合可宜敷との御主意之由ニ候へとも幕府中ニ而段々嫌疑之御方多ク煩敷氣味ニ而も有之歟速ニ御上京ニ相成候様取計ヒ手多右之通御上京ニ相成候由津和野小野寺六郎嘶
 一 去ル四日薩州家老小松帶刀桂右衛門列都合二百餘之人數引連レ下國仕候右ノ天幕ニも御不都合ニ相成り諸藩ニ而も不被容處カ不平を抱キ罷下り申候趣ニ相見ヘ右ニ付諸藩ニ而之益々嫌疑を挾何レ下ノ關當リニ參り長防之尻押し仕皇國之大害を成し可申と諸藩懸念仕候右ニ付尾州カ登坂仕居候若井銀吉當所ニ而小松ニ逢説得致し今日ニ 皇國之御爲メと申候而之 天幕之御主意ニ本ツキ氣付候儀ハ十分建言も仕彼地此地周旋不仕而ハ難叶御時節ニ而御座候一己獨立之時ニ之未タ早ク有之候と申候候へとも一向打合不申趣ニ而何分 天幕之御爲メと存申上候而も却而御不爲と相成候事迄ニ而最早何とも不申上方却而御爲歟と存此節之下國仕候と申候由越前中根雪江も先頃餘程説得仕候へとも寸斗聞入不申趣之由 右尾州若井銀吉カ聞取(下略)

寅三月十四日

首 藤 敬 助

三月十五日一橋慶喜書を長岡護美に贈り征長に關する狀況及び朝幕の内情を縷陳して其意見を徴す

〔見聞雜錄〕

久敷御様子承不申候處春暖愈御無異之儀珍重存候拙者頭健在勤御降心是祈候陳者防長國內之模様其後如何御聞込御座候哉兎角種々之風聞而已不得真情候得共激徒益盛ニ相成此程ニ至候而ハ政府も一體ニ而専ら深溝高壘之計ト而已相聞彌割據之形迹を顯候儀と存候幕廷ニ而ハ大膳父子御呼寄之儀再三之御沙汰ニ而近日大小監察長地へ赴之都合ニ有之三條以下も同斷之由此末之見留メ如何可相成哉何共及愚慮兼只々痛心千萬罷在候猶御賢考承度候當地之儀茂追々御聞及御座候半去月兩閣老上京後 朝廷茂一層御憤發被爲在豐州無程東下伯州下阪と相成候處折柄諸藩參劄並長父子之儀ニ付從 朝廷嚴重之御沙汰被發候様頻ニ周旋致候藩士有之右建白内々其藩命を受候事ニ茂候哉於 朝廷御採上無之候ハ、在京之兵士一人も無殘引拂已來 朝廷之御用相動中間敷旨以而堂上一般に相迫り候由兼而御微力之緣故有之勢焰ニ御おされ候て終ニ右御沙汰被仰出尤二件共當今之要務別而諸藩之爲ニも相成候儀御趣意柄ニ於聊御不筋之無之候得とも右等之事件總而大樹公御上阪之節被仰出候儀ニ候へハ格別豐州東下未た半途之折不意ニ相發候ハ、御體裁ニ相響キ却而 朝廷不徹底之基ニも可相成と存候間彼是周旋も候得とも悉く事後之盡力ニ相成詰り御沙汰止と申場合ニ茂至兼候御都合ニ而伯州被召寄同人に向ク被仰出候事ニ相成候右之一事此上幕廷彌御遵奉ニ相成候哉如何其邊も見据無之向來益紛亂を重キ候事ニ可有之公武之御齟齬今更ニ者無之候得共一事相直候度ニ一事之御不都合相増所詮終始御一和と申處如何と懸念之至ニ不堪此模様ニ而ハ當職ニ罷在候而も實以其甲斐なき事ニ落入甚以恐入候次第會桑共右邊大切迫ニ而會ハ既ニ自發東下之決心ニ及居候を強而留置候事ニ有之左候迎束手を罷在候而已ニ而者幕廷御挽回之期決而有之間敷最早結局之見込を以退候より外手段無之候得共當局者ハ迷ひ傍觀者之明と申事茂承り居候間乍失禮傍觀者之御

見込を以何卒御熱考御申越御座候様致度尾總督も未滞在是も防長之儀ニ者困り居候様子實ニ大洋ニ失楫候世界いつ
ニ着津ニ可相成哉東西之形勢得斗御洞察之上救時之良策何分ニも御勘辨之程慕望此事ニ御座候前文差向テ緊要之儀御
運申度書外後音ニ付候草々不幣

寅三月十五日認

中納言

良之助殿

再白時下御厭專要ニ存候過日久兵衛歸郷本文之形勢委曲同人より御聞取相成候半剛情先生當節實ニ困却罷在候御冷
笑ニ而候大芋老人之手廻ニ者致感心限候御序ニ西州之模様御申越致度後音待入候已上

三月十五日幕府は監察小林甚六郎を三條實美等取締として宰府に派遣する旨を達す

慶應二丙寅年
〔尊攘録自筆狀〕

慶應二寅三月

御用番松平伯耆守様御呼出有之別紙御書付寫之通被成御渡候由青地源右衛門ヲ達出有之候間則差越申候尤御目附小
林甚六郎様明十六日蒸氣船御乗組此元御出帆之由御座候將又去年御手當御拜領米之儀工付御勘定衆ヲ被仰聞之趣是又
別紙之通青地源右衛門ヲ達出御座候間則差越申候右ニ付而者此節之御飛脚海上下路上々早打ニ申渡差出申候條右之趣
を以夫々宜敷被及御達可被下候以上（手當米に關する達書は次の條に出つ）

三月十五日

佐野 亥 一 郎

御奉行 衆 中

〔別紙〕

御用番松平伯耆守様より御呼出ニ付代勤國部善之允參上仕候處別紙御書付一通御用人を以被成御渡候間右寫相達申

候已上

三月十五日

青地 源 右 衛 門

佐野 亥 一 郎 殿

細川 越 中 守 氏

此度御目附小林甚六郎筑前宰府御取締として被遣候ニ付而者三條實美始五人之者爲護衛差出置候家來共ニ於場所甚六
郎より申達候儀可有之候間可被得其意候

三月十五日

三月十五日幕府は本藩に對し昨年十一月通達せられたる征長出師手當米給與の事に關し速に何等かの處置をとるべきことを促す

慶應二丙寅年
〔尊攘録自筆狀〕

御勘定奉行小栗下總守様今十五日四時御城御中ノ口ニ御呼出ニ付爲代勤御城使差出候處去丑年十一月御手當米御拜
領之儀御達相成候處外々様之何き茂御受取方之儀疾御伺出ニ相成夫々御指圖等茂相濟候得共此方様ニ之未何等之御伺
等茂無之候間早々其手數ニ相成候様との旨御勘定衆を以被仰聞候ニ付早速御國許に申遣候様可仕旨相應之御答申上置
候段申出候此段相達申候以上

三月十五日

青地 源 右 衛 門

佐野 亥 一 郎 殿

三月十六日幕府監察小林甚六郎大坂を發す

〔長州再征帳〕

三月廿五日

(前略)小林甚六郎殿蒸氣船御乗組去ル十六日大坂御出帆之由候此段も爲御含申達候以上
久武彌左衛門殿 御奉行中

三月十九日芝高輪泉岳寺境内外國人接遇所新築竣工す

〔慶應二寅年 風聞書〕

三月廿六日出

扣和泉守

高輪泉岳寺境内上ヶ地外國人接遇所

御普請出来ニ付見分仕候趣申上候書付

高輪泉岳寺境内上ヶ地外國人接遇所御普請出来ニ付今廿六日私共支配向召連罷越堀下野守並支配向其外掛り之者一同罷出出来形仕様帳に引合見分仕候處無相違出来仕候御不丈夫成儀も相見不申尤見へ懸り無之場所之下野守に相尋候處念入仕立候旨申聞候且御普請仕立日數之儀之去丑八月廿二日より當寅三月十九日迄貳百五日之内雨乞其外より而六日相休殘日數百九十九日ニ而出来仕候旨申聞候依之申上候以上

寅三月

駒井甲斐守
大久保帶刀

三月廿三日幕府監察小林甚六郎博多に着す

〔慶應二寅年 風聞書〕

五月三日

御用番和泉守殿御宅に松平美濃守家来より差出候書付

美濃守領内に差置候三條實美初五人之者共爲御取締小林甚六郎様三月廿三日蒸氣船ニ而領内に御着船ニ而直ニ御揚陸博多御止宿同廿六日於箱崎驛美濃守下野守御出會仕同晦日二日市驛に御越御滞居相成申候此段申上候様從國許申越候以上

松平美濃守家来

永田直次郎

五月三日

三月廿五日在筑三條實美等幕吏來着の報を聞き決する所あり豫め隨從の士を戒め事に臨みて從容指揮を待たしむ

〔水野溪雲齋在西手記〕

同廿五日

森三右衛門寺田嘉兵衛高井義兵衛參殿溪雲齋に面會申入候而申達候儀之幕府目付一昨廿三日博多表に蒸氣船より着岸之旨昨日郡奉行手筋より代官元は申達候由ニ付委細之儀之政府より可申越候得共不取敢右之段及内達候間宜御取成被下候様申聞候間御一統様に申上候事
但幕吏着岸之儀内外上下一統へ可申達御沙汰ニ付役場方申達候事

同(四)五日

今夕黒田嘉右衛門堀平右衛門方南水野一同寄宿迄參吳候様申越候間即刻同道參候、去ル廿五日御直書ヲ以被仰出

慶應二年

候寫内々相示し置候事

〔從京都來候探索書等、尊攘錄五卿一件帳〕

太宰府元公卿御直書寫

此度幕府目附渡海之由ニ付而之其末若東歸を促し或之五藩^{之イ}分離を謀り候程共難計候得共前年長州下向之次第固より一身之浮沈を顧^{候イ}ル之譯無之偏ニ天下之興復を計り候。心事不得止事よ^{事イ}一時權道ニ處し候處時勢變遷今日ニ至り候而之宿志盡く沮廢いたし多年尊王攘夷之志。其効驗無之依而者前年之次第茂全く一身の事と相成上奉對 朝廷下萬民ニ向ひ恐惶慚愧之至りニ不堪戀 闕。之情ニおゐてハ申迄も無之候得共今更何之面目有之敢て東歸いたし候哉萬々其存念無之徒ニ分離之儀ニ至り候而之尤其謂無之徒ニ餘命を保ち候存念ニ候へ者如何様とも進退可致候へとも兼々申聞置候次第ニ候上之若右之兩條相迫り候時我等不及申何を茂夫迄と相心得決而不覺悟無之且誠心之千歳二期し從容指揮相待可申候事

寅五月イ

(季知、實美、基修、通禱、隆誦連名)

三月廿六日幕府は長藩末家及び老臣等に對し更に召喚の令を發す

〔大坂廣島返達御用狀扣〕

四月三日青地河口より

藝州表大小監方大坂表大小監に之來翰寫

昨廿五日寺尾清十郎歸藝彼地之治定承候處三末家吉川共ニ病氣且之國內紛々之儀有之御斷申出候積ニ内決いたし候由ニ而此上見當茂無之故大膳父子始期限を定御呼出ニ可相成方ニ御評決今廿六日別紙之通安藝守に御達ニ相成申候間左

様御承知可被成候且右之趣之爲心得討手之面々並軍目附に之御達ニ相成候積ニ御座候得共是之今日之間ニ逢兼申候間兩三日中御達ニ相成候積尤當所に家來差出候家に之當所ニ而御達ニ相成候得共家來罷出不申家ニ之御地ニ而御達ニ相成候外無之故此儀之取調尙近日可申進候且又別紙御呼出安藝守に御達ニ相成候上之諸家ニ而も承知いたし候故京師に手を入居候と之必定堂上方等に内々通達可致候間可相成之前後ニ不相成様早々京師に被仰進橋公會桑より關白殿に早々御通達ニ相成候方御都合可然奉存候間此段伊賀守殿に被仰上候様奉存候尙追而可申進候以上

三月廿六日

向々別紙達書(次に掲けたる毛利大)者來月十五日迄ニ呼出候イ

〔尊攘錄皇武令、從京都來候探索書等〕

右之者に相達候儀有之候間廣島表に可被差出旨先達而相達置候。付若病氣ニ候共押而來月十五日迄ニ罷出候様可被申聞候

三月

毛利大膳家老

穴 戶 備 後 介

毛利大膳長門惣領に相達候旨有之候間來月十五日迄ニ廣島表に可罷出候若病氣ニ候ハ、末家並一門之内名代として可差出候右之段早々罷歸大膳に可申達候

慶應二年

四九七

三月

毛利左京

本家大膳父子長門惣領に申渡旨有之候付先達而其方に相達候通ニ有之廣島表に可罷出旨相達候儀ニ付若病氣ニ候共押而來月十五日迄出藝可致候尤押而難罷出候ハ、重臣之内御請出來候者を可差出候

三月

毛利淡路

同文

毛利讚岐

同文

吉川監物

毛利大膳父子並長門惣領に申渡旨有之候付已下前同

三月

首藤敬助

右三月廿七日廣島表にて御達即刻同所出立之幕府飛脚翌廿八日着坂之事

四月朔日

〔慶應元年八月
京都大坂
坂長崎探 索書〕

四月三日

松平安藝守に

一御城出之御城使御坊主片岡喜伯より手ニ入候書付寫

穴戸備後介始一同御用濟ニ候間當月中當地引拂致歸國候様可被達候

口上覺

松平安藝守

大膳父子並長門惣領等病氣ニ候ハ、末家並吉川監物右名代をも相兼不苦候事

但末家吉川監物等も病氣にて名代差出候儀ニ候ハ、名代の者は本家名代ニハ難相成候事

一大膳父子並長門惣領爲名代差出候ハ、壹人にて相兼候ても不苦候事

一相達候期限ニ至り名代をも不差出候ハ、不相濟候ニ付精々行違無之様猶相心得可申事

右之趣穴戸備後介並此度爲使者彼地に差越候ものに厚申合候様可被致候

三月廿六日

三月廿七日閣老松平宗秀征長準備の令達を關係の幕吏に交付す

〔侯爵細川家書庫箱入文書〕

三月廿七日御達松平伯耆守様御直渡

一藝地より此後之申越之模様ニ寄直ニ御陣營場所見分として御目付新見相模守取調之事まらへ候イ

一前斷御模様ニ寄一役壹人出張之筈御内命之事

一國元許イに人數揃置候様御達ニ相成居候諸侯に出張御達即刻附屬之軍目付出立之事

一先鋒御惣督御出張引續二番隊始御道筋追々出張之事

一諸侯に出張之イ。御達ニ相成候得ハ御中軍於講武所勢揃有之候事

一御道中筋兵糧廻之イし方

一人足遣

慶應二年

一 小荷駄備牛馬

一 右御勘定奉行に取調之儀御内達

一 船路出張之向物體荷物運漕船取調當所町奉行に申達候御達之事申達候

一 御陣營取建諸器械共人足取調候様御作事奉行に御達之事

一 右之稜々其筋々。急速御達之事急速

一 右島原藩飯島市右衛門を借り寫

三月廿九日

首 藤 敬 助

三月廿七日在筑我藩古閑富次等三條實美等に謁して幕吏下向のことを告げ且つ取締に關する五藩打合書を提出す

〔水野溪雲齋在西手記〕

同(三)廿六日

明日各藩一人宛參殿拜謁奉願御直ニ申上候趣有之候段周旋方役場へ申出候事

一 此節幕吏一條ニ付周旋振專爲問合溪雲齋連歌屋へ參り伊集院伊膳所勞ニ付丸田彦十郎へ面會件々相尋曖昧之應答振ニ

付遂論判向伊集院等打合置吳候様申聞明朝可申答との儀ニ付罷歸り客屋ニ而高田平次郎に令面談情實相糺候而直ニ參

殿右之次第申上候處明日各藩より申達候々條書等御逢前手ニ入候様との事ニ付如約諸明朝連歌屋に罷越候管之事

同廿七日

今朝連歌屋相尋候處孰も留守ニ付不得止昨夕之事全虚言と相成候得共無致方次第候事

一 爾後肥後古閑富次肥前愛野忠四郎筑後渡邊吉太夫當藩寺田嘉兵衛高井義兵衛薩州ハ高田病氣ニ付不參拜謁之上此度幕府目付致下

向候趣申上追而書面森寺大和守迄差出候ニ付致評議候處御謹慎と申事之不被爲在候得共當時之御身柄ニ付被爲對朝廷御勤慎を被爲加候御事ニ付兼而下々迄心得方之儀被仰聞置候儀ニ御座候依而之此度幕吏下向と申而殊更ニ取締向被仰出候ニ之不申及譯敷と被存候若も此節更ニ被仰出候而之是迄御不動慎ニ付彼是御取締と申譯ニ相當管藩ニ於而も不被爲濟譯ニハ相當申聞敷哉將又宿外徘徊之事も無譯譯ニ而致遠足節ハ御通し致候足輕御付添も有之事ニ而亦矢張是迄之通ニ而宜かるゝく敷宿外と申候而之人家を離候ハ、直ニ宿外ニ相當御旅館外極近旁と雖も寸歩も往來不相成譯ニ而右之決而被行不申候間篤と御勘考被下度事

一 他方文通面會等於五卿様方ニ之是迄トテモ不被爲在候得共於下々之不得止筋有之候ハ、決而不致共難被申候

一 酒宴之儀ハ勿論當時勢之儀ニ付惣而遊慰ニ流候様之儀無之様トハ兼々御沙汰之事ニ付尙又可被申聞置候事

一 文武之儀之精々御沙汰ニ相成居儀ニ而忠孝ヲ旨トシ研窮致シ候事柄ニ付御目付下向致候ト申候而取止メ候儀之決而有之間敷譯と被存候

一 乘廻之儀

右之通ニ付今更此御書面御受取致ニ不及依而五卿様方にも不及入御覽段大和守諫尾尾一郎と寺田嘉兵衛に申聞候處尙篤と三人申談御答可致候併此書面之各藩共ニ差出候儀ニ付御受取置被下候様ニと申候事ニ付森寺手許ニ預り置候事

但本文相認答書ニ致し彼方書面一同寺田へ森寺と相渡申候尤書取ニ致吳候様申向ケニ仍而也

各藩より差出候書面寫左之通

今般關東より御目附爲御取締御着ニ相成候ニ付左之廉々之通五藩打合仕候事

一 五卿様御出門之事

但御謹慎中之儀ニ付御社頭御參詣之外御遠慮被成度尤御參詣之節之各藩と士分一人宛御付添可申事

一 御家來並隨從之而々宿外徘徊遠慮之事

但御謹慎中之儀ニ付身柄之衆ハ勿論下方迄宿内たゞ共酒宴遠慮之事

一五卿様並御家來隨從之面々他方御文通御而會等御遠慮之事

一五卿様並御家來隨從之面々是迄之場所ニ而御責馬之外御乘廻等御遠慮之事

一御家頼並隨從之面々武藝稽古遠慮之事

一御住居所御門法之事

但出入等彌嚴重ニ相改候事

以上

右半紙折掛

三月晦日本藩探索首藤敬助は松平閑叟起用の爲め幕吏派遣の事及び藝因備三藩長州寛典の斡旋と是に對する幕吏奔走の件等につき報告する所あり

〔侯爵細川家書庫箱入文書〕

三月十四日後聞取書

一 去月廿二日田澤對馬守様松浦越中守様長崎御出之儀ハ實ハ肥前佐賀迄御出ニ相成閑叟侯に將軍様を別段之御用筋有之候を御傳之爲之由右御用と申之今日天下之事斯ク紛亂ニ差迫り居候得ハ迎も老熟之御方萬機之事篤斗御相談無之候而ハ中々治り難ク可有之閑叟侯ハ老練之御方故右之御相談被爲在度被 思召候得共並々之筋を以被仰付候而ハ自然御斷も難計左候へハ幕威も立ち不申別段被爲重候譯ヲ以大小監察被差越候趣ニ御座候然處再應御熱談ニ相成候得共閑叟侯ニも不怪御謙遜之譯ニ而迎も罷出申候而茂何之御役ニも立ち中間敷之御主意ニ而どふか御斷之趣ニ御座候
付紙 本文閑叟侯御召之儀之將軍様を御直書被差出候由右ニ付閑叟侯ニも追々とハ御上坂茂有之哉ニ承り申候絶而御斷と

申之間違之由ニ御座候

三月廿九日夕小倉入江方承ル

一 肥前重役中野敷馬藝州表に出張致居申候處去ル廿日島渡立歸ニ歸國仕候由右閑叟侯御召一條ニ付而之事ニ而ハ無御座哉と風評仕候由

一 小林甚六郎様筑前五卿御取締之爲御出之儀之右五卿ヲ大坂に御連歸ニ相成寺院中ニも被差置追而長防事濟之上屹度御處置之被爲在候趣ニ候へ共先ツ暫ク當所に被差置候趣ニ御座候尤右ニ付而之諸藩護衛之人數も當所迄護送被仰付直ニ大坂ニ而護衛被仰付候趣ニ御座候併異議之諸藩之其儘ニ被差置異議無之藩丈ケニ而護送被仰付候由尤五卿附屬之面々異議ニ及候ハ、直ニ御打捨之御積り之由

右米藩松岡傳十郎方聞取

一 土州藩重役福岡久内上下五拾人ニ而去ル八日着藝致候處島渡立歸ニ國元ニ罷歸り候由如何之御用筋職篤斗分り不申候

由

鑄木千之介新

一 井上備後守様御徒目附鑄木千之介去ル廿二日藝州出帆同廿四日朝着坂ニ付早速鑄木に參り様子相尋申候處長防御呼出遅延ニ付笠間老御踏入被仰渡候御息込ニ御座候處藝州方之中分ニハ今暫御休被下一應是方使者差越し説得致せ罷出候様取計可申との儀ニ付被任其意去ル十七日藝藩土寺尾清十郎と申者を長防に差越同廿五日罷歸申候筈ニ而何レ説得周旋をも仕候と幕府御役々右寺尾歸を御待ニ相成居候内十八九日比俄ニ藝州若侯御上坂被申立其譯之今度之御處置被仰渡候而も末家始難有御請之不申上様子相伺候ニ付頃日方追々建言も仕書取も差出候得共御聞上ケ無之趣ニ付上坂仕諸藩とも嘶合直と將軍様ニも申上今少し寛大之御處置ニ被爲運候様取計度笠間老迄御相談有之候得之閣老ニ一切御不同意ニ而既ニ決議御奏聞迄相濟候上ハ今日ニ至り決而御動搖之無之と相見申候左候得之御上坂ニ而御建言立候而も元方御聞上ケも有之間敷且諸藩へ御打合之儀之當所ニも諸藩出張有之候得之此許ニ而御嘶台可然別段御上坂之儀之御

無用之事ニ而必御止メ被成候様との御返答ニ而候得共決而御聞入無之趣ニ而其後藝州重役も追々大小監察に罷出上坂之儀を頻ニ歎願仕候得共不相替御同意無之ニ付然者届ケ捨ニ而押而御上坂と申譯ニ相成り廿二日朝御暇乞之使者も被差立廿三日御乗組之管之處儀ニ御上坂御見合之由如何之譯ニ而御見合歎其儀之篤斗分り不申趣ニ御座候尤因州備前之方ニも追々藝州より使者往復仕因備方も藝に密書拵送り候趣ニ付因備兩侯も御一同御上坂ニも可相成管之由是以何レ御打止ミニ相成申候趣ニ御座候

一笠間老此節ハいかゞ諸藩カ申立候而も御處置之儀之御異變無之趣之由

一井上様御登坂之御主意ハ藝若侯並因備兩侯御上坂ニ而種々寛大之御處置筋被申立候而も決而 天幕之間御動搖不被爲在候様無御座而ハ閣老御手も難被伸積り天下之一大事と相成可申候間確然御動無之様との事第一次ニハ御踏入ニ而御處置被仰渡之期限並將軍様大旗を被進候御軍配被是之事迄御談合之爲御越し之由ニ御座候

一彦根高田柳川當分少し寛大之説を立居候段前便書取差出置候得共今日ハ最早打止申候由一躰出藝之諸藩十分憤激之趣ニ御座候由

一江戸表ニおゐて當月初御達之趣ニハ外國交易三港ニ而ハ諸藩勝手次第ニ致し不苦併軍艦拵へ候節ハ伺取之上ニ而無之而ハ不被爲叶との御事之由大坂町家ニ而も御達有之勝手次第ニ交易不苦との風評も有之候

一薩州情實益スノ、怪敷事迄ニ而宇治之町家を借り却而下陳之札打チ申候由大坂町家ニ而も大分之金子を借り一ヶ所五万兩計り宛も有之候由左候而怪敷證文拵遣し申候由併一ツも取留メ候事無御座風説迄ニ御座候

一藝州若侯御上坂一旦御見合之儀ハ前條通りニ御座候處猶又再記ニ而去ル廿五日蒸氣船御乗込ニ相成船中ハ閣老に之御届有之管ニ廿四日御内決ニ相成候付彦根留守居日下部内記廿四日藝州出立早打ニ而廿七日着坂直ニ上京仕候由藝州重役辻將曹も同日立ニ而着坂仕候由

右小倉カ聞取

一去ル十五日藝州カ備前に差立候使者名前左之通

御側物頭 徒小姓 早道方
宮内權三郎 黒田益之允 中尾勝太郎 杉本忠之助

右之備前に参り因州ニも打廻り申候由

一備前侯ニも藝州一同御上坂之管ニ被決候由藝若侯蒸氣船ニ而廿五日御立ニ候得之最早御着坂有之管之處于今御着無之ハ定而備前に御立寄ニ而も候哉と風評仕候

一瀧川播磨守様去ル廿六日カ御上京右之今度藝備因上坂有之候而も京師之御説御動搖無之様御取堅メ之爲之由右之通御座候以上

寅三月晦日

首 藤 敬 助

三月某日本藩京師警衛の爲め銃卒三十人を派遣す

〔北岡文庫輯録〕

〔警衛出兵人數從元治元年 至明治元年二月 阪本彦衛調の内〕

三月

一京地爲警衛銃卒三十人隊長引廻司令士とも差登
但此後年々兩度ニ交代

四月二日幕府長藩に令し來廿一日を期して藩主以下の出藝を促す是日宍戸備後助召喚延期を請願す

〔御國京 都大坂 返 達 御 用 狀 扣〕

〔四月七日日本藩へ令達〕

元治二年正月 慶應二年十二月迄

細川越中守に

毛利大膳父子御裁許之儀ニ付末家毛利左京毛利淡路毛利讃岐並吉川監物大膳家老穴戸備前毛利筑前廣島表に罷出候様先達而相達候處いまた出藝之模様も不相分候付而者猶又別紙之通安藝守を以相達候間此段爲心得相達候(別紙發令は四月二日也)

毛利大膳家老

穴戸備後介

毛利大膳毛利長門並長門惣領興丸に相達候儀有之候間來ル二十一日迄に廣島表に可罷出候若病氣候ハ、末家並一門之内爲名代可指出候右之段早々罷歸大膳始に可申達候

四月

毛利左京

毛利淡路

毛利讃岐

吉川監物

本家大膳父子並長門惣領に申渡旨有之候付先達而其方に相達候儀有之廣島表に可罷出旨相達置候儀ニ付若病氣候とも押而來ル二十一日迄可被致出藝候尤押而も難罷出候ハ、重臣之内壹人可被差出候

四月

毛利大膳に

毛利大膳家老

穴戸備前

毛利筑前

右之者共に相達候儀有之候間廣島表に可差出旨相達置候處若病氣候とも押而來ル二十一日迄に罷出候様可被申付候

四月

別紙相達候口達之覺期限ニ至り万一名代等も不差出候ハ、御裁許違背より茂其罪重く候ニ付速ニ御討入ニ相成候間兼而其心得ニ而差圖相待候様可被致候

四月

慶應元年八月
京都大坂 探 索 書

大坂ニ而財津民助手ニ入候書付寫

四月二日御達ニ相成出藝同廿一日迄期限被仰渡候付其段國表に通し候様も御沙汰相成候彌切迫ニ相成候間先左之通

藝藩迄書面差出候由

内々演說

今日御使者を以御達候旨謹而奉畏候然處主人父子並興丸義被仰達候旨有之當月廿一日迄に御藩に可罷在との御儀ニ御座候得共重大之事件ニ付本末打合尙今年以來追々申立之通士民一統無餘儀情實も有之説諭方等手数相掛り候之必然ニ候得共主人父子興丸ハ勿論名代之者とても急速罷出候儀如何可有御座哉就而之廿一日迄に御藩に罷出候儀万々無思束候半と只管心痛罷在候何卒右期限少々御日延之儀奉願度候間程克御執成可被下候様奉願候以上

四月二日

穴戸備後介

内々演說

去冬大小監察御役々様方御下向御尋し付而之衷情底意無腹臆申出候様との御事ニ付巨細申上候處いつとも被聞召届御

慶應二年

落意御承知ニ茂相成大膳父子情實ともニ明瞭徹上仕候處と雖有奉存候恐ふから大小監察御役々様方之天朝幕府之御耳目ニ被爲代重大之事件御承知之勅命臺旨を被爲蒙達ニ御下向ニ候得之素より公明正大至當之御耳目を以御見聞被爲在候事ハ申上候迄も無之是非善惡忠邪曲直御洞察可被爲在候處一旦右御役々様方ニおゐて已ニ巨細被聞召届父子誠意國情實とも御落意御承知との御事ニ候得共此餘御沙汰之筋假令於天朝幕府御裁斷被爲在候共肝要御耳目ニ被爲代御直ニ御見聞被成下候御役々様方御落意御承知之筋ニ相違仕間敷との奉存候其處を以國內を茂精々鎮撫相加之罷在候處此度之御模様振ニ而ハ何か國國意外之御沙汰ニも可相成哉と申觸し候ものも有之元より未發之儀眞偽之不明ニ候得とも去冬父子誠意より國國臣子一統無餘儀次第等苦心焦慮之筋巨細申上置候處右之筋いまた徹上仕兼候ニ而も可有之哉尙又苦心焦慮罷在億万一上下之情實翻調よりして不容易皇國內大小關係之次第ニ茂立至候而之迷惑幾千萬之儀ニ候得之何卒此度御下向御役々様方格別之譯を以今一應私共被召出とくと情實被聞召届被下候様相成間敷哉然ル上尙も被聞召分かつた儀茂候ハ、万々不得止義ニ付不及是非ニ次第令覺悟候外無之と苦慮之餘り此段申上試候間御採用被成下候得之万々雖有奉存候此段不惡御取計被下度候事

四月二日

右御付札之寫

別紙兩通申立候趣之有之候得共御都合茂有之候ニ付何れも相違候趣早々取計候様盡力可致候

松平安藝守に

右之通早速御下ニ相成申候(以下は四月四日
日の條り出つ)

四月二日幕府は一昨年江戸長藩邸沒收に際し監禁せし所の長藩士及ひ其家族を還付すへきにつき收受者を廣島に出すへしとの旨を穴戸備後助に達す

〔京和大探 索書〕
〔坂長崎 索書〕

穴戸備後助

今般毛利大膳父子御裁許相違候付てハ一昨子の年於江戸表御預ニ相成居候大膳並末家々來妻子共廣島表おひて引渡相成候付到着次第猶可相違候間受取之者差出候様可致候此段大膳始に可相違候以上

四月

四月二日在京本藩重臣三宅藤右衛門は會薩二藩を離間せんとする者あるを以て交代の我藩兵を暫く抑留せんことを藩政府に稟議す

〔尊攘録自筆狀〕

(前略) 近來會津と薩州を間隔之流言有之薩々ハ會を押し會より薩之九門御堅を御免杯と之事ニ而決而左様之事ニ無之全ク之流言ニ候得共宮様も御懸念小藩杯之内も懸念之様子ニ相聞候間今度御長柄組と交代之御郡筒を暫ク懸留ニ相成度左候ハ、人氣茂治り可申との事御留守居より内意有之今十日十五日もいたし候ハ、右様之事も相止可申少々之御出方ニ茂懸り候得共其方可然と御奉行共咄合申候間左様御聞置可被下候以上

四月二日

三宅藤右衛門

長岡帶刀殿

外惣連名

四月四日長藩領内に屯集せる長兵の一部隊脱走す

〔京和大探 索書〕
〔坂長崎 索書〕

慶應元年八月

五〇九

大坂ニ而財津民助手ニ入候書付寫(前文は四月二日の條にあり)

一 備後介始去ル四日藝地發足仕歸國ニ相成申候

一 赤川又太郎儀ハ去ル六日當地出立歸國仕候

一 去ル七日頃藝藩寺尾生十郎外ニ壹人山口表に罷越申候全ク早々出藝いたし候様説得ニ參り候趣並格別盡力いたし候得共最早御基本相動不申世子之御上坂一條より之仕方申通シ外ニ仕方無之段茂申聞候儀左候得之彼まニも義相立候旁以罷越候趣ニ御座候

當月十日右長藩赤川又太郎歸國途中より引歸し當藩津田三郎兵衛に面會を乞ひ左之通届之寫

大膳領内南部屯集之内百四五拾人計當月四日夜器械相携令脱走候付万一如何様之所業可致哉茂難計早速行衛探索召捕方手配嚴重可申付置候畢竟右之旨趣如何之次第哉之儘ニ不相分候得共追々も申出置候通り國內情實ニ付而之鎮撫説得方苦慮不一ト方候處一昨冬以來之次第も有之且昨冬主人父子多年之誠意士民一統之情實共巨細被聞召被下候而之最早平常之御沙汰を茂可被仰出候事トのミ圖國渴望仕候處今般御達振ニ而之何歟不取留道路之風説をも傳聞々々し乍恐圖國意外之御沙汰振ニも可立至哉と疑惑之餘り憂憤ニ不堪より差起り候ニ而も可有之哉何とも不相濟次第ニ付猶國元ハ勿論捕方手配等急速嚴重申付候得共他國に罷出候儀も難計爲念不取敢致御達置候億万一貴國に罷越候ハ、被召捕被下候様致御頼候此段幕府向にも宜敷御届被成置被下候様仕度致御頼候以上

四月イ

毛利大膳イ

家

老

中イ

右之藝藩留守居植田清人を以御届申上候趣本書共唐津内用方より爲知吳申候

四月五日長藩使節穴戸備後助等廣島を發して歸國の途に就く

〔慶應二丙寅年 尊攘録探索書〕

慶應二寅四月(抄略)

一 今般改而大膳父子並長門嫡子興丸昨年出生之由申唱候趣 當月廿一日出藝いゝ候様御呼出ニ相成候若病氣ニ候ハ、末家之内名代として罷出候様との趣右速ニ罷出不申候ハ、直ニ御取懸之趣ニ而右御達書御渡ニ相成申候

但毛利家相續右興丸に被仰渡ニ相成候様内願之由長藩曰毛利家は迄本妻ニ出生之男子無之若哉本妻ニ男子出生候ハ、祖先之再來と可存旨兼而家訓之旨申唱候由是等巨細之儀藝藩内談ニ而もいゝ候哉之由

一 右ニ付穴戸備後介當五日藝地發足引取候四家ハ罷出候使者も追々歸長いゝ候由

但備後介實名ハ山形半藏又小助とも名乗

一 關東ニ御召捕ニ相成居候長藩此度御返しニ相成候由(下略)

右之承り込候儘申上候以上

四月七日(誰の書ふるか不明)

四月六日朝幕離間の流言類なるを以て一橋慶喜松平容保等參内して朝議の動搖なからんことを奏上す

〔慶應二丙寅年 尊攘録自筆狀〕

去ル六日關白様宮様奉初國事懸之堂上方武家橋公會津侯桑名侯惣參 内ニ而武家方ハ被仰上候趣ニハ此節防長御處置笠閣老廣島表に被差越置万事御委任ニ候得共世上流言も有之深懸念有之候由於京地之 朝廷之御模様近ク奉伺候ニ付懸念之事も無之候得共百里外有之候而懸念尤ニ而今日參 内御動搖等ハ無之候得共爲念御伺有之別而御再 勅申唱ハ偽書を廣島に取散候由ニ而偽書御差出ニ相成候武家御退出終而於 玉座前御 朝議有之殿下様宮様武家方ハ被仰上候趣被仰上候處 玉音ニ而此際ニ成動搖有之候而之愈以相濟不申無懸念處置仕候様被仰出候付近衛内府様御尤ニ而

此當時ニ至勤拵仕候而相成不申結局ニ至候様被仰上 朝議御一決ニ相成候殿下様御再 勅杯之偽書有之筈ニ而無之其子細を之此節長州處置ニ付而之惣參 内之一度有之候付再 勅申事絶而無之事ニ候段被仰上候又武家被召出右之趣被仰出早々惣御下之由ニ承申候事

四月十日

淺井新九郎

慶應二丙寅也
四月七日幕府三兵訓練場を横濱に設くることに確定せし由を報する者あり

〔風聞書〕

神奈川來狀

一筆啓上仕候下略然之先達而御達奉申上候三兵訓練場此節程ヶ谷宿之内芝生村横濱堅貳千五百間横千間ニ地所御取極相成候よし且本牧續き北方伊勢山ニ申所細樹木伐拂貳万貳千貳百坪各國遊覽所ニ御貸渡之儀御應接相濟候段承知仕候猶本町壹丁目渡船場に長三拾間余巾七間之波戸場佛公使上陸場ニ此節石垣取懸り入用之儀之佛國より差出候趣承り込申候其外何等相變義も無御座候此段申上候以上

四月七日

御七里役

四月八日幕府更に天保度吹立貳米金の通用停止を達す

〔慶應二年正月上季
御同席觸寫並大目付様御廻狀寫扣〕

水野和泉守殿松平周防守殿御渡候御書付寫二通(内一通今探らず)相達候間被得其意云々

四月八日

大目付

細川越中守殿

(外八名)
右留守居

和泉守殿御渡

大目付に

天保度吹立候貳米金の儀追而通用停止可被仰出候間所持之者之引替可差出旨去々子四月中相觸置候得共兎角引替方速ニいゝし候付向後世上通用停止あるべく候就而之引替御手當是迄百匁ニ付金三拾兩之處六拾匁被下候間所持之者之早々引替可申候右様格別之増歩被下候上ハ速ニ引替可申ハ勿論之儀若此上利慾ニ迷ひ持貯候賦買入等々いゝし候族於有之之可爲曲事候

右之趣御料之御代官私領之領主地頭より不洩様可被相觸候

右之趣可被相觸候

四月

四月九日在藝本藩士赤尾嘉兵衛後の内藤備十郎城市郎は長藩主父子以下召喚に關する事情及び穴戸備後助歸國當時の狀況等を探知して之を本藩當局に報告す

〔慶應二丙寅年
尊攘録探索書〕

慶應二年四月九日赤尾城廣しまの之報告

昨今承繕候儘早卒亂筆ニ相認メ誤落等御推覺御付紙御座候外ハ聞留候次第其儘書留虚實も一々如何御推考可被下候先度藝州方御使者を以家來末家等之内御呼出被仰達置候通ニ而御座候處遂ニ難罷出趣ニ而先月半比よりハ延引之末如何と次第ニ衆説區々ニ有之然處閣老如何之思召歟尙大膳父子並興丸とて昨年から出生之長門嫡子御呼出之趣此節之穴戸備後之介ニ被仰達來ル十五日迄ニ罷出候様先月廿六日比被仰渡答ニ廿三日之比御決着ニ相成候由之處藝州より夫ニ而之餘り日間茂無之責而三十日程之期限を以被仰出候様申立ニ相成候由之處御承知無之内當御藩ニ而野村帶刀杯是迄

專周旋いし居候末之儀ニ而も有之哉岡山杯追々御使者之往復も有之先月廿三日比當世子紀伊守様俄ニ御上坂被遊度との御都合ニ相成右被仰立之御軍約御伺且此節之事件外御伺ニ相成候筋被爲在候との事故當節柄御上坂と申而之人氣も動揺ニおよび可申不可然段閣老初御役々御留ニ相成候得共御承知無之右ニ付閣老が野村帶刀を茂被召出御上坂之儀子細御尋ニ相成候處御返答不分明ニ而存不申趣申上候間大臣として右等之儀不存譯も有之間敷主人存念ハ承り届善惡ニ付而之諫言を茂加へ可申職掌ニ御返答之趣不束ニ閣老被思召不束とか何と申當時相愼罷在候様との事ニ而引入居申候様子ニ御座候其節迄ハ右御上坂之儀閣老が御内分ニ而御留ニ茂相成候得とも一圓御承引無之既ニ明日ニ茂御出立と去ル廿五日六日御都合ニ付最早此上之被成方も無之とて閣老當時御役所前を以屹と御差留ニ相成申候よし右之通ニ至り候迄何を之向も御留申あくは是非御上坂と有之ハ元々皇武共ニ御決議御一躰之事故外御伺被仰上候得共何を御内存之事體ニ付而被爲在儀と相見ゆれハ御上坂茂可然左候ハ京攝問之儀直ニ御見聞却而可然杯とも密々御役々之申候程之事ニ御座候由誠ニ此砌大混雜ニ而有之處何となく閣老が被仰出も當月ニ相延然處矢張廿一日之期限ニ候得之御日延等茂無之御見切茂有之事と夫々して難説も過半消備後之介兩通之願茂被爲叶かたく強而御付紙奉願候間御付札ニ相成至急ニ國許に被差返申候由尤餘程引取兼候趣ニ相聞内輪藝藩よりも心配引取せ申候由ニ而一昨七日迄ニ大略引拂申候

- 一 右ニ付而之此末廿日比之如何相成可申哉又か日延茂何程ニ可有之と近日より少々宛御人數茂藝防之境尾瀬川邊迄操出ニ相成候方敷と御歩目付鶴崎ニ下着ニ相成居候脇屋省輔之子ニ而同苗辰太郎杯者陸軍まらへ役ニ而當所之手配專ニ御座候段昨日彼方ニ参り直ニ承り申候
- 一 三日比大坂が尙歩兵罷下り申候由宿割之者承申候
- 一 右同日ニ小監新見相模守と申仁下着ニ相成候ハ此許御所置御催促之由然處最早御乗出ニ相成居右之趣言上ニ翌四日小監岡部三右衛門と申仁出立船路上坂ニ相成申候

一 石坂武兵衛竊ニ上坂之儀之小倉藩田中孫兵衛極密唐津重役承申候趣ニハ先年江戶ニ長州人本家末家之家來貳三百人茂入牢之躰ニ被差置候者を此許ニ御呼取之爲ニ罷越候趣ニ相聞へ宿札等茂其儘ニ而極内密之事相聞申候

一 是等之處が相考申候得之御付紙ニ御都合茂有之事ニ付と申ハ右之通之稜茂有之第一興丸を茂御呼出と申間ニ意味御座候敷と愚考仕候事ニ御座候

一 一昨夕藝藩櫻井何某と申仁大分裝ニ而西目ニ下り申候趣ニ見受申候間胸勢ニ尋申候處長州下り之由申候右之大膳父子並興丸を迎之爲とも申候得共備後介と何そつかひ置たる事も可有之敷此中之世子上坂之一儀且之日延等之事專藝周旋末ニ而疑ハ敷此節斷然と被仰出たる事故兼而之末口を括り申候都合共ニ而之無之哉大垣小倉杯も甚不審實情相分不申寺尾生十郎も近日居不申も長州へ罷下り候者ともニ而之無之哉如何昨今着之事ニ而得斗探り得不申候

一 先達而之肥前之長野數馬長森傳四郎土州福岡九内も御呼出ニ罷出居候由之處此中いつまも歸國仕尙土州よりハ昨今ニ出藝仕候管之由大垣留守居井田五藏承り申候

一 先ニ認メ候新見相模守と申之宿札茂休と有之近々引取之由極密承り申候處中國を陸路上坂ニ相成候由是ハ御出馬も可被爲在御模様ニ而御道筋宿驛等御見繕御調へなりニ上坂之趣ニ竊ニ小倉田中承候段申間候右之稜々見聞仕候儘相認メ承違氣取違も可有御座と有儘愚筆を以申上候間御推考御用捨之程奉願候以上

四月九日 赤尾嘉兵衛 市郎

四月某日本藩元田八右衛門は去冬藩主慶順の幕府に建白せし旨趣を以て再び進言し其採否によりて進退を決すへき旨を藩政府に建言す

〔尊攘録上書類〕

方今之時體ニ付而者去冬御建白被爲在天下之賢才御登用公共之御政道被遊候様との御國議被仰立置候處其後天下之御運歩竊ニ奉仰觀候ニ少く御難陟之御沙汰も被爲在候得共内外之賢才未御登用ニ至り申さず衆議公論御採納も有之候得共沈寒之諸藩却而多有之候得者去冬之御建白御聽納被遊候とハ難申上乍恐全幕府御一府之御政道と奉伺候得者此儘ニ而天下之御政道相立人心感向仕儀之萬々以無之御議ニ而實ニ危急切迫之御時體と奉恐察候惣し而御政道之儀之小臣之可奉私議ニ者無御座候得共乍恐公私之ニツニ可有之奉存上候我恩を施し我威を立天下我ニ服せん事を欲し候ハ則私ニ而人心忽忿怨を生し天下亂ニ至り申候天下之賢才を擧天下之公論を用天下之人情を得而天下と共ニ天下を治んと欲し候ハ則公ニ而人心忽感悅致し天下治り申候人君之御一心公ニ向ひ私ニ向ふとの堺ニ而天下之治亂相決申候得之方今幕府之御政道公私之間如何と乍恐御省察可被遊御儀と奉存上候近世之御盛時を奉歴觀候ニ文久之初度ニ勝り候御時世之有御座間敷然處同時御拔擢之一橋公會津侯板倉閣老等二三之御賢能之當時も御在位ニ御座候得共春嶽公大久保勝子等之御英賢之未御沈寒ニ被爲在候得之乍恐賢才之御登用御公道と之難申上候列藩有功之御名賢閣叟公大隅公空堂公宇和島老侯等其他之諸侯御一人も御登阪も無之求言之御沙汰も不被爲在候得之乍恐天下之公論御採用と之難申上候左候得之幕府御一府之御政道ニ而乍恐是即我恩威を以て天下を服せられんととの御私ニ被爲出候得之決而天下之服從之無之御儀と奉存上候在昔織田右府之雄威を以テすら諸將を忌疾之心より終ニ明智氏之弑逆を招かば豊臣太閤之英邁を以テモら意を屈して東照公ニ信任有之候故終ニ能一代之業を保たれ申たる儀ニ御座候況や方今太平之衰季雄大之列藩誠心公道を以御親信不被爲在或之一侯伯を御疑被爲遊或一強夫を御忌被爲遊候様ニ而天下不服沸亂之基と奉存上候當時長州之御刑典被仰渡候付而も遷延數旬を被移候次第長州不敬之不及申儀ニ候得共朝威幕綱之御衰弱ニおひてハ如何可申上候半哉御綱紀上ニ御張被成候時ニ之暴徒犯闕之罪を御正し被遊候半ニハ一封之御教書ニ而可奉畏服候事ニ數道兵を被徵數月を被爲移候而も御刑典難被仰渡次第之乍恐先其本ニ御反省被爲在度御儀ニ奉存上候大禹師を班して有苗格り漢文己を卑んて南越服し候事聖賢至公至誠之心瞭然たる儀ニ而後主之儀型し給ふべき處と奉存上候仰願願曰者幕府

今日御一府之御私見之翻然御改易被遊天下と共ニ天下を治るの御心取ニ而是迄之儀悉皆己を罪せらるゝの御誠心ニ御反り被遊暴徒犯闕之次第も幕府之御不行届と被思召上闕下掃攘之功者越薩會桑諸藩忠義之致ス處於幕府之何之功可有之哉と功を諸藩ニ被與而罪を己ニ御引被遊御若年之御身天下之大任御心元なく被思召上との畏敬之御心より列藩諸侯ニ御頼思召との御教書を被下一度ニ應せすんハ二度ニ及ひ三度四度ニ及んで諸侯を御召被遊春嶽公大久保勝子等之御英賢を速ニ御登用ニ而内閣ニ列し被置橋公會桑諸閣老と共ニ同心一和列藩之諸名侯を御引受被成將軍家之御膝前ニおひて天下之御政道を御衆議被成征長之師を被班忌薩之言を被斥天下と御更始被遊公論正義を以關白殿下宮様方へ御直達ニ相成 叡慮を奉し而天下ニ令せられ候半ニ天下一民も感服不仕者ハ有御座間敷如何成暴徒激夫も有苗之格り南越之服もるが如く感激奮興却而幕府之御先鋒となりて五大洲の猖獗を壓倒仕らんと自ら振ひ申さん事何之御疑歟不可有御座と奉存上候如此時勢ニ至り候得之一長州之御刑典も思召之儘ニ而彼より肉袒拜謝可仕今日之御手間取之御辛勞とハ晝夜雲泥之遠不待論議と奉存上候右様之御條理を以此節十分之御忠告御盡言是を以乍恐皇國幕府に之御奉公と可被遊候得之万一御採納不被遊列藩も御召なく賢才も御用なく強而御一手之御征伐等被仰出候節ニ之乍恐御奉公も先是限と可被思召上候得之即號泣而止靜然として御一國を御固メ被遊後來御盡力之期を御待可被遊外無御座御儀と奉存上候幕府之御衰運を奉伺候而之逆も不可救御一國を御固メ可然と云少ク御氣勢を奉伺候得之承順仕候様御座候而之御國之爲ニ謀り候ニ者稍忠ニ似候得共泰勝尊公之御心ニ之叶申間敷輕薄之至と奉存上候幕府之御命令正ニ出候ハ、天下背き候とも御輔翼可被遊若非道ニ出候ハ、御一藩を以テも御諫爭決而御追從被遊間敷只々御一國正道瀝誠を以挺然御持立被遊候儀 天朝幕府に之御忠節天下萬世ニ被立ゆへんニ而乍恐泰勝尊公之御神慮ニ御叶被遊候御儀と奉存上候恐惶謹言

慶應二年 四月

元田 八 右衛門 永孚

別紙御建白之御趣意之乍恐端的明白之御書取を以被仰立候儀と奉存上候處近日御封書到來之由ニ而長州之御處置次第

慶應二年

五一七

大旗を御進メ可被遊候ニ付諸道之兵御徵發之御沙汰御座候山益以切迫之御指揮御國ニおひて如何御受被遊候而至當を可被爲得候半哉乍恐右根本之御建白一日も御急務ニ而右建白御採納ニ而賢才御登用列藩御召等之筋ニ被爲在候ハ、早速ニ御人數を可被差出若此儘之御征伐ニ被爲在候ハ、列藩決而奮發仕間敷御國ニおひても御受難被成段乾度被仰立御建白御採納有無を以出兵之御決定被爲在候ハ、御條理相立可申と奉存上候賢才御登用列藩御信親天下公共之御政道ニ相成度儀ト根本之御建白ニ御座候處御軍事ニ差臨ミ候而之猶更列藩諸將へ御信任御謀慮一定同心合力ニ而無御座候而之決而御征伐之道理ニ無御座往事太閣天下之威力を以北條氏之一城を御征伐有之候ニも東照公腹心之御參謀其他諸名將御選任有之候得之今日猶更諸名公御登用將士一心御謀略先定其上ニ而大旗を御進不被遊候而之諸道之士氣一致不仕決而御征伐之道を被爲得間敷於御國何分御受難被爲在段此節猶一ト際被仰立度御儀ニ奉存上候且又右御封書之九州一般之儀と奉存上候得之御國議之次第之御隣藩ニも被仰向候而諸藩之舉動をも御探索被爲在度御儀ニ奉存上候敬白

四月

四月十日日本藩青地源右衛門淺井新九郎閣老板倉勝靜に見えて九州方面征長總督任命の件及び事半途にして將軍の東歸あるへからざる所以を建言す

〔從京都來候探索書等〕

四月十日於大坂板倉様に拜調奉伺候書取左之通

一當月廿一日迄期限を以長州に廣島表に罷出候様御達有之候處若罷出不申候ハ、直ニ御征伐ニ相成候様御内決之由ニ候ハ、諸手攻口々々懸候儀之猶御差圖有之候哉奉伺候處御答共儀未タ此ト相分兼候得共一番手之出張ケ所ハ人數差出置候處打入之儀之御沙汰可有之候ニ番手應援等出張之儀も御差圖可有之様七日ニ相達候趣之右之通ニ被存候併些相分兼

候所有之一兩日中ニ之相分可申左候ハ、内分兩人之内ニおらせ可申段被仰聞候事

一九州地攻口御惣督此節ハ無之候様奉伺居候以前ハ越前様小倉御滯陣有之諸手御差圖を被受萬端都合宜敷有之此節ハ如何之御模様ニ被爲在候哉奉伺候處御答此節之別段御惣督之未タ被仰付ハ無之候得共九州攻口之儀之 此方様御先鋒被仰付置候付諸手之指揮も被爲在候儀ト御沙汰ニ付於九州地之諸手家々茂多有之候付大家御親藩ニ而茂御惣督無之候而ハ議論も一定成兼且攻懸之時分茂御都合宜敷無之已前越前様御惣督有之候付此節茂同様ニ何方様ニ而も御惣督有之度段利害得失懇切ニ申上候處板倉様御納得之御様子ニ而篤斗勘考ハ、可申様被仰聞候事

四月十日

青地源右衛門
淺井新九郎

此節御國許ニ被仰付越候 將軍様御在坂之儀爲伺板倉様に兩人一同罷出奉伺候書取左之通

一此節長州模様ニ寄 御進發も被爲在候御内決之砌ニ事新ニ奉伺候様有之候得共根本元事之初發年來之儀ニ付先久敷 御在留被爲在萬機御一新時體鎮撫いたし候様被爲在度若長州御事濟候ハ、御成績被 奏候たま 御上洛之必然之儀ニ奉存候併萬々一御東歸等之事ニも相成候ハ、已成之事も瓦解之勢ニ罷成候而誠ニ残念至極御國許上下共ニ日夜懸念罷在候由ニ而此度改而奉伺候様被 仰付越候趣ニ付如何之御模様ニ有之候哉奉伺候、御答勿論平素御同席且御役方御定議有之候付御國許ニも御懸念無之様申上越候様との御沙汰有之 御上ニ茂深尊意被爲在決而御東歸と申儀ハ無之尤被奏御成効候後時體岐ト鎮靜迄ハ 御滞在有之候得共京城華城之界ハ豫御講定六ヶ敷御都合可然方ハ 御在留有之候様御内決ニ相成候御國元おるて右等之趣迄御配意被爲在於徳川家御厚意之段御感服御登城之上 御上ニ茂篤斗可申上置旨被仰聞且又右等之儀旗下等ニ之指揮有之御配意有之候間極内分被仰聞候由御沙汰有之候事

慶應二年

五一九

四月十日

青地源右衛門
淺井新九郎

四月十日在坂本藩監察河喜多助三郎薩藩の行動を青地源右衛門に報す

〔慶應二丙寅年
尊攘録自筆狀〕

慶應二ノ四月十日大坂詰御目附河喜多青地へ之書翰

薩藩事情聞籍方之儀此許御出立前御内話之通ニ付差寄沖取上荷船之者手に承り候ハ、荒方相分り可申幸鹽飽屋直一兼而廻船方御用承右ニ付其筋を以内々承繕せ異船去留之様子等之粗相分り申候處尙又昨夕兵庫より早船至着右乗組之者より直一手許迄承込候儀も有之彼是之趣則左之通

異國船先日頃安治川沖合ニ拾壹艘碇泊之處追々出帆英國船壹艘丈ケ相殘居其外兵庫ニ七艘相滯於同所各國人追々上陸等いたし居候由之處開港場所等爲取極專ら一昨日來又々安治川沖手に四艘乘戻り都合五艘ニ相成兵庫表ニ之三艘滯泊いたし居候由右之英佛蘭ニアメリカ、フロスイス之ミニストルも相交り居候由

一薩人内通之様子等之暇も相分り不申尤同藩蒸氣船兵庫迄筑前米積登表向商米之由申觸候得共賣捌候躰之無之右米ハ境浦且伊丹邊に差送候様子何共落着兼候取計ニ相見候趣

一薩大隅侯此節之御供凡貳千五百人計之由
右之通直一申出候尤兵庫邊ニおるても薩藩之取計方之大ニ不審ニ存居候由之趣を茂申居候尙手付物書共外方承込候趣よてハ隅州侯此節之御供者雜人ハ無之都而帶刀以上之様子ニ相聞申候將又一昨日之小欄檻位之川船ニ而彼方御門前々川下之様ニ御下ニ相成申候處無御乘戻御歸邸其日之風強く有之候付沖合に御乗出し六ヶ數御引返しニ相成候共ニ之有之間敷哉と不審いたし居候處跡達而承り候へ之細御引せ御覽ニ相成候事之由併是も細引押立ニ而有之たる哉も

難計候得共暇も見留候儀無之候付事實之相分兼申候御同候も明朝之未明ニ御出立御上京之管之由ニ而候被仰聞置候末ニ付右之段迄不取敢得御意申候何方に茂別段不申達候間承知ニ可相成向々には者宜被及御通致可被下候以上

四月十日

河喜多助三郎

青地源右衛門 殿

四月十日長藩の脱走兵備中倉敷の幕府代官所を襲ひ火を放ちて之を焼く

〔慶應元年八月
京都大坂
坂長崎探 素書〕

大坂ニ而財津民助手ニ入候書付寫(前文は四月四日の條にあり)

同(四)十日夜九ツ時備中之國倉敷と申所之百姓休之者當地に注進仕候大意

一四月九日之夜九時頃櫻井久之助様支配所備中倉敷之陣屋に長州南奇隊之者百四五十人亂入炮器を以押寄小役人始男子之分ハ切捨女子ハ立さらせ陣屋之焼拂候趣猶笠岡陣屋に押寄可申手管之趣ニ付隣國備前福山兩藩に出勢之段御頼申参り候由尤久之助様ハ藝地御用方被爲濟途中ニおるて被及承候位ニ而別條之無之との趣ニ御座候

右之届面之儀并日合之處を以相伺候ハ、全計略之御座候事と相見申候第一ハ公邊之御基本相立候付而之廿一日出藝之期限茂被仰出切迫ニ相成種々演舌も仕候得共御採用も無御座依而右暴發仕せ候而人心を動かさせ右之期限を今一應延引爲仕候策歟と諸藩茂見込ニ御座候尤米金を奪ひ取候事勿論之儀ニ御座候最早追々防長國內正激ニツニ相成るゝり候趣ニ御座候

唐津多賀右金治申聞候次第

先達而藝之世子御上坂一條ニ付而ハ右之限期も速ニ被仰出候處相發し又々此度之脱走之暴發ニ就而之諸手之因循を引立右廿一日之期限ニ奉命不仕節ハ又々斷然と相成可申旁以至極都合好キ事ニ御座候段申聞候

慶應二年

五二一

一右長藩赤川又太郎同十一日藝地發足歸國仕候(四月十二日の條につづく)

〔全書〕

浪士始末日記

四月十日曉備中綱海より上陸倉敷御代官所櫻井久之助殿陣屋燒拂五半時同所本町觀瀧寺に參
 十日未中刻同所引拂井山寶福寺に入同夜蔭田より引拂應接有之
 十一日朝内蔭田松山庭瀬人數寺近邊警衛
 十二日蔭田再應接夜中突衆より陣取夫より妹尾玉島燒拂之説不詳
 十三日曉八時、小寺山口屯集夫より淺尾台戰燒拂同淺尾ニ休息門田ニ而備前出張人ト應接
 十四日四半時比同所引拂川邊堤通倉敷之方に立去夕方連島より乘船

〔慶應二年 尊攘錄探索書〕

寅四月十一日備中矢掛ヶ詰紀州七里役黒田啓次郎口達

一昨十日申ノ上刻貳印疊懸りを以河邊驛役人共々指出候別紙御達申上置見切見留ニ早追ニ而倉鋪近邊迄罷出候心組ニ而河邊宿迄罷越候處最早浪士共左ニ一書を以御達申上候通同所發足ニ相成候付惣社と申所迄見切ニ罷越委細見留有躰御達申上候
 一倉鋪陣屋放火亂妨刻限之曉之事陣屋東南貳三丁隔候小高ヶ所ニ長蓮寺ト禪宗夫々大筒打懸候而燒拂候事尤長屋門之其儘残り申候町家ハ少しも構ひ無之何角諸品紙細引徳利とり金杯を多分相求メ代銀ハ余慶ニ取らせ過銀杯ハ決而受取不申由ニ御座候

一浪士之者何をも刻羽織袴細を着し鐵炮槍身を携へ平人ニ之聊構ひ不申趣刻羽織品只口印何をもぬくゞん位之衣類御座候陣屋ニ而即死之者貳十人程有之候全く御代官櫻井久之助殿に申分有之趣右同人一昨夜倉敷に着を見込罷越候處左も無之見込違之由ニ御座候

一人數全五十人乗位ヒ船六艘倉鋪方貳里計り南北ニ當り連島ト申處に着船上陸之分ハ三百人ト申事ニ而候得共百五十人計り倉鋪に出候由長持四棒玉簾持其外諸荷物人數五十人爲持出夫々ニ買上ケ中ニハ壹歩銀貳朱金を買ひ候ものも有之候事誠ニ人心を感し候事ニ御座候

一同所陣屋後ニ牢屋あり入牢之者夫々出牢爲致刺髪家來ニ召連候趣
 一陣屋燒拂之上倉鋪領五六丁東南之方小高ヶ所ニ觀龍寺と申寺に引移り同處之町人長たる大橋平右衛門水澤七郎兵衛と申ものへ言付支度致せ相運候事相違も無御座候其上兩人を乘馬貳騎爲出十一日七時比倉敷出立水分峠と申備前領ヲ相越同領山手三軒家に出是方往還筋同處ニおゐて兵糧支度之上松山領分惣社と申所家數千軒餘之土地行列躰ニ而打通り夫々淺尾蔭田相模守殿高一萬石右役場に浪士何をも提灯ヲ携へ罷越表門方聲ヲ掛ケ頼トあれ共陣屋內無言ニ而提灯等ヲも打消し座敷向暗くして構へ居たる由浪士共謀有候ヲ察し同所方五六丁引行テ井山寶龍寺ト申處に夫々構へ休息候由

一人數全百七拾五人餘松山板倉伊賀守殿人數鐵炮組貳百人餘日羽村と申所迄相固メ差出し大騒キ之よし岡田伊東播磨守殿是も江戸留守備前領ニハ一向手當も無之趣ニ候尤山手三軒家通行之節浪士とも土地尋候付備前領と人足之者答候處貝鉦ヲ止メ候趣ニ御座候今日午ノ刻ニ浪士二人東作州筋に出候由四人ハ松山往來筋に出行申候院内之者歸り候得之何事も無之故安心なるよし人足躰之者四五十人計寺之裏に蘆を敷休足致居候是之定而出牢之者ト見へて顔色不宜候私も右近邊に罷越見留候ニ付有躰成事ニ候夜ニ入追々如何様之事仕出し様や難計候得共先今ハ誠ニ鎮靜ニ御座候
 一近邊之藩ハ孰をも小藩ニ而放火亂妨を見逃ニハムし候段殘念成る事ニ御座候

右之通ニ御座候以上

四月十一日巳ノ上刻(地圖略す)

〔全書〕

倉敷代官

櫻井久之助

右之者兼々奸徒ト盟國害を醸候條不埒之至ニ付加誅戮之處此節出陳中ニ付餘黨之者加誅戮本陳令放火者也

四月

元奇兵隊義士

倉敷村人共ニ

當所形勢を不願偷安姑息之説を唱へ小民國苦を不服段不屈之至ニ付自今規律節整いたし候様可仕事萬一等閑ニおゐてハ殿科ニ可行者也

四月十一日

元奇兵隊義士

四月十一日在府本藩奉行井上加左衛門は幕吏中に幕府の頽勢挽回を策して一橋慶喜を除き主上を配流し關東に割據せんと欲する者ある由を藩政府に報告す

〔尊攘録自筆狀〕

以別紙啓上仕候泰嚴院様泰樹院様御登體御下國並詰込御人數御減少之儀ニ付而之委細谷内藏允敷作右衛門に相含置候ニ付具ニ御承知被成下候御儀ト奉存候時躰ハ其後格別相變候儀も無御座候へ共先月廿七八日比ニも御座候哉江戸中之評判一橋公京師ニ而暗殺ニ御逢之唱專御座候ニ付早速探索家差出承合セ候處會津ニ而茂同様承込候由ニ而開老業御手許相伺候へ共何なる御用聞込茂無之多分浮説ニ而可有之之事ニ付先安心仕候然處安許定府御醫師小山元龍兼而懇意

之人に若年寄松平縫殿頭様御咄之趣之由ニ一橋公を除 今上皇帝を不奉配流候而之再幕威御挽回之期之無之由承候段申出言語ニ絶奉恐入候次第ニ而前條之浮説も元來此等之筋より胚胎し江戸中之希望より出候歟ト相考申候其外朝廷之命令此上紛紜之時之將軍職御辭退一刻も御東歸關八州を領御割據被爲在候へ之何之恐ルハ所茂無之杯ト申衆も御座候由惣而右様之御氣取ニ御座候へ之此許ニ而之 勅諭御遵奉杯と申筋之一切無之様ニ被相考申候自然是等之趣京地に相響候ハハ忽チ 逆鱗ニ被爲觸如何様之儀差發可申哉と造次も憂慮絶不申候間御尊骸御下國御人減之儀之御評決ニ相成度日々指を屈而御模様奉待候事ニ御座候此段爲可得貴慮如斯御座候以上

四月十一日

井上加左衛門

家老殿宛

中老殿宛

四月十一日日本藩江戸留守居澤村脩藏は佛國公使館を聖坂松平又七郎の邸内に移すことに決定せし由を報告す

〔諸雜御留守居録上〕

外國御模様爲探索今朝御用御頼外國組頭宮田文吉様は里内官右衛門罷出相伺申候處其後差而相替儀ハ無御座候由高輪せつこう所大半御出来ニ而英人入込候由同國ミンストルハ此節横濱に罷越度候へ共此後出府之節ハ直右方に入込可申由尤當月中ニ之皆御出来ニ茂相成候由ニ御座候
一佛國よりも宿寺替之儀申出聖坂松平又七郎様御屋敷之内切坪ニ而貳千坪程同國旅館ニ御治定ニ相成追々御普請御取掛ニ相成候由御座候

慶應二年

一英佛兩國方申入ニ而追々デネマルカト中國より使節渡來ムシ候由御座候
右之通御座候事

澤村脩藏

四月十一日

四月十二日閣老松平康直海陸軍御用取扱を命せらる

〔諸雜御留守居録上〕

寅四月十二日和泉守殿御渡

大目付に

周防守事海陸軍御用取扱候様被仰出候此段爲心得向々に可被達候事

〔慶應二年
風聞書〕

松平周防守

海陸軍傳習之儀業前研究之格別相勵速ニ用立候様心懸候之勿論ニ候得共萬々一平常衣服等彼之風習ニ押移り候儀有之候而之御國體ニも拘り且御不都合を醸し以之外御爲ふらも候間掛り若年寄兩軍奉行等厚く相心得聊心得違無之様被成度

思召ニ付此度兩軍掛り被 仰付候故御趣意御心得御取計被成候様被仰出候事

四月十二日持歸

四月十二日幕府兵を派して備中倉敷の急を救はしむ

〔慶應元年八月
京都大坂長崎探 索書〕

大坂ニ而財津民助手ニ入候書付寫(前文は四月九日の條にあり)

同(四)月十二日備前福山兩藩に御達ニ相成申候

一去ル九日夜備中倉敷陣屋に長州浪人ト相唱へ多人數及亂妨候由御代官より申出候ニ付人數出等之儀大坂表より相達候儀も可有之候得共差當り候儀ニ付而早々人數差出討領候様可致候

四月

右兩藩共同様之御達之由

同十二日夜

一藝州より同國城下大竹ト申島に炮臺夜中ニ築立候位之急普請之模様ニ御座候就而之兼而之因循藝藩之汚名諸藩ニ而も甚笑ひ居申候

同夜藝地御出張之中より倉敷に御繰出之御人數左之通り

步兵頭	戸田肥後守様
同斷	城織部
一	步兵大隊一組
一	小筒貳小队
一	大炮四挺

一右惣人數六百人戰士之向計之由ニ御座候尤下宿下之川より乗船寄より明迄大ニ混雜仕候大ニ勇々敷出立ニ御座候尤ウジナト申所々蒸氣船三艘ニ乗組參り申候何モ茂戰功之御座候御人數計之由ニ御座候
右之大略書取差上申候以上

慶應二年

四月十二日在藝本藩士赤尾嘉兵衛城市郎書を奉行荒木甚四郎鎌田軍之助に贈り長藝兩藩の關係及び我藩を九州方面の征長總帥に推さんとする形勢あることを報す

〔尊攘録探案書〕 (慶應二四月十二日藝發赤尾城書札同十九日藩の内一通)

別紙申上候今度脱走之南奇兵隊備中倉鋪暴動幾百五十人位ニ而御座候得之何も彼向ニ而懸仕候而聊ニ而茂腦汁を去り病毒も薄らき可申却而仕合ニ茂御座候へ共根元常藩より長州に御使者ニ參候底意ニ之初ニ御呼出日延願茂周旋仕候事ニ而夫と申候茂近年は長州に御恩儀之筋茂御座候由右之一昨年尾州侯御出張迄ハ舊來之御借金莫大御座候而年々御せり申來候處一昨年より其儀も相寛メ且大分之御辨利ニ相成候様内輪相働候哉ニ茂密々相聞且當御領中鐵山御借金之尻ニ之より長州より程能いたし引込申候由旁之跡を以て正藏將曹カ此正藏ハ去ル四日此間御部小監ト一同ニ上坂仕候其子細ハ此中御此處にてハ何分難差置夫故辻 寺尾生十郎本と周旋之辨列藩之見込より之内實行違居候由左候得之此節備中之暴動も兎角上坂仕言上之管ニて御座候 日を延し申候計策ともニ而ハ無之哉と疑惑仕候もの多く何レニしても備中に者手を付不申候而ハ難相濟何卒隣諸侯より懸いたし候ハ、無此上候得共如何程ニ可有御座候哉彼是混雜計當時之九州之總帥も不被爲在候得之彦根藩杯之別而此方様總帥をも被爲蒙仰かと申さぬ計之躰ニ意氣相見申候折節鹿端茂御座候事故此御大任社御親藩ならてハ決而相成間敷徳川家眞先ニ御旗を被進と申て社士氣茂振ヒ可申然之御親族之御下向か又ハ閣老方ニて茂御出張かと可成丈取合不申候處内輪承候得之前條之彦根藩田部金藏と申者閣老之方之内ニ兩公子ニ而も御出張ニ相成候様申上候共ニ而ハ無之哉兎角諸手此方様を押し立申候様ニ相考申候甚心痛ニ而事及切迫候ハ、彌以其論茂可有御座と何となく公平ニ否々立申候へ共右金藏と申ハ岩國邊も參り吉川ニ茂及論談申位之者ニ而當時ハ彦根留守居と同勤仕既ニ此節も赤川ニ對面仕義論も仕候趣ニ相聞申候惣躰京師大坂ニ懸ク探索方周旋仕彼藩ニて之用立居存外彼等か申分相届申候得之御心組之爲心遣仕候次第申上置候

一只今首藤大坂表より此表ニ着仕河口御國許に之夫々御建等も持參被差下候儀ニ而安心仕候へ共此許之儀も御座候而切角相認メ申事故此儘差出申候近日之様様次第ニ之尙急キ罷歸可申先取急キ如此御座候以上

四月十二日

城 市 郎
赤 尾 嘉 兵 衛

荒木甚四郎様
鎌田軍之助様

四月十三日幕府閣老板倉勝靜同松平宗秀勝手改革筋取扱を命せられし旨を達す

〔諸雜御留守居録上〕

寅四月十三日周防守殿御渡

伊 賀 守
伯 耆 守

御勝手御改革筋取扱被仰付之

右之通去月廿三日於大坂表被仰出候間可被得其意候事

四月

四月十三日淀藩主稻葉正邦老中に任せらる

〔御國江戸往來狀扣〕

以別紙啓上仕候

慶 應 二 年

去ル十三日於大坂表加判列且又美濃守ト名改

右之通被仰付候由御留守居方達有之此段爲可得貴意如斯御座候以上

四月廿五日

井上 加左衛門

三宅 藤右衛門 殿

御 家 老 中 宛

御 中 老 中

四月十三日長藩の脱走兵備中淺尾の陣營を襲ひ其一部を焼く

〔慶應二寅年 風聞書〕

四月廿一日

御用番周防守殿御登城前には蒔田相模守家来より差出候書付

相模守在所備中國領内井上寶福寺ニ屯集致し候浪士召捕方人數差向候處植谷之方に立退候様子ニ付板倉伊賀守様援兵
城中等手藩之趣ニ而引替ニ相成松平備前守様援兵三軒屋迄出張之趣ニ候得共未到着相成不申然る處賊徒引返し小寺山
に橋籠去ル十三日丑之刻致炮發候ニ付夫々人數等手配大小炮打掛ケ及戰爭候處賊徒より之大炮ニ而陳屋内左之通焼失
仕候

東之方

郡會所一ヶ所 組長屋一ヶ所

西之方

學問所一ヶ所 長屋一ヶ所 西門一ヶ所

右之通ニ御座候此上少人數ニ而戰爭之勝敗難計心痛候趣在所家来共より注進申越候相模守儀之兼而肥後守様は願濟之
上手人數召連去ル十五日在所表に出立仕候趣申越候ニ付不取敢此段申上候以上

四月廿一日

蒔田相模守家来

四月廿七日申越

小 倉 熊 雄

蒔田相模守隊依願御暇被下京地より直ニ出張致し候事

一 淺尾陳屋十二日夜燒拂申候事蒔田相模守十五日一騎ニ而相越候事

四月十四日在筑本藩吏秋吉久左衛門等は三條實美等の動止に關し幕府監察小林甚六郎との談話
の要領を藩政府に報告す

〔尊攘録五卿一件〕

慶應二年四月五卿登阪護送之儀ニ付取締として御目附小林殿下着一件之事ニ付秋吉久左衛門古閑當次書取

一 先月廿三日小林甚六郎殿博多へ着同晦日二日市驛へ轉陣之事

一 當月朔日小林殿宰府天滿宮參詣於休息所五藩御呼出付私共兩人罷出候處各藩一同御逢にて今般拙者當所御取締被仰付
諸事御委任被仰付候間見込ニ取計可申依之三條殿以下五人衆へ直ニ面談いたし幾度も信義を以説得いたし承伏之上浪
華ニ御連越ニ相成候段被仰渡候然處先頃御飛脚便に一と通申上置候通結局之御處置不相当只々浪華に御連越と申候而
ハ迎も御運ヒ付中間敷五藩一同申上候得共一回御聞入無之候事

慶應 元年

五三一

一同四日薩州黒田嘉右衛門列上下七十人餘着いたし交代之由ニ候へ共此際ニ付先詰之者共も暫時相滞都合人数百五十人計相詰居候事(水野溪雲齋在西手記には三十七人とあり)

一同五日薩藩高田平二郎参り昨日右黒田列着之段吹聴且今般御目附小林殿當所御取締として御下向自分存念を以三條殿列へ御説得有之承伏之上大阪へ御連越ニ相成旨過日御口達御座候處右之根元一昨冬尾張總督より天幕之命を以主人修理大夫様へ御預ニ付主人より家來へ大切之御預人ニ候間嚴重ニ守衛いたし候様被申付候間何れも大切ニ警衛仕居候處此節之儀天幕より之命ニも不相見第一主人より之墨付も無之小林殿御存意を以大阪へ御連越と申候而ハ武門之習何分御渡難中強而御連越ニ相成候ハ、壯年之者共いつれも必死之覺悟ニ罷在候間何卒臣子之分相立候様被成下度小林殿へ今日黒田一同罷出申入候處尤之事ニ付篤斗御熟考候様御返答有之候由右之前以打合可申之處昨日着掛御逢願出候處他出ニ付今早朝より罷出其儀届兼延引之段宜聞置吳候様演舌いたし候事

但小林殿より富次御呼出薩州申入之趣御直ニ被申聞候處大同小異ニて趣意同様ニ付略置候事

一同日筑前大岡勘之允寺田嘉兵衛参り今日薩州黒田嘉右衛門列拾壹人於二日市驛面會頼來候間應對いたし候處小林殿前件之次第邊境愚昧之者共何分承知いたし不申是非御説得御連越ニ相成候ハ、今度京都交代之同藩百人計其外ニも所々より聞付次第當所へ懸付候儀も可有之左候へハ壯年之者共如何成ル變事出來も難計併當分之處ハ愈以鎮靜いたし置候段小林殿へ申入筋を得至當之御運ニ相成候様有之度段御届申吳候様との事ニ付此旨御同方へ申入候段知せ候事

一同六日黒田嘉右衛門川畑伊右衛門堀直太郎三雲藤一郎参り小林殿五卿御逢説得之儀十二調申間敷先無用ニ屬候様相見候處強而不成事ニ御逢有之候而も於向方隨從之者扨より自然不敬之儀を加候も難計左候へハ公邊御役人衆ニ對し左様之儀有之候而之其儘ニも難聞且又御説得不相成候而ハ小林殿御職掌も難立五卿方へも幕府御役人之説得御用無之と申而ハ罪を一層被増候形ニ相成兎角無詮事ニ付御逢無之方可被宜見込候付存寄一ツニハ五藩申談小林殿へ申入候而ハ何程ニ有之候哉肥薩の間ハ外ならぬ御間柄ニ付先一應相談いたし存寄無之候ハ、各藩へ示談いたし候筈之由相談ニ付

右等之儀此許詰合限リニて難及返答御國元通議之上政府之旨を受返答可仕段申向置候事

但強而御逢有之候ハ、五卿住居所廻銃鎗を以守衛いたし候評決仕候間末々之者共雙方より申分引起共致さんかと相話申候然處小林殿ニも迎も御逢ニ相成候而も運ヒ六ヶ敷且隨從共自然不敬を加候様之儀出來候而ハ猶更不相濟事ニ付面會之儀差止候由富次迄御沙汰ニ付此旨薩州へ申通置候事

一同十四日於大阪關老方へ御預之五藩へ五卿護送いたし候様御奉書を以被仰渡候様早打ニて御申越ニ相成候段小林殿より富次御呼出御直ニ被仰聞候勿論極内分ニ付他藩へ不相洩様御沙汰御座候事
一小林殿も右之次第ニ付些と御職掌も立兼候様相成候間如何様卒御身分相立候様有之度一統咄合居申候處いまた取堅り候儀ニ無御座候事

一右者是迄之次第一と通御達申上置候間向後之處宜御差圖奉伺候事

四月十四日

秋吉久左衛門
古閑富次

四月十四日薩藩征長の兵を出すことを辭す

慶應元年八月
〔京都大探 索書〕
坂長崎探

薩州大久保一藏下坂ニ至し去ル十四日板倉様に参上拜調相願候處御用繁ニ而御逢無之御下城後罷出候様被仰付置御登城之上御城に罷出候様尙被仰付大久保登城ニ至し板倉様に言上之趣ニ去ル七日御達之趣ニ候得共長州御一舉ニ付而之昨年從御所將軍様に御上洛被仰出候處長州不容易企有之爲御征伐御進發有之此節も御所より寛典平穩ニ被仰出候得共幕府御處置振御相違之様ニ有之候付薩州ハ八人数難差出段申上候板倉様公用人迄書付も差出置候由然處板倉様御返答ニ之昨年御進發被仰出候へ之昨冬大小監藝州に被差越御詰問有之候處尾老公御處置之後謹慎罷在候由ニ付此節之御

裁許被仰渡管ニ而廣島表に被差出候へ共罷出不申猶被召置候且又此節御所置振從御所被仰出候趣ニ相違無之世上流言之區々有之候へ共於公邊屹度御伺取之上天幕御一致ニ被仰渡候管ニ有之追々被召候而罷出不申候へ之奉輕茂天幕不
得止御征伐被爲在候管ニ御評決ニ相成候段被仰聞候得共格別辭之無之候得共心服不仕候様子ニ而退出ハシ候由
但本文之通公邊ニ茂懇切ニ誠實を以御説得ニ相成候管ニ而當時御内評有之候由

右之通御座候以上

四月十七日

青地 源 右 衛 門
淺 井 新 九 郎

〔從京都來候探索書等〕

四月十八日板倉伊賀守様大阪御城に御呼出ニ付罷出候處内分薩州大久保市藏建白之次第被仰聞大久保十四日申上候大
意之趣御處置至當ニ無之候ハ、薩州人數差出不申昨年 朝廷より關東に御上洛被 仰付候處長州不容易企有之御征伐
として御進發ニ付 朝意御奉戴無之此節 朝廷より寛典被 仰出候處幕府長州之御處置振寛典ニ無之様傳承仕 朝意
御奉戴無之名義不立諸藩之議論有之御征伐之趣意相立不申候間先日御達之趣有之候得とも人數差出不申趣申上候板
倉様御返答ニ之昨年御進發之儀ハ左も無之候へとも 御所より御輕舉無之於華城御評議被凝候様被 仰付候間徳山岩
國被召候へとも罷出不申次第ニ而ハ矢張昨年も御奉戴之筋ハ相立居候此節之 御所より 被仰出候砌板倉様も御參
内ニ而御伺有之長之御處置振御齟齬之處之無之市藏傳承之趣之定而世上之申唱ニ可有之候間今日申聞候處を本趣意
ニ承候様懇切御理解被仰聞候へとも昨年御進發之處を固執いたし居候間篤斗重役共ニ之致相談可申様被仰聞候處重役
共一同再三再四勘考之上申上候事ニ御座候杯と申承服不仕候付板倉候理解之旨今一應重役に相談致候様被仰聞大久保
退出致候由大久保より板倉様御登城御留守公用人に建白差出候付直ニ御差返ニ相成候十七日猶薩州御留守居建白書持

參いたし板倉様公用人迄差出候へとも御差返相成公用人まで強而預置吳候様との趣ニ候得とも又御返今朝又々大久保
參上拜調相願候處御對客多有之先月已來之儀ニ候へ之幾度も同様ニ付尙勘考致候様公用人を以被仰聞候處大久保自身
よりも申上候儀有之拜調相願候間御透有之候ハ、御逢有管ニ候得共有様御對客繁ニ而御逢出來不申候付明朝罷出候様
被仰付置候由御内話畢而薩建白拜見被仰付候上薩州御隣國之事故國情等御尋見込も有之候ハ、申上候様尤重役に得斗
致相談置候様被仰付候事

四月十八日

淺 井 新 九 郎

〔慶應二年 風聞書〕

四月十五日

傳 奏業に松平修理大夫家來差出候書付大坂表ニ而之板倉伊賀守殿に差出候
即今内外危急之時勢防長御所置之儀其當否依 皇國之御興廢ニ相拘り候重事ニ而實以不容易御儀ニ候追々御達之趣も
被爲在猶又來ル廿一日迄大膳父子等被 召呼若今度御請不仕候得之御討入相成候ニ付其旨相心得御差圖奉待候様被
仰渡之趣承知仕候一昨年尾張前大納言様爲御惣督御差向伏罪之筋相立解兵迄相成候處却而 御譴責同様之御都合ニ而
就中神速 御上洛之 朝命御請無之而已ならぬ改而不容易企有之候由を以御直討被 仰出 御進發相成終ニ今日ニ至
り御討入之時宜相成候而之天下之亂階被爲開候事實明白なる事ニ御座候從 朝廷時勢相應之御所置を以寛典ニ被處候
御趣意も被爲在候處御奉戴無之由傳聞仕天下衆人物議喧々聞ニ不堪次第ニ御座候征伐之天下之重典國家之大事後世青
史ニ不堪名分大義判然相立其罪を鳴らし令を不聞して四方響應致し候様無之候而之至當ニ難申尤凶器之妄不可動之大
戒も有之當節天下之耳目相開候故無名を以兵機不可振之顯然明白なる譯ニ御座候況國人不可討と謂ニおゐて之却而撥
亂世之御職掌ニ而動搖を被釀出候場合ニ相當候前條天理と相戻候戰關於大義御受難仕縱令出兵之命令承知仕候とも不

慶 應 二 年

五三五

得止御斷申上候間虚心を以御聞届被下候様奉願候條右之趣京都詰重役共より申上候様申越候ニ付此段申上候以上

松平修理大夫内

四月十五日

木場傳内

右之通於大坂表

幕府に及御届候ニ付此段申上候以上

松平修理大夫内

四月十五日

木場傳内

〔尊攘録探案書〕

慶應二丙寅年
寅四月財津民助探案取書

薩藩大久保一藏板倉侯に建言之趣今日會藩外島機兵衛依田源治大野榮馬同席にて聞取之趣左之通

一當月十四日大久保板倉侯に拜謁いたし今般長州御再討之儀之如何之譯ニ候哉己ニ一昨年尾州老公ニ伏罪仕候間最早御征伐ニ相成候儀之無之且亦今度御處置之一條ニ 朝廷より之寛典被仰出候處幕府ニ而之不怪重典ニ而 朝廷之御思召と之大ニ相違仕候間全く 朝廷之 御趣意と幕府之御處置筋之違却仕候事ニ而其を以御處置ニ相成候而之幕府之御爲ニも宣敷有之間敷薩藩ニ而之此節人數差出候儀之御斷申上候段申出候

板倉侯御答ニ之今度長州御再討ニ相成候儀ハ尾州公に伏罪後不容易件々有之候間御再討御進發ニ相成昨冬永井侯初出藝ニ而御不審之件々御詰問ニ相成候處備後介より件々辯解仕候間其段御聞上ニ相成今度之御處置之一昨年尾州公に伏罪いたし候處ニ立戻りニ而之御處置ニ而元より 朝廷ニ之寛典被仰出候處幕府共を矯候儀之決而無之 朝廷御一致ニて御評決ニ相成候間其儀ハ明白成事ニ而 朝廷之 御思召と相違杯之事之全道路之風説信用いたし候儀無之段懸々御

説得ニ相成候處大久保も言届シ猶重役ニ申談可仕其儀之書面ニ而申遣候而もよろしく御座哉伺候處書面ニて不苦候間其身之滯留いたし候様被仰付候事

一同十八日朝飯後罷出拜謁願候處御差合ニ而書附丈ク公用人手元迄差出置其夜五ツ比猶罷出拜謁願候處今晚之御面會無之段被仰候處是非拜謁願候得共明朝罷出候様との事ニ而御面會無之其儘引取候事

一同十九日罷出拜謁仕猶切迫ニ御再討之名義相立不申且 朝廷と寛猛之間相違仕候段申上候間兩件然と御説得ニ相成候處其ニ之閉言仕候へ共別紙之件々往々幕府御失躰之儀數へ上ク論談仕候間御失躰之儀之御謝罪ニ相成御職掌御斷も相成候位ニて其砌兩閣老ニ之御答被仰付何茂御一新ニ相成今度御所置ニ相成候段巨細御説得ニ相成候得共更承服不仕重言論談仕候間重役ニ罷出候様左候ハ、委細説論可仕段被仰候處其儀之御受申上筋々被仰達候様申上候間留守居之方は御達ニ相成申候得共差出候書面之御差返ニ相成候得共強而差出候間公用人手元ニ被差置候由先十九日迄之儀之右之通ニ御座候

一十四日拜謁之節重役に書面ニ而申遣候返事之未々相分不申候由
一此節之儀之其方重役迄之見込ニ有之候哉と御尋ニ相成候處修理大夫大隅守ニも兼而其存念ニ有之候段申上候由
一板倉侯御思召ニ之重役罷出御説得ニ相成承服不仕候ハ、君侯ニも御召ニ相成候御含ニ有之候由
右之通御座候以上

四月廿日

財津民助

別紙 堤省三面會今日聞取之趣

一薩一件ニ付十八日夜松浦越中守様上京ニ相成此元大久保申上候件々一橋様は申上ニ相成其上ニ而島津伊勢を橋府御召ニ而一應御説得ニ相成其上伊勢下坂之由ニ候事

四月廿一日

慶應二年

別紙 大久保申出候件々

御再討之事

大膳並五卿江戸へ召之事

御書付御戻之事

攝海異船來ル時大名召之事

條約 勅許之事

廿七日迄の期限ニ罷出候ハ、大旗被進との事

兵庫開港之事

四月某日徳永主税長崎奉行に任せらる

慶應二年正月

〔長崎返達御用狀扣〕

四月廿日小川次郎助より

長崎表御當番方御達之寫並同所廻狀前寫別紙差廻候間則差進申候以上

御達書貳通之寫

徳永主税事長崎奉行被仰付近々江戸表立可致旨江府より申來候間爲心得相達候

寅四月(略中)

右御當番方筑方御屋代より廻狀爲知來候事

四月十六日備前藩備中の暴徒を追討し捕虜の言によりて賊狀を審にす

〔從京都來候探索書〕

備中國賊徒追討之儀ニ付備前侯方之御届書寫

松平備前守

此間内追々御届申達候於備中國倉敷淺尾及亂妨候もの共之儀ニ而昨十五日申達候以後川舟にて安江川乘下り龜島ニ而海船に乘替沖之方へ乗出候分有之亦之領分福田新田並ニ備中國之内へも上陸いたし候様ニ相聞候付早速人數手配申付精々探索致せ候處所々ニ而生捕討取候もの人數共今日迄之處別紙之通御座候精々穿鑿いゝし居候へとも先此段御届申達候以上

四月十六日

長州藩柳部坂太郎支配

一生捕

西岡 龍 太 二十五才

一同

同イ 長尾 喜代熊 十六才

一同

防州 山本 茂一郎 十四才

一同

同 石田 惠 十七才

一打取

防州熊イ 淺尾 正之助 三十四五才

一福田新田畑中に手負行倒死一人

但右之通届出候後首ハ公義御役人見分之上御取歸被

成候由村役人カ申出候死骸のミ殘居候

取持合印奇兵隊 浦上 爲吉忠成

右之通御座候以上

四月十六日

備中ニ而亂妨之浪士備前より船五艘ニ而乗組出帆之折柄蒸氣船ニ而歩兵隊參り三艘打碎キ貳艘ハ打漏し行衛相知不申彼是六十人餘り有之由御座候

一長藩奈川何某當月十五日出藝州に參此度御呼出之内廿日頃迄ニ之出藝いゝし候筈ニ付而之多人數之義賄萬端之儀頼談いたし置罷歸候由ニ御座候

一昨日騎兵隊之内藝州より罷歸御用品相分兼候得共若や出藝之注進ニ而も有之哉之事ニ御座候

慶應二年

五三九

一浪士兩人召捕相成御吟味御座候處左之通申出候由

大將
 益田 主稅義昌 十七才
 福原 仁直直弘 十八才
 國司 民衛 十五才

益田家臣
 八木九郎右衛門 十八才
 平井權平 十九才
 高山又熊 十七才
 木山忠七郎 六十四
 秋山彌兵衛 二十三
 本ノマ、五七兵衛
 國司家臣
 國司主計 十七
 島田兵庫 十九
 白石間之允 四十
 一田彌藏 三十一
 玉田 九兵衛 三十
 柴岡 一學 四十九
 清水五左衛門 十八
 坂野折一郎 五十七
 立野新左衛門 四十三
 同 大七郎 十四
 岡谷 李右衛門 十九
 江見 波右衛門 十七
 同 五左衛門 十三
 梶原 三郎兵衛 三十

同 伊豆 十七
 京極 原左衛門 五十

福原家臣
 福原 廣人 三十三
 中田 忠左衛門 三十五
 佐々木 文珠太 十三
 藤原 太内 五十一
 同 保兵衛 十五
 諸國より之浪人大將之者
 正木 但馬 四十九
 同 源五左衛門 二十
 熊谷 七郎兵衛 十四
 右者頭分之ものと申事ニ候眞偽不相分候よし
 西岡 龍太 二十五
 長尾 喜代熊 十六
 安倍 民衛 二十七
 同 岩右衛門 二十五
 同 八市 十八
 安倍 奥左衛門 十九
 字津木 三郎 十七
 同 四郎 十五
 河野 金兵衛 三十
 右兩人召捕相成候よし以上之連申出候よし也

右書付内々手入候付乍急書早々寫取指上申候乍併最早御存之御事之段計兼候へとも寫取候まゝ指上申候事

安 木 眞 平

四月十七日薩藩の守衛兵太宰府に着す

〔水野溪雲齋在西手記〕

同(四)十八日

薩藩幕吏到着之報知有之候付別段爲守衛大山格之介引卒し鹿兒島壯士都而三十五人野戰砲三門蒸氣船より昨夕博多へ着岸今日宰府入込候事
 同廿二日
 薩藩大山格之介始三十五人今日參殿拜調有之候事

各一統拜調後大山格之介登人別段拜調今般幕吏下向ニ付爲其守衛人數増被差出候旨兩君公より御口上之趣申上候
 四月十八日日本藩京都留守居井口呈助は長兵倉敷襲撃に關する情報を得て在京重役に報告す

〔從京都來候探索書等、
慶應元年八月 慶應二寅年
 京都大探索書、
 坂長崎探索書、
 尊攘錄探索書〕

(前略)

- 丹龜山侯より所司代に御達
- 一去十日曉寅之下刻到着
 - 一備中連島より上船五十人計下津井より百人計都合百五十人計倉敷御陣屋に押寄發炮仕候事
 - 一曉六時觀瀨寺へ楯籠候事
 - 一御陣屋燒捨即死人有之候其外手負多分有之候事
 - 一跡船着次第夫に賊押寄候趣

慶應 二一年

一賊之總督大橋兵右衛門ハ啓之助と申者之由
右大橋ハ本之名啓之助と申説も有之此一行イニナシ

朽木近江守

長防禦取懸之儀ニ付而ハ兼而御取締筋之儀相違候趣も有之候處毛利大膳家來南部屯集之内百四五十程去ル四日夜脱走
いふし候由大膳より届出候右之同十日備中倉敷御代官所及亂妨今以近郷に致横行候趣ニ付猶厚相心得其領分へ立入
候節之連ニ可打取候尤最寄領主之相互ニ應援不打洩様可。致候

四月

紀州七里飛脚より差出候寫

四月九日八時備中倉敷御代官所浪士二百人計入込御役人不殘首を取。候由其跡に火を懸ケ燒拂尤女人其外入牢致居
者杯ハ相助け役人死體ハ皆々燒失いたし候今其五時ニ浪士引取妙見山觀瀾寺と申寺に引籠居候由御届御座候尤倉敷
町ハ別條無之。右浪士と申ハ六印之由風聞

右之節ハ藝州に御越留守之由

倉敷御代官ハ櫻井久之助殿

右ニ付四月十二日夕出立

御目附
松原謙藏

別紙倉敷一條書付ハ紀州様七里より見分罷越差出候寫也

松原謙藏殿ハ十二日夕御城より御出立之事

但右一條ニ付蒔田相模守様御人數出張之處二三日ハ構吳中間敷夫より因州路に罷越候趣浪人共より申居候由

昨十五日淺尾表陣屋より申越候ニハ領内井山寶福寺に屯集いたし候浪士共一向退散之様子無之候間猶又去ル十二日家
來共及應接早々退引可致候様左も無之候ハ、討手差向可申旨申聞候處當寺立退横谷邊迄罷越候間左様承知いたし候様
申聞其夜戌刻比立退候段寶福寺より以使僧陣屋へ届出申候其後雇人足貳十人計穴栗より罷歸り又々浪士嚴重ニ同所に
陣取候段申出候付備前岡山援兵御差出被下候様使者罷出夫々堅固ニ相守候處に翌十三日曉八時比探索之者罷歸小寺山
に屯集いたし候旨申出候然處同所より鯨波を揚及發炮候間是よりも大小炮打懸候處浪士ニ而も發炮及戰爭居申候段早
打を以同所家來共より申來候間相模守様出張留守中ニ付此段私より不取敢御届申上候以上

蒔田相模守家來

四月十六日

小倉彌太夫

彦根藩日下部内記出藝道中川部宿より同藩に差越候書面寫

書附得御意申候然ハ去ル十日之夜倉敷に長州奇兵隊之者之内百五十人計ニ而備中繩湯と申處より上陸櫻井久助殿陣
所燒拂十二日淺尾へ罷越十三日燒拂住居向ニ一同休息此時備前より凡人數千四百五人計差出備中松山等よりも差出淺
尾脇モンデンと云小庵ニ而備前人數應接今四ツ時比終ニ浪人共人數引拂ひ川部堤通倉敷の方へ立去申候庭瀨燒拂候杯
風聞ニ而甚嚴重ニ庭瀨ニ而ハ控居候由往來被是六ヶ敷乍然差支無御座一左右迄如此ニ御座候委細着之上可申上候早々
已上

四月十四日午刻過

日下部内記

今村忠左衛門様

一長州浪士倉敷十二日夜出立仕候夫より備中井山寶福寺に其夜桶籠り候節ニ陣太鼓陣鐘ニ而罷越候處ニ右井山寶福寺よ
り淺尾に使者相立候而白米兵糧として差出候右井山寶福寺其夜出立仕候と見せ懸候上夜九ツ時比出立懸ケニ淺尾陣屋
に大炮打込燒拂死人數不知右ニ付松山庭瀨より板倉も追々兵勢繰出しニ相成。候今ニ浪士引取候場合ニも相見不申候

慶應二年

五四三

由探索之者より申出候

四月十三日辰之中刻出

向々浪士松山に楯籠有之様子玉島陣屋昨十二日夜焼拂候哉之風聞も有之候而夫より庭瀬板倉攝津守殿より彼浪士押立候様子ニ御座候右ニ付板倉驛ハ勿論國中大騒動仕候得共他領より之御加勢無之

姫路世子にイ
酒井 河内 守

毛利大膳家來南部屯集之内百四五十人計當月四日夜致脱走候由大膳家來より申出候旨松平安藝守より届申出候右ハ去十日備中倉敷御代官所に及亂妨其後近郷横行致居候趣ニ付別紙之面々夫々討手被仰付候得とも此後賊増長ニ而ハ不容易儀ニ付御暇被下候間早々發足可被致候尤姫路城之儀ハ兼而御宿城ニも被仰出候事故御警衛筋夫々及差圖人數ハ早々差出其後賊之形勢ニ寄其方儀も出張諸家討手之家來にも指揮致し速ニ討手平候様被仰出候也

四月十四日伊賀守より

大目付

御目付に

松平謙兵衛

松平 三河 守
關 伊勢 守

覺

三浦 備後 守
木下 備中 守
伊 守

毛利大膳家來南部屯集之内百五十人計當月四日之夜致脱走候由大膳家來より申出候旨松平安藝守より届出候趣者去ル十日備中倉敷御代官所に及亂妨其後近郷横行居候趣ニ付人數差出早々討取候様可被致候尤松平備前守板倉伊賀守に之先達而討取被仰付旨可被得其意候旨相達候間爲心得相達候事

地役觸寫

町奉行に

松平 伯耆 守
酒井 若狹 守
青山 左京大夫
松平 又七郎
朽木 近江 守
織田 美太郎
九鬼 大隅 守
谷 大膳 亮
牧野 讚岐 守
京極 飛騨 守
小出 伊勢 守

五四五

長防御取懸之儀ニ付而之兼而御取締之儀相違置候趣有之候處毛利大膳家來南部屯集之内百四五十人程去ル四日夜脱走ハシ候旨大膳より届出候右者同十日備中倉敷御代官所に及亂妨今以致横行候趣ニ付猶厚相心得其領分ニ立入候節ハ速ニ可打取候尤最寄於領主相互ニ應援不打洩様可致旨右之面々に相違候間得其意御料所之儀之各より最寄御代官所に爲心得可相違候

四月十六日

板倉攝津守

今度備中倉鋪御代官所に賊徒及亂妨候付早々人數差出速ニ追討可致旨松平備前守板倉伊賀守に相違候間可被得其意候

右四月十三日於大阪御達

稻葉民部大輔殿御事當月十三日御懇之以上意御加判之列被仰付將又美濃守と改名有之候

右之趣爲心得相違候以上

四月十六日

右之通御館入安木眞平より知せ來申候ニ付此段御達仕候以上

四月十八日

井口呈助

三宅藤右衛門殿

四月十八日我藩京都留守居井口呈助は薩藩の出兵拒絶に關する同藩海江田武次會藩上田傳次及ひ一橋家川村惠十郎の談話を綜合し薩藩一旦違命の萌を露し來りたる上は頗る警戒を要すべき旨を報告す

〔京都大探 索書〕
慶應元年八月
坂長崎

昨十八日薩州屋敷海江田武次に面會一應會抄之上申候之近日大久保一藏下坂板倉開老に書附を以今度長州御處置之儀徵慮之重疊寛典之思食ニ而幕府御決議之趣之全致齟齬居候付若長州召ニ不應候共國許より人數差出候儀ハ御斷申上候段申出同公に拜謁を茂いハシ存意之趣委細申上候處徵意之致齟齬候との文言之削候様被仰聞候得共此儀全人數差出御斷申上候主意ニ付削候儀之難相成と相拒開老茂御心配ニ而書付御請取ニ相成是より御沙汰ハ可有之候間先退出ハシ候様被仰聞其儘今以何之御沙汰茂無之定而御取揚ニ相成可申歟と存候由申聞御國之如何御處分之筈ニ有之候哉と問合ニ付弊藩之去十二月十日限小倉表に出張之儀被仰出候付其儀之御斷軍御目付御警衛旁物頭再三輩領分鶴崎表に差出置右同所之兼而番頭以下差越置候事ニ付御討入と中期ニ至候而之問拔無之様責口押寄可申心得ニ有之干今其通之覺悟ニ可有之歟と存候貴君御尊之通朝幕御齟齬と申儀之是迄一切承込候儀茂無之獨り朝幕御一致而已ニ無之貴藩を初御同然ニ而既ニ一昨冬來大久保一藏於藝州周旋いたし候節茂矢張隱居削地相當之見込ニ有之候段及承居何程之儀ニ有之候哉と咄台候處昨秋來於幕府難相濟御非政筋稜々有之獨り長州之罪を御糺ニ相成候而者罪を以罪を伐と申ものニ而彌以輕典ニ就キ不申候而之幕府茂難相濟段申候ニ付朝廷より禁國發炮之罪を被正候儀ニ而幕府之罪を以長州之刑典を輕重被致候而ハ幕府之私事と相成朝憲之難立儀ニ而如何ニ役人心得あしく候迎犯人之罪を輕ク取扱候様之儀之弊藩杯ニおゐてハ承及候儀茂無之何様朝幕御齟齬と申儀之其儘聞捨難相成定而屹と御伺取ニ茂相成候證迹可有之支無之候ハ承度左候ハ同道又ハ一人ニ而茂都合ニより直ニ其向に承合せ相違茂無之儀ニ候ハ屋敷重役にも申聞屹と國許之覺悟可相成事ニ付承度段申候處其身ハ機密ニ係り候身分ニ而無之證跡之處ハ承居不申大久保ハ右不容易儀を申立候事ニ屹と踏有之事と相見候間同役新九郎より大坂ニ而承合候様之手續ニハシ候様有之度との儀ニ而先引取候事

一階 敷引取後上村彦次郎に出會前文之趣申聞右之表分推出候事柄ニ付會藩に罷越如何存居候哉承合可申と同道公用方上田 次に出會一通咄合候處當時下坂いたし居候外島機兵衛より來翰有之一藏儀前文之主意書付板開老下宿に差出候處折節登城時

候様との儀ニ付則御城に持參之處御披見ニ相成此節御處置之儀朝幕御一和聊御動無之

慶應二年

五四七

御副詰申儀決而可有之様無之如何之證據を以右様之儀申立候哉御討察之處全躰去年御上洛之儀被仰進候處其命を不被奉御進發被仰出候儀を初彼是御違却之儀を相唱前條之確證逆之不申出候付書付御差返篤斗重役共へ茂申談可申御手許に茂猶御勘考御沙汰之次第可有之との事ニ而退出いたし夫より御目附に罷越右書付強而差出置候ニ付御時節柄餘り荒まかしニ相候而成之如何ニ付篤斗條理を以御說得可有之思召之段申來候書翰見せ申候ニ付如此不容易儀を表向申立候ニ付而之御說得位之事ニ有之間敷屹ト確證を出シ申候敷重々恐入候迄之御察討茂無之而之難相濟儀ニ可有之段傳次に話合候處薩重役島津伊勢儀承知不致譯之有之間敷直ニ罷越問合可申段傳次より及噂其儘引取候處追而御小屋に紙面參居問合之儀ハ見合即夜浪華に飛脚を立彼表ニ而屹ト埒を付候様申越候由申來候事

一同夕久留米藩に罷越候處一橋府川村惠十郎參候付右之一件略彦次郎より咄合申候處既ニ承知いたし居尤一藏重墨恐入候段申來格別懸合之様子ニ而無之趣左候得之右三等之說を以參考仕候ニ海江田話之吾藩を尤ニ咄シ橋府に之閣老御手際ニ而橋府御安心ニ相成候様潤色有之會に申來候所大躰事實敷ト考察被致候何様薩ハ兼而嫌疑を受居候末違命之萌をシ此上ハ如何成不意之儀出來候茂難計屹ト御覺悟之實相立不申候而之御大切之時宜ニ立至候茂難計御座候事

四月十九日

井 口 呈 助

四月十九日薩藩大久保一藏更に閣老板倉勝靜に謁し薩藩出兵拒絕の理由を陳述す

〔從京都來候探索書等〕

一十九日大久保市藏板倉様に參上拜謁尙又書付差上候付公用人手元まで預置薩州軍役へ罷出候様被仰付筋々に御違有之候由

一前文拜謁仕候節市藏申上候件々左之通
一御再討之事

一大膳父子並五卿江戸に被召候事

一御書付御戻之事

此條將軍様始而御上洛之節 御宸翰下候筈ニ候處幕府より御差返ニ相成候様ニ申出候由

一攝海に異船來候節大名被召候事

一條約 勅許之事

一九月廿七日長州御征伐之被仰出之事

一兵庫開港之事

右之件々於幕府御失禮有之候付長之罪のミ御責ニ可相成筋も無之趣を以申上候間板倉様御存無之事も有之候間有體ニ被仰聞篤斗調置可申段被仰聞候由會桑より承り候事

四月廿日

淺 井 新 九 郎

〔慶應二年 風聞書〕

薩州ニ而申立候廉書之由

一御再討被 仰出候事

此廉一昨年尾老公御解兵ニ相成其後御上洛有之候様從天朝被 仰進候處御拒其後 御進發 御再討被 仰出

天朝御趣意と御齎御不都合之事

一大膳並三條實美江戸に御召之事

此廉天朝 思召ニ無之處右様被 仰出御不都合之事

一御進發ニ付 御上洛 天機御伺之節 勅旨之趣直ニ 大樹公御沙汰之處 大樹公 玉座御下り 叡旨御書付ニ御願御

慶 應 二 年

五四九